

習志野市就学前 保育一元カリキュラム



平成31年4月

習志野市就学前保育一元カリキュラム

【目 次】

I	指 針	・ ・ ・ ・ ・	1 ～ 19
II	発達のみちすじ表	・ ・ ・ ・ ・	20 ～ 27
III	教育・保育計画	・ ・ ・ ・ ・	28 ～ 30
IV	指導計画	・ ・ ・ ・ ・	31 ～102
1	月齢別指導計画	・ ・ ・ ・ ・	33 ～ 58
2	期別指導計画	・ ・ ・ ・ ・	59 ～102

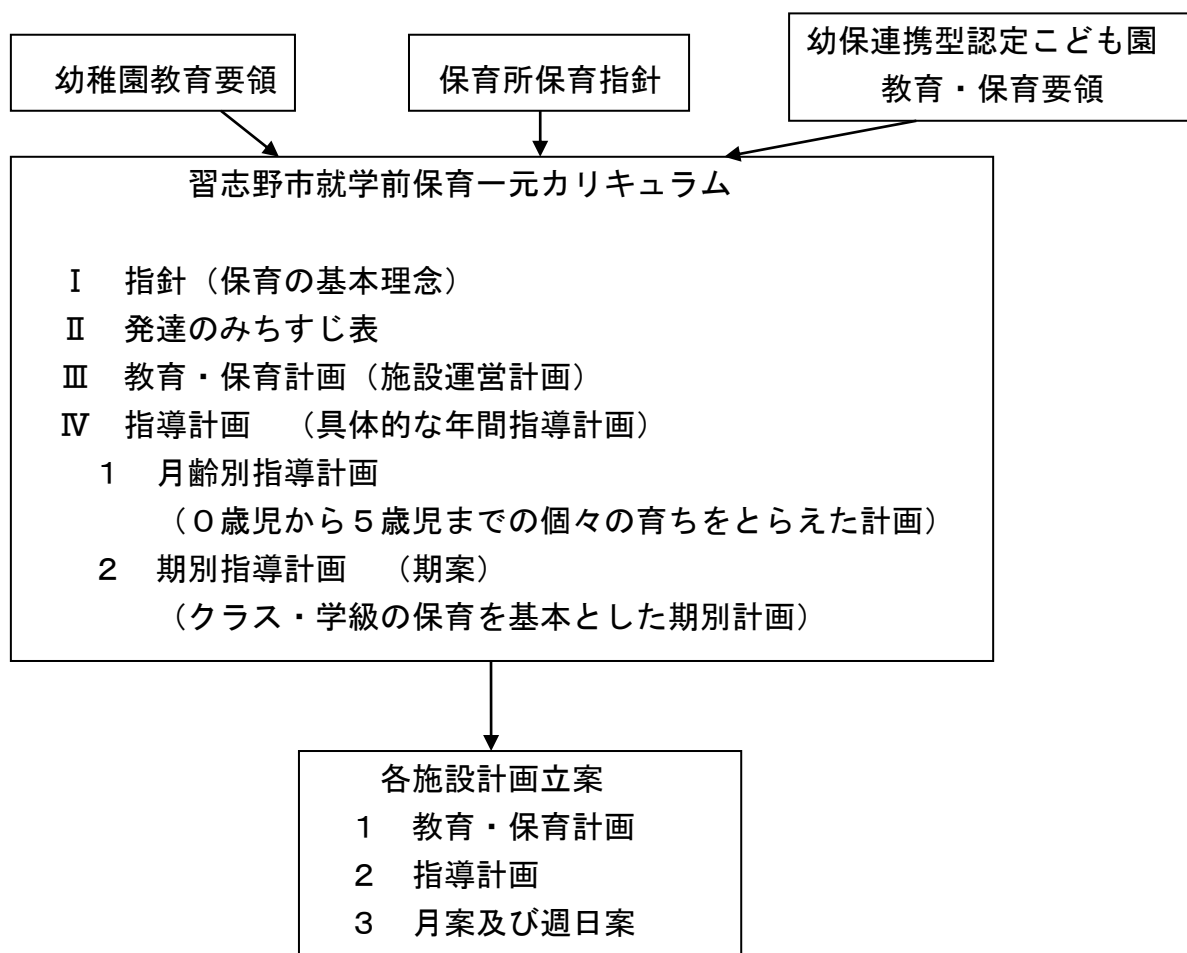
習志野市が目指す子ども像

- 1 明るく元気な子ども
- 2 友達と仲良く遊べる子ども
- 3 よく見、よく考えて行動する子ども

習志野市の未来を担う子どもたちが、健全に成長できることを最大の目的として、本市の目指す子ども像を実現するために、ここに「習志野市就学前保育一元カリキュラム」を策定し、本カリキュラムを教育・保育の基本として定める。

就学前の保育にかかわる各施設〔保育所・幼稚園・幼保連携型認定こども園（以下こども園とする）〕は、本カリキュラムを基本とした上で、子どもや保護者の状況、地域性などを踏まえた独自性のある計画を立案し、保育を実施する。

【習志野市就学前保育一元カリキュラムの構成】



I 指 針

習志野市就学前保育一元カリキュラム指針

目 次

第1章 総則

1 趣旨	1
2 理念	2

第2章 内容

第1節 保育一元化

1 保育の基本	3
（1）共に生き、育ち合う保育観	3
（2）個性と社会性の育成	4
（3）発達と学びの実現	4
（4）一人一人に応じた保育	5
2 保育内容	6
（1）発達のみちすじの区分	5
（2）発達のみちすじと保育課題	7
（3）保育内容の構造	7
① 健康・安全	8
② 基本的安全感	8
③ 基本的生活習慣	9
④ 集団生活経験	10
⑤ 自然・社会体験	10
⑥ 遊び	11
⑦ 表現・文化体験	12
（4）保育の計画	13
（5）保育環境	13

第2節 子育て支援センターとしての役割

1 子育て環境の変容への対応	14
2 特別保育事業	14
3 子育て支援事業	15

第3節 オープンな運営

1 運営の基本	16
2 運営の内容	16

第1章 総 則

1 趣旨

- (1) 「習志野市就学前保育一元カリキュラム」は、習志野市の全ての就学前の子どもたちが、人権を尊重され、豊かな生活を享受し、健全な人間形成の基礎を培うことを目指して、保育所・幼稚園・幼保連携型認定こども園（以下こども園とする）が、幼保の枠を超えて新しい時代の教育・保育、子育て支援及び運営を創造するにあたっての方向性や基本的視点を示す指針である。

- (2) 習志野市の子どもたちは、現在の子育て世代の保護者の考え方や生き方を反映して、情報に敏感に反応しつつ、様々な形で自己を表現して活発な生活を送っている。

しかし、一部、心身ともに弱い面が見られ、たくましく生きる力を十分に培っているとはいえない。

このような状況の中、一人一人の子どもが、地域の中で皆から愛され、健やかに豊かな生活を楽しむことを保障されて、その子らしく心身ともに健全に発達し、意欲的に学ぶようになる環境を、社会全体として整えていくことが大切である。

- (3) 乳幼児期は、人間が最も成長、発達し、人間としての基礎が形成される極めて重要な時期である。

保育所・幼稚園・こども園は、幼保の枠を超えて、子どもが発達のみちすじに沿って成長することを保障する保育内容を構築し、実践していく必要がある。

習志野市として、保育所・幼稚園・こども園が共通した保育の理念、基本を掲げ、家庭、地域と協同して、健全な人間形成の基礎を培っていく「保育一元化」を推進していく。

- (4) 少子化、女性の社会進出などに伴ういろいろな保育ニーズの高まりに応じて、地域での特別保育事業を拡充することが求められている。

また、核家族化、地域コミュニティの希薄化などに伴って、未就園児親子の中には孤立感、閉塞感を感じる人達もいる。そうした状況を緩和するために、親と子の育ちを支援する子育て支援事業をより充実することが求められている。

保育所・幼稚園・こども園は、それぞれの施設と機能を活用して、地域における「子育て支援センターとしての役割」を実践していく。

- (5) 保育所・幼稚園・こども園は、子どもの人権を尊重し、運営・経営方針、教育・保育計画の公表に基づいた、保護者や地域住民の積極的な参画、参加を得ながら、保育、子育て支援をよりよく実践する「オープンな運営」を行っていく。

保育者、保護者、地域住民が保育、子育て支援の実践の中で子どもと対話し、子どもに共感することによって、子どもを中心に互いに感動する体験をし、成長し合うことが大切である。

2 理念

- (1) 全ての就学前の子どもたちの人権を尊重し、保育所・幼稚園・こども園が家庭、地域と協同して「子どもたちが、基本的安全感、健康で文化的な生活、豊かな遊びを保障されて、心身の調和のとれた発達をし、健全な人間形成の基礎を培う」ことを実現する。
- (2) 保育所・幼稚園・こども園と家庭、地域とが「子育てパートナーとして互いに信頼し、子育ての場を共有し、子育ての情報を交換し、相談し、交流することによって、子どもを中心に様々な感動の体験をする」ことを実現する。
- (3) 保育所・幼稚園・こども園が、家庭、地域の参画、参加を得ながら、「安全な環境、確かな保育、オープンな運営を目指すことによって信頼され、子育てにおいて安心できる地域の中核的専門機関となる」ことを実現する。

第2章 内 容

第1節 保育一元化

1 保育の基本

習志野市の全ての就学前の子どもの保育の基本を次のように掲げる。

**「基本的安全感、健康で文化的な生活、豊かな遊びを保障することで、
一人一人の子どもの心身の調和のとれた発達と、自分らしく学び、
生きることを実現し、その子らしい個性と社会性の基礎を培う」**

この保育の基本の実践にあたっては、下記のような認識で取り組む必要がある。

(1) 共に生き、育ち合う保育観

大人が子どもを理解し、子どもに対応することの根本は、全ての子どもの人権を尊重し、大人と子どもが対等な権利の主体として向き合い、共に生き、育ち合う関係であるという基本認識をもつことにある。

大人が主体で子どもが客体となり、一方的に教え、教えられる関係だと考えるのではなく、また、子どもを主体として大人は単に援助者として対応するという、単純な子ども中心主義に陥ってはいけない。

大人と子どもは共に社会の構成員であり、大人は子どもを丸ごと受け止め、主体として向き合い、子どもと対話し子どもに共感する中で、共に生き、育ち合う関係であると考えなければならない。

子どもが自分にとって必要なものや、価値あるものを探し求める姿から、大人は子どもの内面の思いを要求の表現として読み取り、子どもと共に考えたり、考えを膨らませたりしていく。そして、子どもが自分にとって必要なもの、価値あるものを選び取り、成長することに大人は感動し、共に育ち合うということが大人と子どもの対話的關係と考える。

子どもの様子を見ていると、子どもは変化し続ける存在であり、子どもの伸びる力は無限である。子どもは自分の体験を通し、試行錯誤しながらいろいろなことの意味を見つけ、新たなやり方を学んでいく。大人は子どもの気持ちに寄り添いながら子どもの世界を拓いていき、子どもが気付くことに大人も気付いたり、一緒に活動したりすることで感動し、大人自身も成長することが共感的関係と考える。

子どもは、物事に夢中になる。そのような子どもの創造的な姿は、格別な楽しさを大人に与え、大人を幸福にする力をもっている。大人が子どもと一緒に活動・経験することは、本当に楽しくて面白いことである。保育所・幼稚園・こども園は、子ども、保育者、保護者、地域住民が、互いに対等な主体として向き合い、感動を共有し、共に生き、育ち合う場となることが大切である。

大人は、常に自分の考え方、生き方を見つめ直し、生涯にわたって生きがいのある日々を過ごしていくために学んでいく姿勢をもつことが大切である。そのような真摯で勇気ある大人と関わる中で、子どもは人間として成長していく。

(2) 個性と社会性の育成

人間は生涯にわたって発達し続けることから、可能性に満ちた存在と言える。

子どもは、生まれると同時に、家族と関わり、次第に遊び仲間や近隣の大人、保育者などと

の関わりの中に出ていく。その関わりの中で、集団、社会などにおける考え方や行動の仕方を身に付け、社会的環境に適応していくことによって社会性を身に付けていく。

また、子どもは生まれながらに身体的資質や心理的特性をもっており、集団の中での自分の役割についての受け止め方、果たし方にそれぞれ違いが表れるようになる。そうした個人の独自性を形成しながらも、集団の中で自己統制できる人間として成長し続けることによって個性を身に付けていく。こうした社会性と個性を身に付けていく過程は相互に影響し合うものである。

人間が健全な社会的存在として成長し、自己実現していくには、社会性と個性がより合わさって身に付き、バランスよく発達することが必要である。

乳幼児期は、子どもたちが生涯にわたり自分らしく生きていくための基盤を培う大事な時期である。

- ・子どもは、大人や友達に十分に受け止められ、人間や社会に対する愛情と信頼感がもてるような体験をすることが必要である。
- ・子どもは、人間として、自立できると共に自律できるような確かな体験をすることが必要である。
- ・子どもは、様々な人間関係の調整の仕方とその意味を知り、自分に自信をもち、友達との関わりが楽しくなるような体験をすることが必要である。

こうした豊かな体験を積み重ねることによって、一人一人の子どもが、その子らしい個性と社会性の基礎を培っていき、健全な人間形成をしていくことができるように保育をすることが大切である。

(3) 発達と学びの実現

子どもたちをどのように保育していくかについては、子どもが自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に行動して問題を解決する能力、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましい体力などの生きる力の育成が大切である。生きる力の育成には、子どもたちがどのように発達し、学んでいくかのプロセスを保育者は知っていることが必要となる。

子どもは、自分の中に育ってきた力を使って、興味、関心に沿ってチャレンジし、取り組む中で生じる様々な困難や葛藤を試行錯誤しながら克服することによって、新たな知識・能力・態度を身に付け、発達する。

子どもは、やってみたいと心が動く→やってみる→繰り返す→なるほどと分かる→繰り返す→やっぱりと納得する→次の生活に生かすという営みを通して学び、学ぶ力を身に付ける。

発達は学びを通して確かなものになり、学びは発達の中で起こるものである。保育の中で、発達と学びを実現するには、子どもの欲求がその子どもの能力とよくかみ合うかどうかを見て、発達のみちすじに沿い、現在までに身に付けている程度より少し進んだことへ挑戦する活動・経験を保障していくことが大切である。

保育の出発点として、就学前の子どもの発達についての基本を理解することが不可欠である。

① 発達のみちすじには順序性があり、全ての子どもに共通する。

すでに獲得したものの上に新たな知識・能力・態度を積み重ねながら順序を追って発達が進む。その時々活動・経験を楽しく十分に行うことが、次の活動・経験をスムーズに行えることにつながる。

子どもが、発達のみちすじのどのあたりにいるかを把握し、見通しをもった保育をすることが大切である。

② 発達のみちすじには質的転換期が存在する。

質的転換期は身体的、知的、心理的な力が相互に影響し合って、全体的に大きく変化する

る時期のことで、子どもの発達を理解する上で大切な節目である。

1歳半頃に始まる自我の芽生えの時期、3歳頃からの第二自我の形成が必要となる時期、そして4歳過ぎの自我と第二自我の自己内対話の始まる時期は、身体的、知的な発達と合わせて全体的な変化の時期であり、質的転換が見られる。

- ③ それぞれの面での発達は、子どもによって異なる速度で進行する。

「〇〇ができる、できない」「〇〇が早い、遅い」といったそれぞれの面での発達だけを取り上げ比較する見方では、子ども一人一人の発達を理解するのには十分とは言えない。

子どもの発達のみちすじに照らして子どもを全体的によく捉え一人一人の子どもの行動や表現の本質を理解して、一人一人の子どもに応じた適切な保育をすることが必要である。

- ④ 身体的、知的、心理的発達は、相互に関連している。

身体的、知的、心理的発達は、互いに深く相互に影響を与え合いながら関連し合って相乗的に進んでいくものである。一人一人の子どもを丸ごと受け止めて理解すると同時に、身体的、知的、心理的な発達のそれぞれの課題を把握した上で、効果的な保育をすることが求められる。

- ⑤ 発達は、生理的、身体的な諸条件や、文化・地域社会・家庭環境の違いによって進み方や現われ方が違う。

子どもの身体的な特徴や子どもが生活している社会的、文化的背景、家庭状況を把握して、子どもの生活経験がそれぞれ異なるものであることを認識して、保育をすることが大切である。

(4) 一人一人に応じた保育

子ども一人一人に応じた保育は子ども一人一人の基本的安全感、健康で文化的な生活、豊かな遊びを保障し、健全な心身の発達と意欲的な学びを実現することである。

一人一人の子どもが発達のみちすじのどこにいるのか、そして、その時々が発達の課題は何かを掴み、その子がチャレンジし乗り越えて達成感をもつようにすることである。

その積み重ねによって子どもは育つ。一人一人の子どもが育つと集団は活性化し、一人一人の子どもの更なる成長を促す。

一人一人に応じた保育の根本には次のような基本認識がある。障がいのある人もない人も、互いに支え合い、地域で生き生きと暮らしていける社会を目指すという考え方の中で、心身に障がいのある子どもや慢性疾患のある子どもに対する様々な行政の支援策が行われている。

保育所・幼稚園・こども園は、子ども一人一人について家庭と相談しながら、教育諸機関や保健・医療・福祉関係機関との連携を積極的に図り、相互協力、相互活用の推進に努める。

保育所・幼稚園・こども園は一人一人に応じた保育の効果的な実践として、複数の保育者が担当するチーム保育を適切に取り入れることが大切である。

多くの目で見ることによって子どもの理解が深められ、子どもにとっても保護者にとっても、多様な保育者との出会いができ、子どもの生活が豊かになり、広がりが生まれることが期待できる。保護者もみんなに見守られているということで安心感がもてる。

子ども一人一人に応じた保育の実践にあたっての留意点は、次のようなことである。

- ① 自ら伸びていく力を持っている存在であること、身体的特質や心理的特性があることに温かい関心をよせて見守る。
- ② 表わす行動の意味を探り、内面の心の動きを捉えながら、発達に必要な活動・経験とは何かを見据える。
- ③ 心の動きを読み取った記録や反省が重要で、その積み重ねの中で子どもを長い目で見続け

ていく。

- ④ 環境との関わりの中で様々な心を動かし、探し求めることに保育者は共に心を動かし、共に探し求め、乗り越えるための知恵を出し合う。
- ⑤ 試行錯誤し、気付くことに保育者が寄り添う。
- ⑥ 集団の中でかけがえのない存在として安心して自己発揮できるように、個と集団のつながりを大切にしながら保育をしていく。
- ⑦ 一人一人の保護者との心のつながりを大切に、考え合い、話し合う姿勢をもって接していく。
- ⑧ 支援を要する子どもは、地域の中で育っていくことを意識し、保護者や関係諸機関と連携を図る。

2 保育内容

(1) 発達のみちすじの区分

発達は、一定の速度で進んでいくというものではなく、発達の度合いが量的に増え、力が蓄えられていると思えるような時期がある一方で、発達に質的变化が見られ、全体的に新しい力が身に付くという時期がある。

発達のみちすじについては、子どもの身体的、知的、心理的発達が相互に関連して全体的に質的变化を見せ、いろいろな新しい力を獲得する時期によって、乳児前期・乳児後期・幼児前期、幼児後期の4期に区分している。

① 乳児前期（0歳～1歳半頃）

基本的信頼感が確立し、それを基に自我の芽生えが始まる1歳半頃までを乳児前期としている。

この世に誕生して、身体的には、1歳半頃までに立つこと、歩くことができるようになる。知的には、一語文を獲得し、大人の言語が理解できるようになり、1歳半頃になると大人の簡単な質問に指さしを用いて応えられるようになる。これは発達上の質的变化の大切な指標である。

心理的には1歳半頃までに特定の養育者と触れ合い、言葉をかけてもらい、世話をしてもらうことで基本的信頼感をもつようになる。

② 乳児後期（1歳半～3歳頃）

自我が活発化する時期の1歳半～3歳頃までを乳児後期としている。

身体的には、十分歩けるようになり、しゃがんだ姿勢で移動でき、物を本来の使い方で扱う対象的行為が活発化する。

知的には、話し言葉が飛躍的に拡大していき、言語で認識し、考える力が育ち始め、いろいろな探索活動が活発になる。

心理的には、子どもの接する世界が広がり、大人とのコミュニケーションを楽しみながらも、自我が拡大し、「ナニ」「イヤ」という言葉を連発して、何でも「ジブンデスル」と強く自己主張する。また、言われることには「ヤダー」と抵抗するようになる。

③ 幼児前期（3歳～4歳頃）

二つの自我が葛藤し、なかなか自己決定することが難しい3歳～4歳頃を幼児前期としている。

身体的には、3歳頃になると歩行はあおり動作と踵、つま先歩行が可能になり一段と巧みになる。尖指対向操作も確立して運動、手指操作が一段と活発になる。

知的には、話をしている人を見て、話が聞けるようになり、興味深いものが登場する絵本を見たり、読んでもらったりすることを楽しむようになる。色・音・文字・数・量・形

に興味をもち、違いに気付くようになる。

心理的には、自我に次いで規範の自我といわれる第二自我が育ってきて、二つの自我の間で葛藤するようになる。概して、他人に厳しく自分に優しい態度を示したり、他の人の考えや言動について分からないでぶつかったりと、様々なトラブルに見舞われるようになる。

④ 幼児後期（４歳～６歳頃）

自己内対話能力が形成される４歳～６歳頃までを幼児後期としている。

身体的には、４歳頃には走る・跳ぶ・登るなどの動きが一段と活発になり、手と足、右と左、更に目と手の協応運動、指先の機能の分化が進み全身運動が本格化する。

知的には、話し言葉が一応の完成期を迎える。話し言葉はその後も発達し、５歳頃には人の話を聞いて自分の気持ちや経験を話すことができるようになる。

また、４歳頃には思考、認識の手段としての言語機能が確立し、次第に行動を自己統制する手段としての言語機能が発達し、５歳頃にはしっかりしてくる。

さらに、４歳頃から文字・数量・図形等に関心が強くなり、５歳頃には次第に簡単な文字や記号を読めるようになり、自分の名前を書くようになる。

心理的には、４歳頃から自我と第二自我を自己内対話させて自己判断、自己決定することができるようになる。「…シタイケレドモ…スル」という形で気持ちを切り替えながら、生きる力を獲得していく。

（２） 発達のみちすじと保育課題

保育の展開にあたっては発達の基本を念頭において、発達のみちすじの区分における個々の発達の課題を総合的に考えて受け止め、どのような活動・経験を具体的に保障していくかという保育課題に基づいて、実践していくことが重要である。そこで、子どもの身体的、心理的、知的発達等のみちすじを明らかにするとともに、その時々保育課題を確認し「発達のみちすじと保育課題（別表）」として取りまとめたので、これを活用し、より確かな保育を展開するものとする。

「発達のみちすじ表」（別表）

① 発達のみちすじと保育課題＜乳児前期（０歳～１歳半頃）＞

② 発達のみちすじと保育課題＜乳児後期（１歳半～３歳頃）＞

③ 発達のみちすじと保育課題＜幼児前期（３歳～４歳頃）＞

④ 発達のみちすじと保育課題＜幼児後期（４歳～６歳頃）＞

（３） 保育内容の構造

保育内容は、保育の基本を踏まえ、子どもの目に見える活動だけでなく、内面の精神的なものを含んだ主体的な活動・経験を通して展開されるものである。

子どもが自らの興味、関心に沿って、人、自然や出来事にかかわり、身体や感性、知性を働かせ、困難を乗り越え、そのことの意味や仕組みについて理解できるようになる活動・経験を積み重ねることが重要である。

その子の発達のみちすじに沿った活動・経験を保障すると、子どもは楽しい経験をし、達成感を味わい成長する。そうした活動・経験は、生涯にわたる人格形成に大きな影響をもつ乳幼児期の原体験ともいえるものである。

保育内容の構造は、保障しなければならない、いろいろな活動・経験を大きくまとめて7つに分類し、発達のみちすじに沿って位置づけたものである。

保育内容の構造の分類としては下記の通りである。

- ① 健康・安全 ② 基本的安全感 ③ 基本的生活習慣 ④ 集団生活
⑤ 自然・社会体験 ⑥ 遊び ⑦ 表現・文化体験

＜保育内容の構造図＞

(分類)	(活動・経験)						
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
	乳児前期		乳児後期		幼児前期		幼児後期
健康・安全	健康状態の把握、健康診断、予防接種、環境保健、衛生管理、障害、疾病異常等への対応						
	施設・設備、遊具・用具安全点検、事故防止、防災訓練、安全指導、事故等への対応、交通安全						
基本的安全感	自己肯定感、		自己コントロール力、			居場所	
	基本的信頼感の育成		自我の育成		第二自我の育成		自己内対話能力の育成
基本的生活習慣	睡眠、食事、排泄、清潔、着脱と挨拶、身の回りの整理、人の話を聞く態度						
集団生活経験			お手伝い		行事参加		当番・係り
自然・社会体験			自然・社会体験、集団散歩、飼育・栽培活動、異年齢・異世代交流				
遊び			主体的遊び			課題遊び	
表現・文化体験			音楽、絵本、描画、造形、運動				文字、数量の知識、概念

① 健康・安全

子どもたちを日常的に保護し、世話をすることにより、子どもたちの生命の保持を図り、日々健康で安全に生活できる保育を目指す。

保育所・幼稚園・こども園は、子どもの健やかな心身の発達を保障するにふさわしい、安全で快適な環境づくりを目指さなくてはならない。

そして、環境の管理による事故の防止や、子どもに危険予知能力を身につけさせる安全教育についての取り組みを、家庭によく理解してもらい、子どもの心身の状態について情報を交換し、子どもの健康と安全を守ることについて家庭と協同する事が大切である。

保育所・幼稚園・こども園では、子どもの体調の変化や事故による怪我など、緊急時の対応や保護者への連絡方法などについて、保護者と申し合わせておく必要がある。そして、その時々での対応の情報は職員間で共有され、文書として保管される必要がある。

イ 健康管理として、健康診断とその事後処理、身体測定、健康観察、健康相談、疾病や事故の予防、救急処置、カウンセリング等を適切に行う必要がある。

ロ 環境の管理として、施設や設備、用具などの衛生的な側面と安全面からの管理を適切に行う必要がある。

ハ 給食の管理として、従事者の健康管理と給食施設、設備及び食品、食器の衛生管理を適切に行う必要がある。

ニ 安全教育として、子ども一人一人の発達に応じていろいろなことにチャレンジさせ、子ども自身が危険予知能力を身に付けるという事故防止能力の体得に取り組む必要がある。

ホ 交通安全教育として、日々親と子どもを対象に丁寧に実践していく必要がある。

ヘ 地震、火災や不審者侵入などに対する訓練を適切に行う必要がある。

② 基本的安全感

子どもが安定して日々の生活を送り、自己肯定感をもち、自己コントロール力を身に付

け、自分の居場所を確保できるような自己形成ができる保育を目指す。

基本的安全感とは、子どもが周囲の大人や友達から肯定的に受け止められており、情緒が安定して、日々の生活を積極的に送り、自己の存在に対して絶対的な安心感をもっていることである。そして、子どもが帰属意識を抱いている集団の中で、自分の居場所を確保しており、周囲の大人や友達もその存在感を実感できていることである。

このような基本的安全感を育てるためには、周囲の人々が、子どもの存在自体を肯定的に受け止め、それを、言葉や態度・表情で表現し、子どもに伝えることが重要である。

子どもが何かをしたときに、大人がその結果に評価を与える前に、子どもの存在自体に対して、肯定的評価を伝えることが大切である。子どもはそれによって、「自分はかけがえない存在である」「自分は自分であっていい」ということを確信するようになる。

また、家庭の中のみでなく保育所・幼稚園・こども園の中で、地域の人々との関わりの中で、周囲の人々が子どもの存在を認め、その子どもの役割を認めることである。そうすることによって、子どもは役割を努め、居場所を確保し、本人も周囲の人々もその存在感を実感することとなる。

この基本的安全感の形成は、1歳半位までの特定の養育者との時間をかけたスキンシップによる基本的信頼感の確立から始まる。

それをベースに1歳半頃からの自我の発達につれて、子どもが素直な意思表示ができるように大人の丁寧な対応が大切となる。

一方で、3歳頃からの、社会に適応する知性としての第二自我の形成については、子どもが背伸びしてやってみようとする土壌をつくるなど、段取りを良く考えた大人の子どもへの対応が大切である。

4歳を過ぎる頃から、子どもが自我と第二自我を自己内対話させて「…シタイケレドモ…スル」と自己判断、自己決定することができるようになるように、大人ができるだけ自己選択の機会をつくるなど、主体性を尊重する対応が必要である。

自己内対話能力の育成は、生涯にわたる人間として生きる力の核心となるものである。

一貫して必要なことは、周囲の大人が子どもの思い通りにいかなかった時に、見守り落ちつくまでゆっくりと待ってやることである。そうすることで、子どもは自分の感情や行動を自己統制する自己コントロール力を身に付けることができるようになる。

子どもは人間として生きる力を、大人や友達と生活を共にする中で培っていく。子どもが自分の世界を広げようとする欲求を大人は的確に受け止め、一緒になって探求し、乗り越えていくことに付き合い、対話する必要がある。

また、大人や友達がその子の気付くことや感動することに真剣に向き合い、共感することが大切である。

③ 基本的生活習慣

心身ともに健康で、文化的な生活を営み続けていく上で、人間が人間として生きていくために必要な、基本的生活の仕方を身に付けることができる保育を目指す。

基本的生活習慣は、食事・睡眠・排泄・清潔・着脱の5項目に加えて集団適応としての挨拶、身の回りの整理、人の話が聞けることなどの習慣である。

子どもは、基本的生活習慣を毎日の生活の中で特別な努力なしに容易に行えるようになり、親や保育者に依存することが少なくなると、一人の人間として自立性を増す。それが子どもの自信を強め、いわゆる身辺自立につながっていく。

基本的生活習慣の育成の時期は、子ども一人一人の発達のみちすじに沿ってなされるものであり、大人がモデルとなって、子どもの自発性を助長し、温かく見守り、出来る喜びを感じさせ、身に付けることで快適さを体験させることである。

子どもの、生理的欲求にあった24時間を見据えた生活リズムを確立し、規則正しい生活をするのが大切である。

子どもの生活リズムの確立にあたっては、子どもの発達のみちすじに沿って、保護者が家庭での生活リズムを整えること、保育者が保育所・幼稚園・こども園での生活リズムを整えることが協同して行われる必要があり、大人たちの配慮と工夫が大切となる。

④ 集団生活

子どもが集団生活を経験し、友達との関わりの中で存在感もてる行動の仕方を自分のものにしていくことができる保育を目指す。

子どもはみんなの中の一人である自分を体験し、自分の願いを実現するには、集団の目標やルールについて知り、集団の中で自分の役割を果たす必要があり、友達の行動と自分の行動を調整しなければならないことが分かってくる。

それは、子どもの主体性・自制心・協同性・規律性・責任感・連帯感・共感性・行動力・表現力・予測能力などの社会的態度を養うことにつながる。

当番や係で友達と協力することや分担することによって、子どもたちは、集団の中での自分の役割意識を身に付けることができるようになる。

協力とは、目的に向かって子どもたちみんなで力を合わせることによって、目的が達成され、それが自分のためでもあり、皆のためでもあるということを体験することである。

また、分担とは、やること全体を理解して、それぞれが一部分を引き受けることによって、全体がスムーズに進むことを体験することである。

子どもたちの集団活動が進んでくると、集団としてのまとまりが見られるようになり、集団としての仲間意識が育ち、全体としてさらに集団活動が活発化する。

行事は、子どもにとって季節感を感じたり、地域との関わりを意識したりするものであり、文化的、総合的な活動として重視する必要がある。また、行事は子どもの情操を育み、感性・知性を養い、役割意識や仲間意識を育て、保育に変化と潤いを与えるものである。行事を精選して、子どもたちの発達のみちすじにおける集団生活の文化的、総合的活動として工夫して行うことが大切である。

⑤ 自然・社会体験

子どもが体で感じ取っていくという具体的な直接体験を通して、豊かな感性、知性、たくましい体力を育てる保育を目指す。

子どもが様々な感覚を使って、「面白い世界がある」「感動的な世界がある」ということを、体で感じ取っていくという具体的な直接体験をすることができるように、保育者自身が感性や意識を磨き、豊かな自然・社会体験の機会を積極的につくりだす必要がある。

保育所・幼稚園・こども園を取り巻く自然との子どもの関わりを多くすることは、自然の持つ偉大さ、美しさ、不思議さなどに直接触れることを増やす。一方で、地域の公共施設・農園・商店街などのいろいろな催し物や出来事などに参加、見学することは、面白いこと、楽しいこと、意外なこと、感心することなどに出合う場となる。

具体的直接体験は、子どもの心が安らぎ、豊かな感情・好奇心・思考力・表現力等を培うのに役立つ。

自然・社会体験の原点としては、散歩があげられる。子どもたちが地域を知り、季節の移り変わりに触れ、気力を養い、持久力などの体力を付けるのに良い機会となる。

保育所・幼稚園・こども園で植物を栽培し、収穫して味わったり小動物を飼育したりする体験を一年の季節を通して積み重ねることによって、子どもたちはより一層、生命の逞しさと尊さに気付き、様々な感覚を味わい感動する。また栽培・飼育を通していろいろな

方法を考えたり集団の中での役割意識などを身に付けたりすることができる。

地域の高齢者やいろいろな大人・大学・高校・中学・小学生との異世代交流は、子どもたちの生活を広げ、豊かにする直接体験として積極的に取り組んで行く必要がある。

自然・社会体験の実践にあたっては、保護者や地域住民に積極的に参加してもらい、共に楽しむことが大切である。特に、ボランティアとして各種直接体験のガイド役、世話役などを務めてもらうことは、子どもの体験をより豊かにするものとして大切である。

⑥ 遊び

子どもにとって遊びは生活の中心である。健やかな心身の発達や学びに有効な豊かで楽しい遊びを系統的に実践する保育を目指す。

保育者は、遊びの仲間・時間・空間を適切に保障することが重要である。

遊びの本質について、次の点を確認し、保育を実践していきたい。

- イ 遊びは、年齢に応じて楽しむことができ、面白さを追及する活動である。
- ロ 遊びは、自主的、自発的で自由な活動である。
- ハ 遊びは、身体的、知的、心理的諸能力の発達を促す活動である。
- ニ 遊びは、人と人とを結ぶ活動である。

遊びはこれらを総合的に含んでおり、それぞれが相互に作用している。

子どもの発達のみちすじに沿って、遊びの発展過程を系統的に理解し、子どもにとって適切な遊びの環境をその時々につくり出す必要がある。

それらの遊びは、関係あるもの同士が互いに作用し合い発展していくものであり、子どもの遊びは発達のみちすじに沿って多様になり、質的に高く、ダイナミックになっていく。

遊びの実践の中で、保育者の子どもへの関わり方は多様であるが、おおよそ次の4つに分けられる。

イ 子どもたちの遊びを見守る場合

保育者は遊びの発展の見通しをもつ必要があり、環境を整え、道具を準備する必要がある。

ロ 子どもたちが遊ぶ姿を見守り、必要なときに助言をする場合

常日頃からどのタイミングで何を話すか、どのように提案するかを検討する必要がある。

ハ 遊びの一員として加わり、必要がなくなれば遊びから抜け出す場合

保育者が遊びの中に入り、子ども一人一人の様子を把握し、遊びの発展の様子を注意深く見守る必要がある。

ニ 保育者が子どもの遊びのリーダーになって遊びを進める場合

保育者は自ら遊びのリーダーとなり、楽しさを十分に味わわせる必要がある。

⑦ 表現・文化体験

音楽・絵本・造形・描画と運動及び文字・数量・図形についての知識・概念などを身に付けることで子どもの生活や遊びを豊かにする保育を目指す。

子どもがそれらに取り組むきっかけになるのは、遊びや生活の中で大人がやっているのを見たり、年齢の高い子どもたちや周りの友達がやっているのを見たりして、自分もやってみたい、できるようになりたいと思うからである。

子どもが、それらの表現・文化体験に取り組み、経験することが、身体的・知的・心理的諸能力の発達に役立ち、子どもの生活や遊びを更に豊かにすることから、子どもの発達

のみちすじに沿って、遊びや生活の中にいろいろな表現・文化体験を取り込んで保育をする必要がある。

音楽・絵本・造形・描画などで、子どもは様々な感覚を使って感性を養い、表現する力を伸ばしていく。子どもは、運動を活発に行い運動能力を高め、身体の表現する力を伸ばしていく。

音楽・絵本・造形・描画・運動は、子どもの目や耳・指・手などの感覚器官と運動神経が、ある程度素早く協応できるように心身が発達してきて、興味・関心をもち、やりたくなったときに組み入れる環境を整えておくこと、自主的、自発的に組み入れるようにしていくことが大切である。

また、それぞれ独自のやり方が必要な活動・経験であることから、地域住民のボランティア等の専門家を招いて学ぶ環境づくりをすることや、保育者が専門的な指導を受けてそれを子どもに伝えるというような環境づくりをすることなど、十分な段取りをして取り組む。

音楽・絵本・造形・描画・運動等は活動や経験を精選し、それが子どもたちの興味、関心に沿うように工夫して実践することが大切である。

子どもの発達のみちすじに沿って、文字・数量についての知識、概念の修得についての流れがある。

言葉を獲得した子どもに絵本の読み聞かせをすると、子どもは空想を広げ、もっと楽しもうという思いをもち、自分で字を読もうとする。文章を読めるようになると、文字を書こうとするようになる。

また、遊びの中で、人数を数えたり、必要な道具を数えたりするうちに、増えたり減ったりすることで量が分かるようになり、数字を書こうとするようになる。

こうして、子どもが発達のみちすじをたどって成長するとき、遊びや生活の中で文字や数を使って表現したり、伝え合ったりする喜びを味わいたいという要求が膨らみ、自ら覚えようとしたときに、読み・書きや数量の修得につながっていく。

このような、子どもの表現活動が活発化する過程を踏まえ、就学までに次のようなことを身に付けておけば、その上で、就学後に教科学習として文字を習い、文章を書くことや、数量を習い、計算をすることなどへ子どもたちがスムーズに移行していけると考える。

文字や文章学習の前に身に付けておきたいことは、㊦人の話を聞いて概ね理解でき、自分の気持ちや経験をある程度人に伝えられること㊧描画と身振りによる表現能力が、ある程度付いていること㊨音節分解と音韻抽出ができること㊩菱形が描ける程度に自由に線が引けること㊪絵本をある程度読めること、などである。

また、数量や算数学習の前に身に付けておきたいことは、①10程度の数概念がわかっていること②物と数を対応させながら唱えられること③数あるものを一つにまとめて考えられること④たくさんある中から一定数を取り出せること⑤物を一つの要素に着目して、順序だてて整理できること⑥物は加えたり減らしたりしていない場合は、量は変化しないことが分かっていること、などである。

このような発達のみちすじを保育者がしっかりと理解し、子どもが文字や数量に十分触れられるような環境をつくりだすこと、一人一人の子どもの身体的・知的・心理的発達と興味・関心に応じて、子どもが自分なりの思いを十分表現したり、伝えたりできるような確な働きかけをすることが大切である。

また、保護者に対して、子どもの発達のみちすじに沿った文字や数の獲得の過程についての理解を得ておき、保護者の子どもへの対応についての考え方を確かめ、協同して子ども一人一人の状況に応じていくことが大切である。

(4) 保育の計画

保育を実践するにあたって、様々な活動・経験を一日の生活の流れの中で保障しようとする計画が必要である。

一人一人の子どもの24時間の生活が、本当に健康で文化的なものになるためには、子どもの目線で子どもの意向を踏まえた計画の作成が大切である。

生活の作成においては子どもの発達のみちすじと保育課題を踏まえ、子どもの生活のリズムに応じて、遊びや行事、表現・文化体験、自然・社会体験、当番・係り、給食などがバランスよく位置付けられる必要がある。

戸外で思い切り体を動かして遊ぶ活動を積極的に取り入れ、体と手・頭を使った主体的能動的活動を質・量共に充実することにより、健康な体と心を育てていくことが重要である。

また、温かな雰囲気の中で子どもたちが集団生活に慣れ、いろいろな人たちと楽しく関わることを子どもたちに保障することで、社会生活上のルールや道徳心を身に付けていくようにしたい。できるだけ生活の段取りを子どもたちに説明したり一緒に考えて決めたりする中で、子ども自身が毎日の生活の流れを身に付け、見通しをもって生活できるように配慮することが大切である。

(5) 保育環境

保育環境は、物的環境・自然環境・人的環境・社会環境など、子どもを取り巻いている全ての環境を指し、極めて多くの要素からなる総合的なものである。

子どもは自分の内側に育ってきた力を使おうとし、その力を使うのに適した環境に出会えば興味・関心をもって取り組むが、適した環境でなければその力を使うことができず、発達の機会を逃すことになる。

それだけに発達に必要な活動・経験を保障する適切な保育環境が構成されなければならない。環境の構成にあたっては、子どもの視点に立ち、子どもの興味・関心を読み取り、子どもが自己課題をもち、主体的に活動できるように構成していくことが大切である。

子どもにとって冒険・探索・秘密・創造・想像・挑戦・感動・憩いなどのいろいろな思いが遂げられやすい環境づくりをすることが大切である。また、保育者として子どもたちのさまざまな資質・能力を育むような環境づくりが課題となる。

保育の実践の場では、子どもたちが前日の生活の中でどのような活動を展開し、その中でどのような経験をしているかを見取り、それを踏まえて、当日に活動・経験させたい内容にふさわしい環境を構成していくことが求められる。そして、子どもの生活や遊びの流れに応じて、柔軟に環境を変化させていくことが必要となる。保育者は子どもとの信頼関係を基に、子どもと共に良い保育環境を創造していくことが大切である。

第2節 子育て支援センターとしての役割

1 子育て環境の変容への対応

子育て環境の変容に対応して、保育所・幼稚園・こども園は、それぞれの施設と機能を活用して、地域の「子育て支援センターとしての役割」を実践していかなければならない。即ち、少子化や女性の社会進出などに伴ういろいろな保育ニーズの高まりに応じて、地域での特別保育事業を充実する。

また、核家族化、地域コミュニティの希薄化などに伴って、未就園児親子の中には孤立感や閉塞感を感じる人達もあり、そうした状況を緩和するために、親と子の育ちを支援する地域での子育て支援事業を強化する。

2 特別保育事業

(1) 特別保育事業の内容

特別保育事業は大きく二つに分類される。

一つは、もともと保育所等を利用していた人達の生活をより豊かにするためのサービスであり、時間外保育や乳幼児健康支援、一時預かり事業（病児保育、病後児保育など）が典型的なものである。

もう一つは、従前はサービス対象となっていなかった人達に対する新たなサービスであり、一時保育・地域子育て支援型のサービスである。

一時保育事業には、いろいろなジャンルがある。在宅子育て層への支援については、社会的理由から私的理由へと拡大している。

今後、こうした特別保育ニーズはますます複雑、多様化するだけに、それに対応して行政が制度的な整備や施設機能の整備・充実を図ることが大切である。

① 時間外保育

② 産休明け保育

③ 病児及び病後児保育

④ 各種一時保育

イ 保護者の就労形態等により、家庭における育児が断続的に困難となり、一時的に保育が必要となる非定型的保育

ロ 保護者の疾病、入院等により、緊急一時的に保育が必要となる社会的理由による緊急保育

ハ 一時的に保育が必要となる私的理由による保育あるいはリフレッシュ事業

⑤ 預かり保育

(2) 特別保育事業展開の留意点

① 通常保育と特別保育は、それぞれの子どもにとっては連続した生活であり、子どもの生活のリズムが崩れないように、保育者の配置、連携が行われる職場運営に留意する。

② 特別保育の中でも、子どもの発達のみちすじに沿って子どもにとって必要な環境を設定していく。保育者間での話し合いが十分に行われる中で育てられるようにしていく。

③ 子どもの心理的、身体的負担に配慮し、家庭での生活と同じようにつろげる部屋を用意し、地域での生活と同じように内・外などでの自由な遊びができる環境を整えるようにする。

④ 保育者は、保護者に特別保育事業のシステムをよく説明する必要がある。保護者と保育者が共通理解を図り子育てパートナーとして協同するために、親が子どもを預ける目的は何か、どんな日数・時間を考えているのか、今まで家庭での養育はどうしていたのか、子どもに対してはどのように教育・保育をして欲しいと思っているのかなどを十分に確認して、預かる必要がある。

3 子育て支援事業

(1) 子育て支援事業の内容

保育所・幼稚園・こども園は、施設や機能を地域に開放して、協同して子育て支援活動を展開し、特に、各地域の未就園児親子の育ちと学びについての支援を強化する。

① 遊び場提供事業——— 施設を開放し、遊び場として提供し、遊びの指導、乳幼児同士の

交流などを行うと共に親同士の交流を促進する。

- ② 子育て相談事業—— 子育てについての様々な相談に応ずると共に、専門的な相談のための対応を行う。子育て支援課やひまわり発達相談センター、あじさい療育支援センター、健康支援課との連携をとり、様々な体制でケアしていく。
- ③ 子育て学習事業—— 子育てについての情報の提供、育児講習会の開催など学習の場や機会を提供する。また、地域その他機関の子育て支援活動についての紹介などを行う。
- ④ 子育てサークル事業—— 子育ての様々なサークルづくりの支援を行うことやサークルの場の提供などを行う。

(2) 子育て支援事業展開の留意点

- ① 保育所・幼稚園・こども園は地域の未就園児親子の育ちに対して、実態を把握したり、アンケート調査をしたりして、ニーズに沿った対応をする必要がある。親子が気軽に出来るようにすると共に、友達や子育て仲間を容易につくれるような工夫をしていく。
- ② 保育所・幼稚園・こども園は未就園児の来園促進にあたっては、施設・設備の再点検や安全面の工夫をしておく必要がある。また、未就園児の来園に際しては「保護者の責任の下で安全管理をする」ということを事前に周知、徹底しておくことが必要である。
- ③ 施設開放の時間帯にも工夫が必要である。できるだけ、保育参加や乳幼児同士の交流ができるようにするには、通常の保育との調整を重視し、必要な対策を立て、実践していくことが必要となる。
- ④ 保育所・幼稚園・こども園は各種の子育て支援事業を展開するにあたって、地域住民にボランティアとして積極的に参加してもらう。その際、事業の目的、内容等についてよく話し合い、共通認識をしていくことが大切である。

第3節 オープンな運営

1 運営の基本

保育所・幼稚園・こども園の運営の基本は、子どもの人権や保育者の意欲を尊重し、保護者や地域住民の積極的な参画・参加を得て、安全な環境づくり、確かな保育内容の実践、オープンな運営を行うことによって信頼され、子育てにおいて安心できる地域の中核的専門機関となることである。

オープンな運営にあたっては、まず、全職員が民主的に意見を出し合い、お互いの意見を尊重し合い、協力することが重要である。その上で、方針・計画を作成し、それを公表して、保護者や地域住民が参画・参加しやすくしていく。そして、安全な保育環境づくりや確かな保育を目指して、実践の中でオープンに全職員で話し合い協力していく。

また、保護者、地域住民や小学校関係者ともオープンに話し合い、計画の実践・点検について協働していくことが重要である。

21世紀は、社会が大きく変化する中で、子どもから高齢者までの全ての世代が、生涯にわたって生きがいのある日々を過ごすため、個々のライフスタイルに応じて学び続けることが求められる時代といえる。情報化社会・生涯学習社会の中では、自分のライフスタイルを創り上げるには、自ら学ぶ意欲や自ら考える力を養うことが大切となる。その中で、子育てという営みは、子どもを中心に各世代が学び合う絶好の機会を提供するものである。

保育所・幼稚園・こども園は、子育てにおける地域の中核的専門機関である。開放的な雰囲気の中で、親や家族、地域住民などが出入りしやすい風土づくりが大切である。子育てに参加する

全ての人が子どもと対話し、子どもに共感することによって、互いに感動を体験し学び合い、成長し合うことができる。

保育所・幼稚園・こども園が子どもを中心に、保育者・保護者・地域住民の生涯学習、自己実現のできる場となることが重要である。

2 運営の内容

(1) 計画作成、評価、公表

保育所・幼稚園・こども園の運営として一番重要なことは、理念・基本が職員全体に浸透し、同じ考えで保育、子育て支援をしていくことである。常に自分たちで現状の保育、子育て支援、及び運営を見直し、より良いものを創造していくことが大切である。

P T Aや保護者会活動、保護者・地域住民の行事参加、保育参加などを見直し、精選して位置付けるとともに子どもを中心に職員・保護者・地域住民がオープンに話し合い、何でも言い合える環境の中で、考えを一致していくことが大切である。

保護者、地域住民の保育所・幼稚園・こども園に対する評価や意向を確かめ、理念・基本に沿うものであれば、その意見・要望に応え、満足度を高める必要がある。また、職員は、まちづくり会議、地区の住民会議などに参加し、地域の子育てに関する情報の発信、受信源になることが望まれる。

こうした中で、子どもを中心に、職員・保護者・地域住民の意向を反映した運営方針や教育・保育計画、子育て支援計画を作成し、公表することが大切である。

保育所・幼稚園・こども園は、期や年度毎に計画の進捗状況などを点検し、運営と保育の評価項目について、職員全員で自己評価して課題を確認し、方針・計画を練り直し実践することにより、運営の質的向上を図ることが大切である。

また、保護者には保育所・幼稚園・こども園の「保護者アンケート」を配布して、保育の実施に対する保護者評価を依頼する。その結果を取りまとめて成果と課題を出して年度内に公表し、次年度の課題を明らかにして、保育の一層の充実と改善に努める。さらに、公表した評価は設置者に報告する。

(2) 共通理解とチームワークによる職場運営

保育所・幼稚園・こども園は各種の保育計画を作成し、それを実践するにあたって、職員間でオープンに話し合い共通理解をし、具体的な事前準備を行うことが必要である。

また、実践後は職員間で自分たちの実践過程とその結果について話し合うことが必要である。即ち、職員が行う自己評価と職員間で話し合った結果としての評価、及びそれに基づく対応策についての話し合いが必要である。この活動を日々の職場運営の中心に位置付けていくことが重要である。

さらに保育内容の、具体的な活動・経験の展開策について検討し、それらを進めるための条件をどのように整備したらよいかについてのミーティングを定期的に行うことが大切である。

こうした職員間の共通理解とチームワークを重視する民主的な職場運営により、保育の質を高め、運営全体の向上を図ることができる。

(3) 役割、執務体制の明確化

保育所・幼稚園・こども園の運営における必要な全ての業務についての管理責任者は施設長である。施設長は業務を職員に分担させ、職員がお互いの役割を分かるようにしておく。業務を職員に分担させる組織が業務分掌である。

施設長の役割は、よりよい保育を創造するためにリーダーシップをとることと、職員が優れた保育者、優れた職業人に育つために職員の個性・能力を引き出し、職員それぞれの自己実現が果

たされるように援助することである。職員の職務内容や役割分担を明確にし、運営方針、教育・保育計画、子育て支援計画を実現するために必要な一人一人の職務の具体的な業務を示す。

具体的な業務を遂行するために必要な知識・技術・態度を育成するための職員の研修体制をつくる適正な執務条件の整備をすることであり、子どもの育ちを皆で考えることのできる時間と場所を作る。さらに、保育者自身がゆとりをもって、子どもたちのために段取り良く仕事ができるように配慮することがよい保育につながる。

個々の職員の執務体制は、ミーティング時間・保育時間・各種執務時間・研修や研究時間・休憩時間・休暇などが十分に織り込まれたものとして、時間やローテーションの管理が行われる必要がある。職員については、様々な雇用形態となっているだけに、より柔軟で工夫された業務運営が求められる。そうした様々な配慮の行き届いた執務体制づくりが、職員の心身の健康管理につながり、職員間の信頼関係構築のベースとなる。

(4) 仕事管理、時間配分の工夫

保育者が、保育目標を達成するには、①環境を整えること②いろいろな諸行事の立案・実施・反省③家庭連絡の事項や保護者との会合④指導計画、保育日誌などの作成⑤個人記録・指導要録・出席簿の諸表簿の整理などである。さらに、⑥運営等に参加するための各種ミーティング⑦内外での研修・研究⑧子育て支援活動などがある。

こうしたいろいろなことを実践し、当初の目的を達成するには、常に今後やらなければならない仕事のリストを整理しておくことが必要になる。

そしてそれらの仕事について、何のために（why）、どんな目標、内容のものを（what）、いつまで（when）、どこで（where）、誰が（who）、どのように（how）、やっていけばよいのかを書き出す。これをはっきりさせると、その仕事に取り組むには、どれくらい時間が必要か、また、かけるべきかが分かってくる。

そして、それぞれの仕事の時間的に見た優先順位によって、時間配分をしてやっていくことができる。職員一人一人が、自分の仕事管理や時間配分について職員間でオープンにし、報告・連絡・相談をしていくことを習慣化することにより職員間でスムーズに協力することができ、時間短縮につながる。

(5) 保育者集団としての向上

保育者集団としての資質向上には、保育の理論面や具体策について共通認識をもつとともに、一人一人の保育者のセンス・力量についても、お互いに尊重し合い、理解し合った上で協同して実践することが必要である。

それには、保育者自身が物の見方や考え方をしっかりとつこと、保育者自身の感性を日頃から磨いていくことが必要である。保育者が子どもたちに与える様々な影響を考え、保育者自身が人間としての向上を常に心がけることが大切である。

保育者集団として、子ども一人一人を多面的に捉え、話し合い、自己評価することが大切である。保育者同士の話し合いにおいては、何を評価するのかをはっきりさせ、互いに評価し合える人間関係作りをしていき、子どものために討論していく。

また、保育の実践を記録し、事例を通して意見を交換することにより、今後の保育に役立つと考えられる「実践記録」にまとめ、主観的となりがちな保育実践を客観化し、オープンにしておくことが大切である。

研究・研修においては、事前に目的や目標をはっきりさせて、お互いの考えなどをオープンにして討議することが大切である。

(6) 保育者と保護者のパートナー化

保育者と保護者は、子育ての良きパートナーとなることに努めるとともに、保育者として、保護者として成長していく必要がある。

子育てパートナーとしての協同作業としては次の通りである。

- ① 保育者と保護者の相互信頼関係を確立する。
保護者は我が子に対して、こうあって欲しいという願いをもっている。保育者は、その保護者の思いをよく聞き、尊重し、可能な限りにおいて受け止めることが大切である。そして、常に自己を振り返りながら保護者と子どもの生活を見守ることにより保護者と信頼関係を結ぶことができ、保護者との関わり合いが容易になる。
- ② 保育者と保護者が話し合い、保育所・幼稚園・こども園生活を含む子ども一人一人の24時間の生活リズムを確立する。
保護者には、家族としての考え方や家庭としての生活の仕方がある。保育者は、できるだけそれを把握し、発達のみちすじの保育課題に照らして、子どもにとって豊かな24時間の生活となるように保護者と協働していく。
- ③ 子どもの興味・関心について、どんな小さなことでも子育てパートナーとしてお互いにオープンにし、いろいろな形で情報を交換し、子どもに楽しい活動・経験を保障する。
保育者が子どもの様子について丁寧に保護者に伝え、実践している保育に信頼を得ることで、保護者は保育者に気持ちを語り、保育者の言葉に耳を傾ける。
- ④ 保育者は、保護者に子どもの発達のみちすじを丁寧に説明する。保育者は自分たちの行っている保育の目標や内容について説明し、保護者の理解を得ることが大切である。
保護者が納得すれば、子どものこれまでの成長を正しく理解でき、今までにやり残したことや現状での発達の課題を理解し、安心して子どもへ対応できるようになる。
保護者には生活のペースに応じて、保育参加の場を設け、集団の中でいろいろな子どもと触れ合ったり、いろいろな経験を重ねたりして、その上で我が子の様子や成長を感じてもらうことが大切である。
- ⑤ 保育者は保護者に対応する場面において、抽象的な表現を避ける。親と子にとっての生活がどうあれば良いのかということを十分考えて、具体的な支援を心がけていくことが大切である。

(7) 地域住民の保育ボランティア

地域に根ざし、開かれた保育所・幼稚園・こども園として、多くの人との関わり合いが生まれるためには、それぞれの保育内容や子育て支援の内容が、いろいろな機会に地域住民に公表され、地域住民に理解されていることが必要である。

さらに、保育所・幼稚園・こども園が、地域住民に対して積極的に保育に参画・参加して欲しいという意思表示をすることで、関わり合いが生まれやすくなる。

子どもはいろいろな人との関わりの中で育つことから、日々の保育に地域の人々にボランティアとして、各種の技能を活かす専門家として、人材登録をして参画・参加してもらうことで、子どもはさらに豊かな経験や、充実した生活ができる。

ボランティアの参画・参加にあたっては、子どもの発達の状況について十分に理解してもらい、子どもにとって有効な関わりとするための準備が必要である。また、地域住民の様々な事情を考えて、多様な参加の仕方ができるように工夫することも大切である。

地域住民などのボランティアは、子どもと過ごすことによって、生涯学習の機会に恵まれるとともに、心身ともに満たされ、自己実現することとなる。

(8) 乳幼児期から学童期につながる教育・保育の一貫性

保育所・幼稚園・こども園と小学校は、子どもの発達のみちすじに沿って、乳幼児や児童をより豊かで広い世界へ導き、社会との関わり方を身に付けることを目指す教育・保育をしていくために連携することが重要である。

一人一人の子どもが、乳幼児期・学童期を通じて、問題を解決する意欲や豊かな人間性、たくましい体力などの生きる力を身に付けることが大切である。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として①健康な心と体②自立心③協同性④道徳性・規範意識の芽生え⑤社会生活との関わり⑥思考力の芽生え⑦自然との関わり・生命尊重⑧数量・図形、文字等への関心・感覚⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現を見通した教育・保育を目指していく。

そのために、保育者と保育教諭は、子どもの発達や学びの連続性を踏まえ乳幼児期から児童期への接続期の教育について相互に理解することが重要である。

教育・保育の理念、基本、内容、実践方法について、乳幼児期・学童期の特性を相互認識し、連続性を確立することで、生涯発達の初期の段階における教育・保育の一貫性が保障される。

保育所・幼稚園・こども園と小学校は地域住民との協同により、乳幼児と児童が同じような遊びや自然体験・社会体験などを通して相互交流を楽しみ、地域住民との交流から刺激を受け、地域への愛着を育むようにすることが大切である。

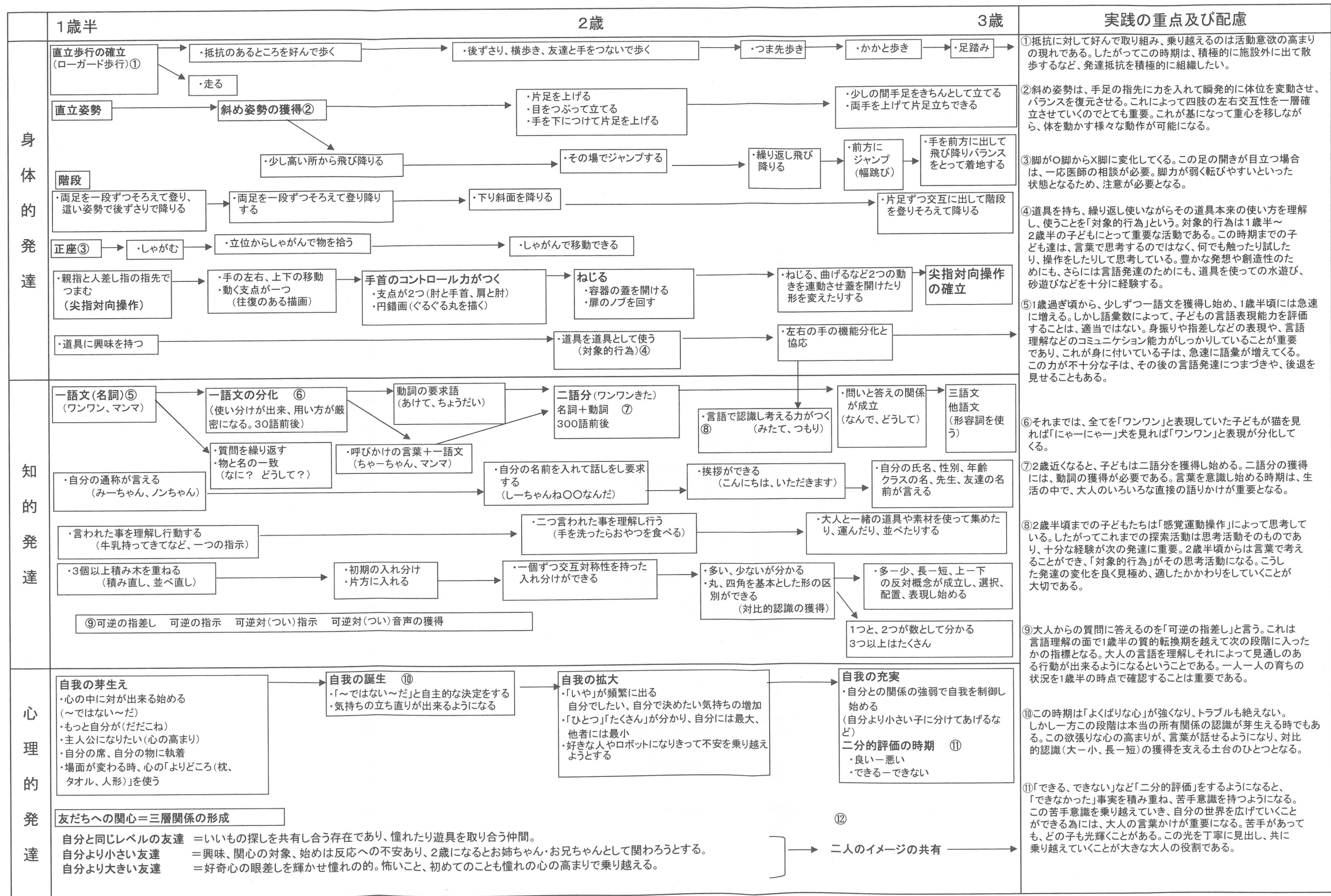
児童と幼児、児童と保育者、幼児と教師・保育者、教師と保護者・地域住民、保護者と地域住民と幼児・児童などのそれぞれの間で感動体験を共有し、互恵性のある交流を積み重ねていくものとする。

Ⅱ 発達のみちすじ表

- ① 乳児前期（0歳～1歳半頃）
- ② 乳児後期（1歳半～3歳頃）
- ③ 幼児前期（3歳～4歳頃）
- ④ 幼児後期（4歳～6歳頃）

	0か月	6か月	1歳	1歳半	実践の重点及び配慮
身 体 的 発 達	生理的反射 (呼吸・吸飲・まばたき・咳・くしゃみ・瞳孔反射など) 生涯存続 原始反射① (把握反射・足指反射・驚き反射・自動歩行・哺乳反射など) 共鳴動作② ・上下左右を追う ・暖色を好む ・一点をじっと見る ・左右180度の 往復可逆追視 ・上下80度の 往復可逆追視 ・360度の追視 ・自分で頭を上げる 首がすわる ・胸を上げる(腹這い) ・体の動きに頭が遅れず 動く ・重心の側方 移動(横向き) ・仰向けから 横向きになる (上半身での回 転性の寝返り) ・仰向けから うつ伏せ 寝返りの完成 ・うつ伏せから仰向け 手掌支伏臥位④がと れる ・後方に下がる 後ろ這い (腕を突っ張る) 腹這い (足の第一趾を中 心として蹴って前 に進む) 後方交差型 四這い ・尻を上げ胸が上 がる 高這い ・膝を伸ばして 両手、両つま 先のみ着地 這う完成⑤ 前方交差型四這い ・左手→右手→右足→ 左足のロコモーション になる つかまり立ち⑦ 伝い歩き ハイガード 歩行 (手を上に) ミドルガード 歩行 (手が中間の 位置) ローガード 歩行 (手を下にし て) 屈曲姿勢 左右対称姿勢 (手と手、足と足を合 わせる) 手足の伸展運動 (伸ばしたり、縮めたり) パラシュート反応 (体が下に落ちる時、手足を細 部まで開く) ・座位から前に倒れそうになる 時、体を手で支える 首の立ち直り反応 ・体のバランスを崩した時に頭を中心 ・体が左右に倒れそうになった時、手を伸ばして支える 座る事が出来る⑥ 長座り (足を前にして) 正座 ⑧ 保護伸展反応 ・体のバランスを崩した 時に体を支える ・握らせるとわずかな間 保持できる ・物に手を伸ばして握る (目と手の協応) 手がもみじ状に開く ⑨ ・熊手型でつかむ (積み木を持ち変える) ・親指を使ってつかむ (母指対向操作) ・親指とひとさし指の指先でつまむ (指尖向操作)⑩ ・7日ではっきりした音 に反応 ・母親の声を聞き分ける				①原始反射は6か月までには殆ど消滅する。適切な時期に消滅することが、次の発達に非常に重要となる。 ②共鳴動作とは、生まれて一週間の子が20cm離れた場所が見え、繰り返される動作を真似ること。これはコミュニケーションの基礎となる行動であり、20cmという距離は授乳の時の親と子の距離に等しい。したがって抱いて授乳することは、コミュニケーションの形成上重要である。 ③可逆追視とは、上下左右などの逆方向が追えることである。これは首のすわりと大きな関係がある。首の発達はその他咀嚼等にも大きな関係があり、発達上重要である。 ④手掌支伏臥位とは、うつ伏せで両手の平をしっかりと床につけ、腕を伸ばして胸をあげ、身体を支える姿勢。足が先行した寝返りが出来、手掌支臥位がとれることが、次のハイハイの質に大きな影響を及ぼす。手掌支臥位の姿勢を十分にとらせることが重要。 ⑤望ましいハイハイとは、次の4つの条件を満たすことが大切。第一は首を起こして前方を見ながら這う。これは、歩行を獲得した後のバランスの保持に重要。第二はしっかり開いた手の平と伸びた指先で身体を支えること。第三は足の第一趾を中心としたつま先で床を蹴って前進すること。第四はロコモーションの問題であり、手足の左右交差パターンが確立していることが重要。 ⑥6か月頃から大人が座らせると座位の姿勢を保持できるがこうした受動的座位は自由のきかない姿勢で好ましくない。7～8か月頃からハイハイするようになると、自力でお座りする。自主的、能動的座位がとれることが大切である。 ⑦自力で立てない子どもに歩行練習をすることは、段階を飛び越した働きかけであり、その後の歩行の高次化につまづきを示す場合もある。例えば転びやすい傾向をもっていたり、転んだ時に手を伸ばして体を支えることができなかったり、顔や頭に怪我をしやすい。したがって保育の中では歩くことを焦らず、高這いなどの運動を十分に保障し、ゆっくり歩行の獲得を見守ることが必要。 ⑧発達保障のためには、子どもの発達段階に応じた活動の中に、発達抵抗を組織していくことが重要。例えばハイハイや歩行の運動の時、坂や階段を登ったり降りたりするなど、やや難しい経験ができるようにする。 ⑨子どもは「屈曲優位から伸展優位」へと発達していく。握った状態の手も5か月ごろになると、きれいにもみじ状に開く。この手の開きは発達上重要であり、開きの悪い場合は発達につまづきがある場合が多い。 ⑩子どもの手指は「小指側から親指側」へと機能分化していく。母子対向操作→尖指対向操作への獲得は、対話能力の獲得に重要である。 ⑪子どもは日常生活の中でまず初めに目や耳や体全体を使っ ての意味的経験をし、その経験とその時に発せられる周囲 の人々との言語音とを結びつけて、言葉というものの意味や機 能を取得していく。 ⑫手当たりしだいに物をいじりまわしたり、探索したりするこ とで子どもは物の性質や意味を学びとる。したがって物を壊し たり、汚したりすることを嫌って、叱ったりすると、子どもの好 奇心の満足を抑制してしまい、しいては知的発達に影響を及ぼ す。したがって危険のない環境を整え、十分な経験をさせてい きたい。 ⑬大人との一対一の関わりや親身な世話を通して、親密なコ ミュニケーションを経験し愛されることの心地良さを認識する ようになる。こうした人とかかわりや関わられることの心地 良さが特定の大人との「基本的信頼感」をつくる。 ⑭おはしゃぎ反応は子どもにとって、最初の対人関係の中での笑 いであり、後に音声言語を獲得していくための土台となる。 子どもとの十分な関係を持つことが需要。
	鼻母音 喉子音 (うっくんうっくん) 口唇閉塞音 (プップ) 初期喃語 (あーあー、おーおー) 喃語、志向の音声 (まーま、ぶーぶ) 言葉と動作が結びつく 定位の音声 (あった) 一語分 (ワンワン、マンマ) ⑪ 認知 (手先でいじる、口に入れてなめる、振る、ひっぱる、目の前で見る) ⑫ 志向の指差し 要求の指差し (模倣のできはじめ) 定位の指差し 可逆の指差し (大人の質問に答える)				
	・快と不快の分化 ・泣き笑いの分化 二項関係 ⑬ ・人間の顔に対しての 笑い ・社会的快 おはしゃぎ反応 ⑭ ・あやされると声を 出して笑う ・誰にでも反応 ・見慣れた人になのみ笑う 人見知り ・不安や恐れを感じる ・大人との相互 ・交渉の芽生え ・自分の発見 自他の区別 自我の芽生え				

	0か月	6か月	1歳	1歳半	実践の重点及び配慮
生活	睡眠⑯ ・昼と夜の区別不明瞭 ・夜8時間以上の睡眠（夜をとらえる） ・生活リズムの確立 ・昼の目覚めが10時間以上になる ・午前1回・午後1回の昼寝 ・午後1回の昼寝（1～2時間）				⑮二者を中心とした外界との関わりから「子ども－大人－第三者（物）」という関係が成立する。これが三項関係である。三項関係が形成されると、外界とのかかわりが大きく変化する。大人の指差しに反応するかなど、三項関係が形成されているかを把握することは、発達を捉える上で非常に重要である。
	授乳、食事⑰ ・授乳3時間毎 ・一日8回程度 ・一日5回程度 離乳5, 6か月 ・離乳食1回（どろどろ状） ・授乳4回 離乳7, 8か月 ・離乳食2回（舌でつぶせる固さ） ・授乳3回 離乳9～11か月 ・離乳食3回（歯茎でつぶせる固さ） ・授乳2回 離乳12～18か月 ・離乳食3回（歯茎で噛める固さ） ・牛乳摂取				⑯睡眠中の子どもの顔色、呼吸の状態をきめ細かく観察するよう心がける。（SIDSチェック）うつ伏寝はできるだけ避け、顔の廻りに布団や物がなく、正常に呼吸が出来るような状態をつくる。
	・舌が上顎の吸啜に乳首を巻きつけるようにして押し飲む（重力を利用） ・哺乳反射（4～6か月頃で消滅） ・舌先の前後運動と顎の連動運動 ・口唇を閉じて飲み込む ・上唇の形変わらず ・下唇が内側に入る ・上下唇がしっかり閉じる ・左右の口角が同時に伸縮 ・数回もぐもぐして舌で押しつぶし咀嚼する。 ・上下唇がねじれながら協調する ・咀嚼側の口角が縮む ・舌の左右運動（咀嚼運動）				⑰授乳は成分の面でも母乳の方が優れていると考えられるが、姿勢やその他スキンシップなどの面でも優れている。したがってできるだけ母乳に近い状態を保障し、抱いて声かけしながら子どもの目を見て微笑みかけて授乳をしたい。
	排泄⑱ ・膀胱に尿が溜まるとすぐ反射的に排尿する ・尿間隔2時間以上尿意をもよおす ・尿がためられる ・排便反射（授乳後すぐ排便） ・1日2回程度 排便 ・便が固くなり、いきむようになる ・意識的にいきむ ・便意をもよおす ⑲ ・排便抑制 ・我慢、知覚 ・コップを両手に持って飲もうとする				⑱おむつ交換の場所は一定にし、子どもが不快から快になる大切な場面であるので、十分スキンシップを図り、言葉がけと微笑を投げかけゆったり交換する。 ⑲排尿行動を意識化させるために、排尿間隔が2時間以上になったら、トイレやオマルで排尿させてみるのが良い。この時失敗することのほうが多いことを覚悟し、失敗しても決して叱らないように心がける。
遊び	あやし遊び （いないいないばー） ・見たり聞いたりする ・つかんだり、ひっぱたりする ・しゃぶったり、なめたりする ・音のする方、光の方を見る ゆさぶり遊び ⑳ （たかいたかい、お船はぎっちらこ） ・玩具を振り回す ・ひっぱたり、押したりする ・音の出る方に首を向ける ・聞きなれた音に耳を傾ける やりとり遊び （ちょうだい、まてまて） ・音のするものに興味をもつ（つかんだり、叩いたり、振る） ・入れたり出したりする ・物をつまむ ・ボールを追いかける ・おつむてん、いないいないばーを真似る ・紙破り ・リズムに合わせて体を動かす ・人の真似が盛んになる ・動物に関心を持つ 模倣あそび ・わらべ歌遊び ・押したり、ひっぱたりして歩く ・乗ったり、降りたり、すべったりする ・ころがして追いかける ・両手を使って音を出す ・リズムに合わせて体をゆする ・積み木を積んだり並べる ・蓋の開け閉めをする ・砂場にどっかり座って遊ぶ ・水遊びを遊ぶ ・身近な動物の鳴きまねをする ・スコップやコップを使って、砂遊びや水遊びをする				㉔6か月頃から子どもは、大人の歌やリズムカルな声がけで、体を揺すられてあやされる「揺さぶり遊び」を好み、平衡感覚を養っていく。揺さぶり遊びの中で「首の立ち直り反応」や「保護伸展反応」が確かに獲得されていく。しかし、あまり低月齢の子どもに激しい揺さぶりをするとは、脳が完全に形成されていない状態なので危険である。子どもの発達に合った揺さぶりを行なっていくことが重要である。
保育課題	・衛生的で安全な環境をつくり、常に体の状態を細かく観察し、疾病や異常は早く発見し快適に生活できるようにする。 ・一人一人の生活リズムを重視し、食欲・睡眠・排泄などの生理的欲求を満たし、生命の保持と生活の安定を図る。 ・子どもの泣くという要求表現に対して、大人がその表現を受け止め適切に世話をし、生理的快、社会的快の状態を保障して、基本的信頼関係をつくっていく。その上で目と目を合わせた「あやし遊び」「揺さぶり遊び」などを繰り返す行うことにより、コミュニケーションの基礎を培い、活動意欲や要求を表現する力を育てることが重要だと考える。さらにこうした遊びを通して、首の立ち直りを強く発声の土台を育てると共に平衡感覚を養っていく。 ・歩行を獲得していくための、前段運動である寝返り、はいはい、伝い歩きなど、それぞれのみちすじを大切にし、発達をよく見極め、適切な時期に獲得することができるように援助する。この時重要なのは、「いつできた」ではなく「どのようにできているか」ということである。一つ一つの動きを質・量ともに豊かに保障し、十分に行うことが大切である。特にはいはいは、広い空間とともにはいはいをする仲間を保障しながら楽しく経験していく。 ・全ての発達の基礎は特定の大人との親密なかかわり（二項関係）であり、それを土台として物に働きかける三項関係が成立し、より豊かに発達してくる。子どもにかかわる保育者は、子どもにとって人とのかかわりの重要性を深く認識し、豊かな愛情をもって接していくとともに、その成長発達の喜びを共有できる存在であり続けることができるようにしていく。				



	1歳半	2歳	3歳	実践の重点及び配慮
生活	睡眠 ・午後1回の昼寝(1～2時間) ・夜の睡眠時間は(11～12時間) ⑬ 食事 ・好き嫌いがはっきりしてくる。だいたい一定時間で食べる ⑭ ・こぼしながらもスプーンで食べようとする ・コップを両手で持って飲む 排泄 ・出たとき尿意を知らせる ⑯ ・汚れた時に知らせ始める ・不快感を感じる ・パンツを脱いで一人でトイレやオマルに座る 着脱 ・パンツを脱いだりズボンを脱ぐ ・手伝ってもらいながら、上衣を脱ぐ ⑰ 清潔 ・蛇口をひねってもらって手を自分で洗う ・鼻が出たら知らせる	・姿勢正しく食べる ・こぼさず食べる ・嫌いなものでも促されて食べようとする ・スプーンを上手に使うようになる(下手持ち) ・箸に関心をもつ 概ね4歳 ・コップを片手で持って飲む ・尿意、便意を感じたらトイレに行こうとする ・尿意、便意を知らせトイレで排泄す ・すこしずつ我慢できるようになる ・失敗が少なくなる ・パンツを脱がずに下ろしたままで、排泄しようとする ・自分で拭こうとする ・水を流す ・自分で衣服を着ようとする ・大きいボタンをはめられるようになる ・靴も自分で履くが左右違うことがある ・自分で履こうとする ・靴を履こうとする ・上衣を手伝ってもらって着る ・ボタンを自分でしようとする ・パンツが履ける ・促されて自分で手を洗う ・鼻が出たらかもうとする	・箸に関心をもつ 概ね4歳 概ね3歳半 概ね3	⑫対比的認識の獲得により、子どもたちは出来るか、出来ないか常に葛藤している。「お兄ちゃんになりたい」「お姉ちゃんになりやい」と思っているが、本当になれるかと不安をもっている。こんな時に「頑張ること」「しっかりすること」を押し付けられたら、さらに不安になる。よく子どもの心の中を察しながら、一つ一つの思いに共感することから保育を始めたい。 ⑬子どもは新陳代謝が盛んで、運動も活発であることから、長時間睡眠が必要である。 ⑭食事の回数は成人と同じ、朝、昼、晩の3回となり、時間帯もほぼ同様となる。しかし、まだ1食の食事での摂取できる量は少なく、栄養面で不足分を間食として補う必要がある。 ⑮スプーンや箸の使用と手指の発達とは、大きな関連がある。手の回転が出来るようになり、スプーンを自在に使うことができ、利き手の第4指が自在に動くようになることで、箸が思うように使える。こうした、手・指の機能の発達をよく把握し、個々に応じて進めていくことが重要である。 ⑯排泄の自立は個人差があり、子どもの生活環境の変化や、トレーニングを迎えた月齢と季節との関係、さらにはその時期の心理的抵抗などにも影響されることが多い。さらに一旦自立したように見えても、又元にもどることもある。保育者は焦らずゆっくり声をかけて排泄の自立に対処していかなくてはならない。
	模倣遊び ・積み木を3個以上積み重ねる ・積み直し、並べ直し、器への入れ直しができる ・手を動かして描くことを楽しむ ・階段を登ったり、坂道や起伏のある場所を好んで歩いたりする ・足を止めいろいろなものに関心を持って触れたり、試したりする ⑰ ・わらべ歌遊びや手遊びを喜び、ところどころ真似る ・モデルを真似て音楽に合わせて体を動かす ・穴などに入れたり出したりする ・道具を使って水・砂・土などで遊ぶ ・コンビカーに乗る(始めは後ろに進む) ・滑り台・ブランコなどに関心を持つ ・絵本や指人形を喜んで聞いたり見たりする	みたてつもり遊び ⑱ ・8つ以上の積み木を積み重ねる ・積み木を並べその上に積むなど2つの遊びを組み合わせる ・円など曲線が描ける ・(形の区別が分かり組み合わせさせて遊ぶ) ・目的をもって散歩に行く ・(公園に行こう、ワンワンを見に行こうなど) ・好きな歌を歌ったり、音楽を聞いて体を動かしたりする ・自然物や生活用具に関心をもち、試したり遊んだりする ・人形やままごと道具を使ってつもり遊びをする ・シールを貼ったり紙をちぎったりする ・コンビカーに乗って自由自在に動く ・本来の使い方で固定遊具で遊ぶ ・粘土・砂・水などで遊ぶ ・追いかけられることを喜ぶ	ごっこ遊び ・意図を持って表現する(縦と横の結合) ・描いたもの、作ったものに意味付ける ・散歩で、でこぼこ道や坂道を歩き、長い道のりを歩くことができるようになる ・切ったり貼ったりして意味付けながら好きな物を作って遊ぶ ・ごっこ遊びに必要なものを見つけて用途にあった遊びをする ・三輪車に乗ろうとする ・ボールで遊んだり、かけっこをしたりする ・追いかけっこ、かくれんぼ遊び ・よじ登って降りるなどの連続遊び	⑰身辺自立は、自分で出来る喜びを味わうと共に、大好きな大人に認めてもらうことで、次の楽しいことに対し頑張ろうとする見通しの力をつけていく。したがって大人はこの達成感を共感していくことが重要である。 ⑱一見単純に見える「みたて・つもり遊び」だが、子どもなりの世界があり、具体的にイメージがあり、意味がある。子どもはこの「みたて・つもり」の世界の楽しさを知ると、より一層「みたて・つもり」を豊かにしていこうとする。つまり、「みたて・つもり」はイメージ力の「製造工場」であり、このイメージの力が、幼児期の表現を豊かにしていく。それは描く・作るだけではなく、やがてイメージ豊かな話し言葉が文脈を作る力に結びつき、書き言葉の世界を作る土台となる。したがって、十分にこの経験ができる環境を整える必要があり、特に重要な点は 1、再現してみたい生活経験の豊かさをつくること 2、子どもたちが主人公になり「みたて・つもり」を発展させること 3、「みたて・つもり」のイメージの世界を保育者が共有することである。 ⑲歩行の完成と共に、子どもたちは日々「いいもの探し」をする。「これはいったいなんだろう」と見入ると、必ず友達が行ってくる。友達が見つけたものは何でも光り輝き、その世界を共有し始める。「いいもの探し」の心が友達の見つけたものへの憧れの心を育む。憧れこそ、発達を導くエネルギーであり、いろいろなことを学んでいくための原動力である。したがって散歩や庭の散策などの活動を積極的に行っていきたい。
保育課題	・24時間の生活リズムを作ることが基本となる時期である。睡眠のリズムをはじめとし、食事や排泄、遊びなど諸活動を毎日の生活の中で規則正しく繰り返していく必要がある。 ・対象的行為と探索活動はこの時期の子どもたちの思考そのものである。したがって何にでも触り、何でも試す。こうした経験ができる場所と時間を十分に保障し、満足いくまで繰り返すことで、次の言語発達を促し豊かな想像性や意欲へとつなげていく。 ・拡大する自我の育ちを大切に受け止め、切り替えしたり、意味付けたりするなどして、心の通い合う世界を共有しながら、第二自我への準備をしていくことができるようにする。 ・歩くことや、全身運動を十分に保障する。特に散歩などで、自然との関わりや友達との触れ合いなどを積極的に行いながら、十分に歩いたり動いたりすることで、直立姿勢と二足歩行を確立していき、歪みのない体を目指していく。 ・「みたて・つもり遊び」を大いに保障する。子どもが生活の主人公を演じ、自分のイメージを十分に広げることができるよう、いろいろな仲間と過ごせる場や時間・空間を整え、大人の適切ななかかわりによって、さらに人間関係や生活経験を広げていくことが出来るようにする。			

③ 発達のみちすじと保育課題＜幼児前期（３歳～４歳頃）＞

		3 歳	3 歳半	4 歳	実施の重点及び配慮
身 体 的 発 達	姿 勢 ・ 運 動	3 歳前後 ・直立二足歩行が安定してくる。 ・「あおり動作を伴う踵、つま先歩行」が可能になる。 土踏まずも形成されてくる。 ↓ 3 歳頃 ・走る・跳ぶ・飛び降りる・登る・しゃがむなどの基本動作を獲得していく。 ↓ ・階段を昇る時は片足ずつ交互に出すことができるが、 降りる時は同じ段に両足を揃える。 → 3 歳半頃 ・階段を昇る時、降りる時、片足ずつ交互に出せるようになる。 ・得意の足でのケンケンができるようになる。			※あおり動作とは前に出した足の踵から着地し、土踏まず以外の足裏の全てをつけて体重をかけ、 反対の足を前に送った後、後ろの足の踵を地面から離し、つま先で地面を蹴りながら、その足を前 送っていくことである。 ・この時期の子どもには、何よりも足腰を強くする全身運動を保障することである。走る・跳ぶ・飛 る・登る・しゃがむなどの基本動作が、十分に行なわれる運動遊びを積極的に行うようにする。
	手 指 ・ 操 作	3 歳前後 ・尖指対向操作が確立する。物を拇指と示指で摘まみ、それを手のひらに握りこんで、さらに次のものを摘まむという操作を繰り返せるくらいの力 育ってくる。遊びや生活の中で友達と会話をしながら、しっかりと手や手指を使うことができるようになる。 ・示指と中指を立ててジャンケンの「チョキ」で2つを表し、模倣することが可能となる。さらに環指を立てて3つを示すことができる。 ・描画活動 ↓ ・円錯画(手の運動の軌跡)ではなく、閉じた一重の丸 が描けるようになる。すると次第に大きい丸と小さい 丸を組み合わせで顔を描くなど、イメージを先行させ て描画するようになる。 → ・縦線と横線を組み合わせて十字を模倣して描くことができるようになる。 ・道具の使い方も次第に巧みになる。はさみを利用して、連続切りで直線を切ることができるようになる。手に持った紙を動かしながら切ることに り、紙に描かれた絵を大雑把に切り取ることが可能となる。			
知 的 発 達	言 語 ・ 認 識	3 歳頃 ・話し言葉が豊富になる。語彙の飛躍的增加とともに三語文や多語文などの長い言葉も話すようになる。 ・話をしている人を見て、興味がある話であれば、聞けるようになる。また、絵本やお話を聞くことが楽しくなる。 ・音・色・文字・数・量・形等に興味をもち、違いに気付くようになる。 ・興味深い歌や楽器演奏を聴いて楽しむようになる。簡単な曲に合わせて手を打ったり、身体を動かしてリズムをとったりすることを楽しむ。			・大人とのコミュニケーションを楽しみたいという子どもの気持ちを受け止め、子どもの興味・関心 に沿って話しかけたり、子どもの話を聞いてあげたりすることで、積極的に会話を引き出していく。 ・言語は思考・認識の手段であるから、言語の幼さは思考・認識の幼さにつながりやすい。いわゆる 幼児語(赤ちゃん語)が大人の言葉にスムーズに移行できるような配慮が必要である。 ・この時期特有のいろいろな質問に丁寧に答えてやることや、拒否反応に丁寧に付き合ってやること が大切である。そうすることによって、コミュニケーションの手段としての言語能力及び思考・認 識の手段としての言語能力を高めていくことになる。 ・子どもたちの生活の中で、興味深いものが登場する絵本を見たり、読んでもらったりする環境や機会 を設けるようにする。絵本の読み聞かせ、絵本の中の事物についての知識を育てることや描画遊び 言葉遊びなども始めることが大切である。 ・音・色・文字・数量・形などについて、興味関心を生活の中で持たせていくことが必要である。 ・歌や楽器演奏を聞いて、楽しむ機会を増やし親しませていく。
心 理 的 発 達	自 己 形 成	3 ～ 4 歳頃 ・子どもは、乳児期に形成した自我と、次いで形成中の第二自我という二つの自我世界の中で生きようになる。自我は身体が求める要求の自我で あり、第二自我は、社会的存在としての自分がどう行動すべきかという規範の自我である。この二つの自我を自分の中で対話させながら、自分は こういうことをしたいが、今はこういうふうに行動した方が良さだろうという自己決定するのがなかなか難しい時期である。自我と第二自我は、 まだ別々のものとして存在し、なかなか結びつけられないのである。 ・言っていることはなるほどと思わせるものがあったても、実際にやっていることは、やりたいことをやっているだけということも珍しくない。 この時期の子どもは、他人に厳しく自分に優しい態度を示したり、他者の考え方や言動についてわからないでぶつかったりすることがある。			・子どもの言葉を聞き逃さず、受け止め、共感していくことが大人の対応として重要である。 ①実生活の中で起きる様々なトラブルに丁寧につきあい、一緒に折り合いをつけていく。 ②手遊び・歌遊び・絵本・紙芝居・人形劇という世界を子どもと共有する。 ③ごっこ遊びの世界に入りこむことを促し、共感する。 ④子どもが語るつぶやきの世界に耳を傾ける。

	3 歳	3 歳半	4 歳	実践の重点及び配慮
生活	3 歳頃 4 歳頃 睡眠 食事 排泄 着脱衣 清潔 片付け ・夜の睡眠時間は11～12時間。昼寝もしない子も見られる。 ・箸に関心をもつ。 ・嫌いなものでも促されて食べようとする。 ・便意、尿意を知らせ、自分でトイレに行く。 ・失敗することもあるが適宜一人で排泄する。 ・少しずつ我慢できるようになる。 ・衣服の着脱の順番が分かり、自分でやろうとする。 ・ボタンのとめはずしを自分でやろうとする。(直径1cm程度の大きさ) ・不完全でも歯を磨き始める。顔を洗っても泣かなくなる。 ・排泄後や遊びの後に、手を洗うようになる。 ・後片付けをするようになる。簡単な用事や手伝いを頼むと喜んでやるようになる。 ・箸を使って食事をするようになる。 ・友達と楽しく食事をする。 ・嫌いなものでも少しずつ食べようとする。 ・よく噛んで食べる。 ・排泄の失敗がなくなる。 ・排泄後の後始末がほぼできる。 ・順序よく着脱ができる。 ・ボタン・スナップのはめはずしができる。 ・うがいや歯磨きの習慣が身に付く。 ・鼻をかみ、身体を清潔に保とうとする。 ・髪をとかす。 ・持ち物や身の回りの始末をしようとする。 ・身の回りで起きるいろいろな出来事や事物に親しみ、興味をもったり、模倣したりして自分から関わったりするようになる。 ・身近な動物や植物など、自然に触れ驚いたり、親しみなどを感じて世話をしたりすることに興味をもち始める。			・24時間生活リズムの確立が基本となる。睡眠・食事・排泄・清潔・着脱などの基本的生活習慣をほぼ身に付けて身辺自立ができるようにしていく。また、人との関わりが多くなる中で挨拶や身のまわりの整理、交通安全などの習慣についても注意を向けられるようにす ・大人が生活の中でやって見せたり、コツを知らせたりしながら、自分なりにやってみようという気持ちを大切にす。少しでもできたことを認め、できたこと、がんばったことの喜びやうれしさに共感し、自信や意欲をもたせていく。 ・どんなお手伝いや用事に興味・関心をもって取り組めるのか、また、先生や友達のためになったという気持ちがあるのかなどを考慮しながら、手伝いの場面を意識的に設けるようにする。 ・園内外の四季折々の自然に触れる機会を十分もち、自然の美しさや不思議さなどの気付きを大切にする。そのためには、大人が自然の様々な変化や現象に敏感でなければならない。
遊び	3 歳頃 3 歳後半 ・日常生活を再現した多様な「ごっこ遊び」が展開される。 ・身近な話を題材にした「追いかけ遊び」が始まる。 ・砂や粘土など、可塑性のある素材を使って遊ぶようになる。見立て遊びとしては、できたものに名前をつけるのではなく、イメージを描いてから作るようになる。 ・身体諸機能の発達状態に比例して、全身を使って遊ぶようになる。(ボール遊び・水遊び・かけっこなど) ・わらべ歌遊びがより面白くなる。 (縄跳び・鬼ごっこ・ボール・お手玉など)			・「見立て・つもり遊び」を豊かにし、「ごっこ遊び」に発展させていくには大人の働きかけが大切となる。 ・「ごっこ遊び」を始めるのは、子どもの中で自我が拡大し、第二自我の形成の準備が進み、自主性への志向と大人との共同生活への志向が育っていることが前提といえる。大人の豊かな経験を披露したり、多様な道具・遊具を用意したりして教育環境を整えること、仲間・時間・空間を保障することが大切である。
保育課題	・子どもが健康で文化的な生活をするには、生活の中心である遊びを軸として、いろいろな出来事に参加したり、自然に触れたり、手伝いや動植物の世話などをしたりして、1日の流れが豊かに無理なく組み立てられているかどうか配慮していく。 ・乳児期に形成した自我と、形成しつつある第二自我という二つの自我世界を生きる子どもの葛藤に大人が丁寧に付き合うことが重要である。子どもは様々なトラブルに見舞われて、その都度、子どもなりに悩みつつ思考し、大人から言われたことについては、子どもなりに考えて、自分の言葉で言い表せる第二自我を形成している。大人がそうした状況に共感し対話することで、丁寧に付き合い二つの自我の折り合いをつけ、葛藤の出口を一緒に探してやるのが大切である。			

		4歳	5歳	6歳	実践の重点及び配慮
身体的発達	姿勢・運動	4歳頃・手と足及び右と左の「協応運動」が巧みになってくる。 〔手と足の「協応運動」～両腕を横に水平に伸ばして走るトンボの運動、手を上に上げ耳に見立てて両足でぴょんぴょん跳ねるウサギの運動など 右と左の「協応運動」～両足それぞれの足でケンケン、スキップ運動など ・「協応運動」は次第に年齢と共に高次化し、縄跳び、竹馬、跳び箱、鉄棒などの運動が可能となる。			※「協応運動」とは、二つの別々の動きを一つにまとめあげた動作である。「～シナガラ～スル」という動作である。
	手指・操作	4歳頃・手指操作は「協応運動」がスムーズになり、右手と左手の協応動作が確立する。右手と左手が別々の動きをしながら、一つの動作をまとめあげていく。 ・道具の使用が巧みになる。はさみを使って単純な直線切りではなく、線に沿って形を切り抜くことができる。次に手で紙を持ち、その紙を動かしながら切る。さらに、もう一方の手で連続的にはさみを開閉し形を切り抜こうとする。 ・用途に応じて、様々な道具の使い方ができるようになる。 ・音に合わせて両手を交互に握ったり開いたりできるようになる。 ・指先の機能分化が進み、手遊び、指遊びが上手になる。 ・描画活動～目と手の協応も巧みとなり、次第に次のような図形がかけられるようになる。 ＜四角形＞ → ＜三角形＞ → ＜菱形＞ ＊縦線と横線の組み合わせ ＊斜線と横線の組み合わせ ＊斜線のみの組み合わせ			・両手の協応、指先の機能分化、目と手の協応など多様な面で重要な力を獲得する時期である。ここで獲得した力がその後の生活に大きく影響する。日々の保育の中で次のような活動を豊かに展開することが必要である。 ①全身運動を十分に保障し、体力をつける。特に手で身体を支える運動により、肩・腕・手首を強くする。（子どもの運動発達は中心から末端へと進む。指先の不器用な子どもは手首のコントロールも悪く、腕・肩の力も弱い。従って、手の操作性を高めるためには、体幹から育てる視点が必要である。） ②はさみ・包丁・釘や金づちなどの道具を使う活動を十分に行なう。 ③伝承的文化に触れて遊ぶ。（おはじき・お手玉・竹とんぼ・折り紙・だるま落とし・あやとり・けん玉など） ④手遊び、指遊びをして遊ぶ。（指先を細かく動かす）
知的発達	言語・認識	4歳頃【コミュニケーション手段】 友達との共通体験をもとに、対話を弾ませることができる。 → 自らの経験を少しずつみんなの前で話すことができる。 → 自分の気持ちや経験を筋道立てて人に伝えることができる <u>・作り話を話す子どもも見られる。一つは、話す力はあるのだが、経験が少ないので夢物語を語ってしまう。二つは、相手が必ず驚くだろうという反応を期待して作り話をする。言語の力が育ち、対話に対する要求が高まっている。</u> 外言と内言の間である「つぶやき語」が多くなる。 ↓【思考・認識の手段】 思考・認識の手段としての言語機能が確立する。 →【行動のコントロールの手段】 内言が十分育ち、行動のコントロール手段としての言語機能がしっかりとしてくる。→自制心の育ち ・ 人の話を聞こうとし、分かろうとする。 → 注意して聞き理解する → 最後まで聞き理解し行動できる。 ・興味のあるものなら、かなり長時間持続して取り組めるようになる。 ・ものごとに集中したり、継続的に取り組んだりしながら、試す、工夫するなどの姿が見られる。 文字や数量・図形等に関心が強くなる。 → 簡単な文字・数字・記号などが読めるようになる。 → 絵本や手紙・掲示物・時計・カレンダーなどを興味深く見るようになる。 → 文字の書き順を意識する。 自分の名前を書くようになり、その他にも伝えたいことを書き始める。 4歳半頃・対位概念の中に「中」が成立する。相対的な比較が可能となる。大―小の対位概念に、「中」が入ってきて大よりも小さいが、小よりも大きいという相対的な概念が分かる。 ・歌や曲に合わせて簡単な分担奏ができる。曲に合わせて体を動かすことを楽しむ。友達と一緒に音楽を聴いたり歌ったりすることを楽しむ。			※言語の3つの手段 ①コミュニケーションの手段 ②思考・認識の手段 ③行動のコントロールの手段 ・子ども自身が考えたり、作った話を子どもの発達要求として受け止めていく。 ・思考する時の自問自答するような「つぶやき語」を大切にする。 ※「つぶやき語」とは、内言の未発達な幼児が自己に語る場合独り言をつぶやく。これを「つぶやき語」と言う。「つぶやき語」は、言語を用いて考えたり、言語で行動を自己統制したりできるようになってきた証といえる。 ・5～6歳の時期に、子どもの言語による行動の自己コントロール機能と内言の発達の状態をしっかりとみておく必要がある。内言の発達が悪いと思ったことを全て口に出してしまい、行動が伴いにくく、話す内容が拡散していく傾向をもつ。また、行動が衝動的になる。 ・発表の形で人に話す経験を重ねると内言の発達につながる。友達の前で生活経験を発表する機会を設定するなどの配慮をしていく。
心理的発達	自己形成	4歳頃・他者の目や言葉が気になり始める。自分が上手か下手かの自己評価が揺れ動く時期である。自分が下手かと思った時に自信を失うこともある。 4歳半頃・子どもは自我と第二自我を自己内対話させながら、生きる力を自分のものにしていくようになる。「～シタイケレドモ～スル」という形で、気持ちを切り替えながら生きる力を獲得していく。 5歳半頃・自分の立場と相手の立場の違いも分かりさらに自分の相手のつながりも理解し、自分の行動を律していくことができる。			・子どもに自信をもたせるために、次のことを配慮していく。 ①子ども自身の「達成感」を大切にする。 ②「基本的安全感」の確立。（自分がかげがえのない存在として愛されている。） ③「集団の中での居場所」の確立。（存在感があり安心していることができる。） ・子どもの自己内対話能力を育てるためには、現在の生活を大切にしていこうと、これからどのように生活していきたいのかについて丁寧に対話していくことが大切である。この時期形成された自己内対話能力が、その後の人間として生きていく力の核心部分となっていく。 ・友達の喜びや悲しみに共感していけるように、また、全体の中の自分ということが考えられるようにしていく。子どもたちは互いに、ぶつかり合い、助け合い、教え合い、学び合い、育ち合うようになる。その中で、自主性・自制心・協調性・規律性・責任感・達成感・共感・行動力・判断力・予測能力など、様々な心理的発達をみせて子どもの自己内対話能力は育っていく。

	4 歳	5 歳	6 歳	実践の重点及び配慮
生活	4 歳頃 睡眠 ・夜の睡眠時間は11～12時間。昼寝をしない子も見られる。 食事 ・友達と楽しく食事をする。 ・嫌いなものでも少しずつ食べようとする。 ・よく噛んで食べる。 排泄 ・排泄の失敗がなくなる。 ・排泄後の後始末がほぼできる。 着脱衣 ・順序よく着脱ができる。 ・ボタンやスナップのはめははずしができる。 清潔 ・うがい・手洗い・歯磨きの習慣が身に付く。 ・鼻をかみ、身体を清潔に保とうとする。 ・髪をとかす。 6 歳頃 ・10～11時間。昼寝をしなくなる。 ・食事の仕方が身に付く。 ・食べ物と身体の関係に関心をもって食事をする。 ・排泄や後始末を上手にする。 ・脱いだものを一定の場所に置く。 ・必要に応じて衣服の交換や調節をしようとする。 ・一人で衣服の着脱がきちんとできる。 ・入浴時に自分で身体を洗えるようになる。 ・汗が出たらハンカチで拭く。 ・清潔にしておくことが病気の予防と関連することが分かる。 ・身体や衣服・持ち物などを清潔にする仕方を身に付ける。 ・生活に必要な活動の意味が分かり進んで行うようになる。自分でできることに喜びをもちながら、健康、安全など生活に必要なことを少しずつ身に付けていく。 ・身近な自然や出来事について関心をもち、いろいろな関わりを強めるようになる。動植物の世話もするようになる。			・家庭・所・園・地域の連続性のある生活の流れで、一日の生活を組み立てることが基本となる。保護者と保育者が協働して、子どもの発達のみちすじに沿った生活プランを打ち合わせ、子どもが見通しをもって生活や遊びができるようにしていくことが大切である。子どもが基本的生活習慣を確立し、集団生活での基本動作や身辺自立ができるようにしていく。 ・就学も意識して、早寝早起きの生活リズムが身につくよう、家庭に働きかけていく。 ・身近な動植物を責任をもって世話する中で、動植物への愛着やいたわりの気持ちが育まれると共に、人に対する思いやりの気持ちも育まれる。
遊び	4 歳頃 ・手遊び、指遊びが巧みになる。両手の協応と指先の機能分化が高次化する中であやとり・おはじき・お手玉・ボール遊びなどを楽しめる。 ・積み木・ブロックなどを用いての「構成遊び」が盛んになる。素材も豊かになり、出来上がった構成物に対して友達の了解を得て付け加えたりする。 ・ごっこ遊びもさらに発展、充実し、子ども同士の話し合いによるイメージの共有や協力、役割分担が見られる。また、ごっこ遊びが劇遊びやペープサートに発展する場合もある。 ・隠れる側と探す側との役割が理解できるようになり、完全な「かくれんぼ」が成り立つ。さらに、かくれんぼはいろいろなやり方となって現れる。 ・手と足、右と左の協応運動を高次化させる全身運動としての「リズム体操」や縄跳び・竹馬・ボール遊びなどが好まれてくる。 ・簡単なルールを理解し始める時期であり、「ルールのある遊び」を集団で楽しむようになる。最初はじゃんけんを用いた遊びやいろいろな鬼ごっこなどから、次第にドッジボールやキックベース・サッカー・リレーなどルールのある集団的組織的遊びへと発展していく。 ・グループ間、クラス間でチームを作って競争を取り入れた遊びを好むようになる。 ・ハンカチ落とし・トランプ・カルタなどのゲーム遊びも楽しくなる。さらに、自分たちで遊具をつくり、ルールを難しくして楽しむようになる。 迷路図・ジグソーパズルなども好まれる。 ・いろいろな打楽器を組合せ、音を揃えて簡単な合奏ができる。 4 歳頃 ・文字や数・図形に関しては個人差がみられる。遊び(トランプ・カルタ・すごろく等)の中で文字や順番・順位などに関心がもてるようにする。 5 歳頃 ・文字・数字・図形や記号をつかったいろいろな遊びが工夫されて、知的な力で楽しむようになる。(しりとり・ことば集め・さかさことば・じゃんけんパズルなど)			・遊びの種類と発展過程を系統的におさえておいて、子どもの興味と意欲に応じてバランスよく取り入れていくことが基本となる。子どもが遊びを十分に体得できるようにしていくには、子どもが自主的、自発的に自由に遊びを楽しむ時間帯を十分保障することが大切である。それにより、身体的・知的・心理的など、様々な力を子どもの中に育てることができる。 ・楽しい遊びを豊かに展開する中で諸能力を育てるという視点が不可欠である。優れた遊び文化を伝えることにより、運動能力や手の操作性、言語力や集団力など、様々な力を子どもの中に育てることができる。 ・異年齢で一緒に遊んだり、生活したりする中で、小さい子への思いやりを育み、相互の違いを認め合える関係を大切にしていく。 ・文字での表示や五十音表を貼るなどして文字環境を整える。
保育課題	※ 4 歳頃は個人の力においても集団的力においても大きな飛躍の年である。4 歳以前の発達と質的に変化がでてくるが、この変化を豊かに越えることがその後の子どもの発達課題に大きな影響を与える。			・大人や仲間が本人の存在を肯定的に受け止め、居場所を積極的に提供し「基本的安全感」の確立を保障することがこの時期大切である。それと同時に子どもの自己内対話能力の育ちを促していきたい。また、大人が改めて子どもを権利の主体として捉え、子どもの最善の利益を保障するために、子どもの言動や欲求を受け止め共感していくことが、自己決定していく際の子どものにとって強い味方となり、「～ダケレド～スル」という行動につながる。いろいろな活動や経験の中で自己内対話能力を育て、自己決定していくことを通し、その子らしい個性と社会性の基礎が培われていく。 ・文字、数量の知識、概念については、教科学習開始前に身に付けておきたい前提の力を明確化し、意図的、系統的に確かなものにする必要がある。教科学習の前提の力としては次のようなことがあげられる。 話し言葉について～日常生活において人の話を聞いて概ね理解できるようになること。また、自分の気持ちや経験がある程度人に伝えられるようになること。 書き言葉について～相手と共有し合いながら、話し言葉を豊かに表現できること。また、自由に線が引け、形が書け、位置関係が理解できるようになること。 数量について～10程度の数概念が形成されていて、10のまとまりを理解する力が形成されていること。

Ⅲ 教育・保育計画

【教育・保育計画】

教育・保育計画は、１年間保育を進めるための指導書（ガイドブック）となるものであり、職員が同じ考えをもって保育を実施することを可能にするものである。

教育・保育計画は、それぞれの地域性や施設の設置状況、子どもや保護者の状況等に応じた計画でなくてはならない。したがって各施設において計画立案するが、計画立案するにあたっては、下記事項を必ず含んだ内容の教育・保育計画を立案するものとする。

< 保 育 所 >

I 保育所の概要 1 沿革 2 保育所の概要 (1) 所在地 (2) 地域及び近隣略図 (3) 地域の特徴 (4) 通所地域一覧 3 施設の概要 (1) 敷地・建物面積 (2) 保育所配置図 II 運営方針・組織 1 運営の重点 2 職務分担・運営組織図 3 クラス編制表・職員構成 4 年間行事予定 5 保育所の問題点 III 保育実施計画 1 保育課程 2 クラス経営 (月齢別指導計画 別紙) - 期別指導計画 別紙) 3 年間計画 (1) 月別行事予定表 (2) 取り組み別年間計画 (儀式的行事・誕生会 他) (3) 食育計画 (4) 保健計画	IV 研修計画 1 保育所職員研修計画 2 所内職員研修計画 3 新規採用職員 臨時的任用職員育成計画 4 時間外職員研修計画 5 ブロック研修計画 6 幼保小関連研修計画 V 安全確保 1 災害、防災計画 (1) 予防管理組織 (2) 所内消防班組織図 (3) 避難訓練計画書 (4) 交通安全指導計画 2 不審者対応について (1) 不審者対応訓練計画 (2) 不審な電話、不審物の対応 3 こどもがいなくなった時の対応 4 怪我、病気について (1) 疾病時の対応、救急処置 (2) 心肺蘇生法 (3) 伝染性感染症について (4) 与薬について 5 アレルギー対応について 6 人権に関する事故の対応 (虐待、人権) 7 個人情報の取り扱いについて VI 苦情申し出窓口設置 (1) 保護者への通知文 (2) 苦情受付用紙 など * 保育所・こども園職員ハンドブック
--	---

< 幼稚園 >

I 園の概要 1 沿革 2 園の概要 (1) 園名・所在地 (2) 地域（園区）及び近隣略図 (3) 地域の特徴 3 町丁目別園児数 4 施設の概要 (1) 園地・園舎面積 (2) 園舎配置図 II 幼稚園経営 1 教育目標 2 経営の方針 3 経営の重点 4 指導の重点 5 教育の全体構想図 III 組織 1 学級編制 2 職員構成 3 園医・薬剤師 4 園務分掌 IV 教育課程の編成 1 教育課程編成の方針 2 教育週数 3 日課表 4 年間行事予定 V 体験教育 1 儀式的行事計画 2 季節の行事計画 3 誕生会 4 運動会 5 発表会 6 健康に関する教育 (1) 食育指導計画 (2) 給食指導計画 (3) 保健指導計画 (4) 基本的生活習慣	7 自然社会体験に関する教育 (1) 園外保育計画 (2) 飼育計画 (3) 栽培計画 (4) 鹿野山宿泊保育計画 8 異年齢交流計画 VI 研究・研修計画 1 研究計画 (1) 研究主題 (2) 研究主題について 2 研修計画 VII 安全教育 1 安全組織 2 生活安全指導計画 3 交通安全指導計画 4 災害安全計画（防災） 5 災害安全計画（不審者） 6 園外保育における 事故発生時の対応 VIII 幼保小関連研修 IX 学校人権教育指導計画 X 家庭・地域社会との連携 1 保育参観・懇談会年間計画 2 地域との交流計画 XI 特別支援教育 XII 評価 XIII 服務
--	---

<こども園>

I 沿革及び園の概要 1 沿革の概要 2 園区の概要 (1) 園名・所在地 (2) 園区の概略図 (3) 園区の特徴 (4) 町名別園児数 3 施設の概要 (1) 面積 (2) 園舎配置図 II 経営 1 教育・保育目標 2 経営の方針 3 経営の重点 4 教育・保育の全体構想 5 特別支援教育 III 園経営の組織 1 職員構成 2 学級編制 3 園医・薬剤師一覧 4 運営組織図 5 園務分掌 IV 教育課程の編成 1 編成の方針 2 指導の重点 3 教育週数 4 日課表 ユニット方式について 5 年間行事予定 V 体験教育 1 儀式的行事 2 文化的行事 (1) 幼児こども園運動会 (2) 生活発表会計画 3 季節の行事 4 異年齢交流 ・異年齢交流計画 ・小学校との関連計画 5 園外保育年間計画	6 鹿野山宿泊保育年間計画 7 飼育計画 8 栽培計画 9 誕生会年間計画 VI 健康に関する教育 1 健康教育年間計画 (1) 保健指導計画 (2) 健診及び検査計画 2 栄養教育年間計画 3 健康・栄養教育指導計画 4 給食指導計画 VII 安全に関する教育 1 生活安全教育 2 交通安全指導計画 3 不審者侵入想定避難訓練計画 4 防災年間計画 ・避難訓練計画 ・消防計画 VIII 家庭・地域に関する教育 1 保育参観・懇談会計画 2 地域との交流計画 3 子育て支援計画 IX 研究・研修 1 人権教育 2 研究計画 X 評価 XI その他
--	--

IV 指導計画

項目等の考え方・・・・・・・・・・ 31～32

【月齢別指導計画】

	月 齢	ページ		月 齢	ページ
1	8週から3か月未満	33	8	2歳から2歳6か月未満	45
2	3か月から6か月未満	35	9	2歳6か月から3歳未満	47
3	6か月から9か月未満	37	10	3歳から3歳6か月未満	49
4	9か月から12か月未満	39	11	3歳6か月から4歳未満	51
5	12か月から1歳3か月	41	12	4歳から5歳未満	53
6	1歳3か月から1歳6か月	42	13	5歳から6歳未満	55
7	1歳6か月から2歳未満	43	14	6歳	57

【期別指導計画】

目標及び援助のポイント・・・・・・・・ 59～62

期	年齢及び月	ページ	期	年齢及び月	ページ
1期	2歳児 4・5月	63	11期	4歳児 4・5月	83
2期	2歳児 6・7・8月	65	12期	4歳児 6・7・8月	85
3期	2歳児 9・10月	67	13期	4歳児 9・10月	87
4期	2歳児 11・12月	69	14期	4歳児 11・12月	89
5期	2歳児 1・2・3月	71	15期	4歳児 1・2・3月	91
6期	3歳児 4・5月	73	16期	5歳児 4・5月	93
7期	3歳児 6・7・8月	75	17期	5才児 6・7・8月	95
8期	3歳児 9・10月	77	18期	5歳児 9・10月	97
9期	3歳児 11・12月	79	19期	5歳児 11・12月	99
10期	3歳児 1・2・3月	81	20期	5歳児 11・12月	101

指導計画（項目を含む）の考え方

月齢別指導計画・・・発達のみちすじに沿った指導計画。子どもを個と捉え、その月齢に応じた望ましい保育の在り方や育てるべき姿をねらいとして作られた計画。

期別指導計画・・・・・・2歳以上の子どもが集団としてクラス（学級）を中心とした生活や活動を展開していくための指導計画。

0歳児から1歳児については、個の発達に応じた保育が基本であるため、月齢別指導計画を指導計画とする。

2歳児については、年齢としては個が基本となるが成長過程の中で小集団としてクラス（学級）保育が可能となってくることから、期別指導計画についても立案した。各施設の子どもの状況に応じて、月齢別指導計画と期別指導計画のどちらかを選択する。

3歳児以上については、個を基本としながらもクラス（学級）保育が主になることから期別指導計画とする。

項目の説明

ねらい・・・・・・保育の目標を具現化したもの。

養護のねらいとは、生命の保持及び情緒の安定を図るために保育者が行わなければならない事項である。

教育のねらいとは、子どもの自発的・主体的な活動を保育者が援助することにより子どもが就学までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情・意欲・態度を示した事項である。

内 容・・・・・・ねらいを達成するために子どもの状況に応じて保育者が適切に行うべき事項及び保育者が援助する事項を子どもの発達の側面から示したもの。（ねらいを達成するために、何を身に付けていくのか「経験」）子どもが身に付ける望ましい事項として下記の領域を総合的に含み示したもの。

- 「健康」心身の健康に関する領域
- 「人間関係」人とのかかわりに関する領域
- 「環境」身近な環境とのかかわりに関する領域
- 「言葉」言葉の獲得に関する領域
- 「表現」感性と表現に関する領域

環境構成及び援助と配慮

- ・子どもの活動が生き生きとより望ましく発展するために、予測される環境の転換、補足を具体的に示す。さらに保育者が配慮や援助をする事柄を子ども一人一人の行動を予測しながら、様々な対応の仕方を示す。

家庭との連携

- ・子どもを育てる上で大切なことを保育者が協同で行っていく必要がある事項について示す。
- ・子どもの成長・発達についての共通理解や連携を図っていく必要がある点について示す。

評価

- ・保育を振り返り、その保育の過程を反省評価し、次の指導への改善・予測を確かなものにしていくことができる事柄を示す。
- ・ねらいは子どもの活動にふさわしいものであったか。
- ・内容についての活動計画は適切であったか。活動については、子どもたちが主体的に取り組めたか。
- ・養護については、子ども一人一人の発達を捉え援助できたか。特に基本的生活習慣の形成状況はどうか。
- ・子どもの姿はどうだったか。一人一人の子どもについての理解は十分か。
- ・環境構成と保育者の援助について、素材や遊具は適切だったか。子どもの活動について適切な援助ができたか。
- ・保育者同士の共通理解と協力体制はどうであったか。
- ・地域や家庭との連携、保護者との信頼関係について一人一人に視点をあてて考える。

1 月齡別指導計画

産休明け（8週）～3か月頃

発達 の 主 な 特 徴	・体重や身長が増加が大きく、皮下脂肪も増大して体に丸みを帯びてくる。 ・一点をじっと見つめたり、上下左右を見回したりする。 ・音や人の話し声に反応し、その方向を見る。 ・腹這いで頭を持ち上げるようになる。 ・手に触れるとわずかな間、握ろうとする。 ・自分の手を見たり、なめたりする。 ・手と手、足と足を合わせたり蹴ったりする。 ・仰向けで左右に首の向きが変えられる。 ・排泄や授乳など、子どもの欲求に対しての大人の受け止め方や働きかけに対して快（笑い）と不快（泣く）が分化する。 ・生理的な微笑みからあやされると笑うなど社会的な意味をもち始める。 ・昼と夜の区別が不明瞭で、一日に睡眠と目覚めを何度も繰り返す状態から夜8時間以上眠るようになる。 ・個人差はあるが、授乳は3時間毎、1日8回程度が目安である。 ・授乳後すぐ排便することが多い。
ねらい	・一人一人の子どもの生活リズムを重視して、食欲・睡眠・排泄などの生理的欲求を満たし、生命の保持と生活の安定を図る。 ・保健的で安全な環境を整え、快適に過ごせるようにする。 ・常に体の状態を細かく観察し、疾病や異常を早く発見する。 ・一人一人の子どもの状態に応じてスキンシップを十分に取りながら、心身ともに快適な状態を作り情緒の安定を図ると共に、基本的な信頼感を培うことができるようにする。（コミュニケーションの基礎）
内容	・一人一人の生理的欲求を十分に満たし、保育者の愛情豊かな受容的な関りによって気持ち良い生活ができるようにする。 ・一人一人の子どもの健康状態を把握し、異常のある場合は適切に対応する。 ・一人一人の子どもの心身の発育や発達の状態を的確に把握する。 ・体・衣服・遊具・寝具など身の回りにあるものを常に清潔な状態にしておく。 ・おむつ交換の場所は子どもが不快から快になる大切な場面であるので、十分スキンシップを図り、言葉をかけ微笑みかけながらゆったりと交換する。 ・授乳は、抱いて微笑みかけたり、優しく言葉をかけたりしながら、ゆったりとした気持ちで関わる。 ・受容的関係の中で、見る・聞く・触るなどの経験を通し、外界を認識することができるようにする。
環境 構成 と 配慮	・身体機能が未熟であり病気にかかりやすく、また生命の危険に陥りやすい為、体の急激な変化に対応できるように、一人一人の子どもの状態を十分に観察する。 ・愛情豊かな特定の大人との豊かな関りにより、子どもの様々な欲求を快適に満たし、子どもとの信頼関係を築くように配慮する。 ・生理的機能が未熟なため、授乳の方法・オムツのあて方・衣服の着せ方・寝具の調節・保育室の温度や湿度の調整・安全確保などをきめ細かく行う。 ・おむつ交換は、外部から見えないように一定の場所で行う。 ・授乳は必ず抱いて子どもが楽な姿勢で行う。一人一人の子どもの哺乳量を考慮して授乳し、哺乳後は必ず排気させいつ乳を防ぐ。 ・明るく心地良さとやすらぎのある空間を整えると共に、外界に対しての認知を促すことができる遊具等を整える。 ・寝具や玩具等の室内用品は、消毒したり日光にあてたりするなど常に清潔に留意する。 ・睡眠中の子どもの顔色や呼吸の状態をきめ細かく観察する。（SIDSチェック）うつ伏寝は避け、顔の周りに布団や物がなく正常に呼吸ができるような状態にする。

家庭との連携	・ 授乳の内容（母乳か人工乳か）を聞き取り、母乳を冷凍保存で使用する場合は細心の注意と綿密な連絡の上で実施していく。 ・ 子どもの24時間の生活を視野に入れ、家庭及び所・園での睡眠や授乳の生活リズムをお互いに把握できるように、細かく連絡し合う。 ・ 快適で清潔に生活することができるように、衣服やオムツについては清潔なものを用意してもらう。 ・ 子育ての情報や所・園での生活を細かく伝え、子どもの成長を共に喜び合ったり、保護者自身も徐々に所・園に慣れることができるようにしたりする。
---------------	--

3か月～6か月頃

発達 の 主 な 特 徴	・首がすわり左右180度首を動かして、追視することができるようになる。 ・うつ伏せから胸を上げることができるようになる。また、仰向けから横向きになり、やがて寝返りができるようになる。 ・手足を伸ばしたり、縮めたりする。 ・物に手を伸ばして握る。（目と手の協応） 手がもみじ状に開くようになる。 ・特定の大人に対して、笑いかけたり泣いたりなどして自分の要求を伝えようとする。 ・あやされると喜び、機嫌のよい時など「あーあー」「うーうー」などの初期の喃語を発するようになる。 ・眠っている時と目覚めている時がはっきりしてきて、生活リズムが確立してくる。 ・1回の授乳の量が増え1日5回程度になる。唇を閉じて飲み、舌先の前後運動と顎の連動運動が可能。離乳の開始時期となり、ミルク以外のどろどろ状の物をスプーンから摂取できるようになる。 ・排便が1日2回程度になる。
ね ら い	・特定の大人による愛情豊かな受容のもとで、心理的欲求を満たし心地よく生活する。 ・一人一人の子どもの生活リズムを重視して、食欲・睡眠・排泄などの生理的欲求を満たし生命の保持と生活の安定を図る。 ・保健的で安全な環境を整え、快適に生活できるようにする。 ・常に体の状態を細かく観察し、疾病や異常は早めに発見する。 ・安全で活動しやすい環境を用意して、寝返りや腹這いなど運動的な活動を促す。 ・安心できる環境（人的、物的）の下で、聞く、見る、触れるなどの感覚の働きが豊かになるようにする。 ・笑ったり、泣いたりする子どもの状態に優しく応え、発声に応答しながら喃語を育む。
内 容	・一人一人の子どもの健康状態を把握し、異常のある場合は適切に対応する。 ・室内外の温度や湿度に留意し、子どもの健康状態に合わせて衣服の調節をする。 ・一人一人の健康状態を見ながら離乳食を開始し、ミルク以外の味覚や形状に慣れていく。 ・一人一人の子どもの心身の発育や発達の状態を的確に把握する。 ・立位で抱かれた状態で屈伸をしたり、腹這いや寝返りをしたりして、体を動かすことを喜ぶ。 ・赤ちゃん体操やオムツ交換時のマッサージなどを取り入れ、保育者の優しいスキンシップによって、心地良く体を動かす。 ・優しく抱かれながら、きれいな色彩や音の出る遊具に触れて遊ぶことを喜ぶ。 ・優しい語りかけや歌いかけ、泣き声や喃語への応えかけなどにより保育者との関わりが心地良いものになる。
環 境 構 成 と 配 慮	・健康状態を十分観察し、常に看護師との連携を図って変化に対しては早い対応をする。 ・保育室は天候に応じて温度・湿度の調整を行うと共に、一人一人の発育や発達状態、健康状態に応じて情緒の安定が図れるように、室内の色彩やベットの位置などその都度適切に整える。

環境構成と配慮	・ 子どもの心地良い体位で遊ばせながら、寝返りや腹這いの機会をつくるようにする。 ・ 目覚めている時は個別に抱き上げたり、あやしたり、優しく揺らしたりして、人に対する関心や周囲に対する興味が育つように配慮する。 ・ 玩具などは素材・大きさ・形・色・音質など子どもの発達に適したものを選び、遊びを通して感覚が発達するように配慮する。 ・ 玩具は常に安全で清潔にする。 ・ 体調や天候をみて、外気に触れる機会をつくる。 ・ 体調や便の状態をみながら栄養士と連携をとり、無理なく離乳の開始を進めていく。
家庭との連携	・ 授乳の内容（母乳か人工乳か）を聞き取り、母乳を冷凍保存で使用する場合は、細心の注意と綿密に連絡を取り合い実施していく。 ・ 寝返りやハイハイの準備期であるので、動きやすい衣服を用意してもらう。 ・ 子どもの24時間の生活を視野に入れ、睡眠や授乳などの生活リズムが安定するように家庭と所・園とが連携できるように配慮していく。

6か月～9か月頃

発達 の 主 な 特 徴	・ 仰向けからうつ伏せ、うつ伏せから仰向けになることができるようになる。 (寝返りの完成) ・ うつ伏せの状態ですぐに体を上げることができる。(手掌支伏臥位) ・ うつ伏せになって後ろに下がる後ろ這いから、腹這いになり前に進むようになる。 ・ 脇の下を支えられて足でぴょんぴょんと跳ねるようになる。 ・ 一人で座ることができるようになる。 ・ 体が左右に倒れそうになった時、手を伸ばして支える。 ・ 物をつかみ、持ち換える。(熊手型つかみ) ・ 人見知りをするようになり、不安や恐れを感じると特定の人に甘える。 ・ 人見知りや警戒心・甘えなどの様々な感情が表れ、嫌な時には強く泣き特定の人に甘える。 ・ 「バーバー」「アブー」などの喃語を盛んに発する。 ・ 目覚めている時間が10時間以上になる。(昼寝3、4回程度) ・ 舌でつぶせる固さのものを食べることができる。(離乳食2回授乳3回) ・ 便が固くなり、いきむようになる。
ね ら い	・ 保健的で安全な環境をつくり、快適に生活できるようにする。 ・ 体の状態をきめ細かく観察し、疾病や異常を早めに発見する。 ・ 一人一人の甘えなどの依存欲求を満たし、保育者の十分なスキンシップや優しい関わりにより、基本的信頼感を確かなものにし情緒の安定を図る。 ・ 一人一人の健康状態を見ながら離乳食を進め、様々な食品や調理形態に慣れるようにする。 ・ 安全で活動しやすい環境を整え、姿勢を変えたり移動したり様々な身体活動を十分に行えるようにする。 ・ 聞く・見る・触れるなどの経験を通して、感覚や手や指の機能を働かそうとする。 ・ 優しく語りかけたり発語や喃語に応答したりして、発語の意欲を育てる。
内 容	・ 母体免疫が弱まり感染症にかかりやすくなるので日々の様子を観察し、変化がある場合には適切に対応する。 ・ 一人一人の子どもの心身の発育や発達の状態を的確に把握する。 ・ 体、衣服、身の回りにあるものを常に清潔な状態にしておく。 ・ 一人一人の生理的欲求を十分に満たし、保育者の愛情豊かな受容により気持ちのよい生活ができるようにする。 ・ 室内外の温度や湿度に留意し、子どもの健康状態に合わせて衣服の調節をする。 ・ 寝返り・はいはい・お座りなどそれぞれの発達に合った体の動きを喜ぶ。 ・ 玩具などを手に持つ、いじる、打ちつけて音を出すなどして楽しむ。 ・ 信頼できる大人との関わりの中で発声を楽しむ。 ・ 玩具への関心が高まり、遊びの場が広がるようにする。
環 境 構 成 と 配 慮	・ 特定の保育者との温かい触れ合いや優しい語りかけが、子どもの情緒を安定させ順調な発育や発達を支えることを認識して、子どもに接するように心がける。 ・ 人見知り、不安、甘え、恐れ、怒りなどの感情の表われ方を理解して、共感し受け入れ安定できるように接していく。 ・ 授乳や離乳は、一人一人の子どもの健康状態や食欲に応じて行うと共に、咀嚼や嚥下など一人一人の発達状態を適切に促すことができるように、食品や調理形態等に十分配慮をしていく。 ・ 一人一人の運動発達の表われ方の違いを理解し、一人一人の楽しんでいる姿勢や移動を十分に経験することができるようにしていく。 ・ 自分から玩具に向かっていこうとする意欲的な行動が満たされるような環境をつくっていく。

家庭との連携	・ 離乳食を進める大切な時期なので、連絡を密にし無理のない内容で進めることができるよう、食品や調理形態など具体的に連絡し合う。また、新しい食品を摂取したときの便や皮膚の状態などを家庭と連携して観察していくようにする。 ・ 歯が生え始める時期なので、口の中を清潔にすることに心がけてもらう。 ・ 寝返りやずり這いなど動きが活発になると共に、変化の多い時期なので子どもの小さな変化もできるだけ保護者に伝え、成長の喜びを共感し合うことができるようにする。 ・ 生活リズムを整え、規則正しい生活と十分な休息を心がけてもらう。
---------------	---

9 か月～12 か月頃

発達の 主な特徴	・膝と手の平をついて体を上げて四這いができるようになったり、膝を伸ばして高這いをしたりするようになる。 ・つかまり立ちから伝い歩きをするようになり、移動運動が活発になる。 ・親指を使って掴むようになる。（母指対向操作） ・相手の言っている言葉と動作や物が結びつく。 ・志向のある喃語（マーマー・ブーブー）を発する。 ・相手の模倣を喜んでするようになる。 ・大人の指差しに反応し行動するなど、自分と大人と第三者（物）との三項関係が形成される。 ・まとめてぐっすり眠ることができるようになる。（午前1回午後1回の昼寝） ・歯茎でつぶせる固さの物を食べることができる。（離乳食3回 授乳3回） ・便意をもよおすと意識的にいきむようになる。 ・「ちょうだい」「まてまて」など保育者と関わって遊ぶことを楽しむ。
ねらい	・保健的で安全な環境をつくり、快適で健康的な生活ができるようにする。 ・常に体の状態を細かく観察し、疾病や異常は早く発見していく。 ・一人一人の子どもの甘えなどの依存欲求を満たし、情緒の安定を図る。 ・一人一人の状況に応じて離乳食を進め、様々な食品や調理形態に慣れ、喜んで食事ができるようにする。 ・はいはいやつかまり立ちなどの移動遊びを、安全な環境の中で十分に経験できるようにする。 ・聞く・見る・触るなどの経験を通して、感覚や手や指の機能を働かすことができるようにする。 ・身の回りのものに対する興味や好奇心が芽生え探索を楽しむ。 ・一人一人の子どもとの関係を大切にし、指差し行動に対して的確な言葉を返したり、簡単な歌や手遊びなどを向き合って楽しむなどして発語の基礎を培う。
内 容	・一人一人の子どもの心身の発育や発達の状態を的確に把握する。 ・特定の保育者との関係で十分な甘えなどの依存欲求が満たされ、徐々に他の人にも関心が向くようにする。 ・楽しい雰囲気の中で喜んで食事ができるようにしていく。 ・一人一人の排尿間隔を把握し、おむつが汚れたら優しく言葉をかけながら取り換え、きれいになった心地よさを感じられるようにする。 ・お座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩き、立つ、歩くなど、それぞれの状態にあった活動を十分に行う。 ・つまむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。 ・喃語や片言を優しく受け止めてもらい、発語や保育者とのやりとりを喜ぶ。
環境 構成 と 配慮	・発達が進み、新しい行動が可能となると行動範囲が広がるので、身の回りの物などはいつも十分な点検を行い、安全を確認した上で探索意欲を満たして自由に遊べるようにする。この時期は伝い歩きがはじまるが、這うことも十分に経験することができるようにする。 ・自分で移動ができるようになったり、手指の機能が発達したりする中で、周囲の状況の理解が進み、自分から目新しいものを見つけては、触れる、なめるなどの行動がさらに活発化する。子どもが自ら行って、見たい、触れてみたいと感じるように、玩具類に変化をもたせたり創意工夫をしたりして環境を整える。

成 と 配 慮	盲いて一人遊びをしている時は見守り、保育者との関係を求めてきたらボール転がリズム遊びなどのやりとりを楽しむ遊びを一人一人と向き合っていく。 一人の状態に合わせて食品の種類や量を増やしたり、大きさや固さなどの調理形態も変化させたりして離乳食7～8か月食から9～11か月食へとスムーズに移行することができるようにする。 ・活動状態や健康状態によって、安心できる環境の中で必要な午睡が十分できるようにする。
家 庭 と の 連 携	・離乳食の具体的な進め方をその都度細かく連絡し、いろいろな食材に触れる経験ができるように知らせる。 ・歯や口腔内を清潔に保つための具体的な方法を知らせ、習慣化できるように働きかける。 ・はいはいからつかまり立ち・立つ・歩くなど目覚ましい発達をする変化の多い時である。子どもの小さな変化もできるだけ保護者に伝え、成長の喜びを共感し合えるようにする。

12か月～1歳3か月頃

発達 の 主 な 特 徴	・手足を交差して、すばやく四つ這いすることが出来るようになる。 ・不安定ながらも自分で立って歩くことができるようになる。特徴として手を上にあげてバランスをとる。 ・足を前に出して、長時間座ることができるようになる。（長座り） ・親指と人差し指の先を使って、物をつまむことができるようになる。 ・「あった」「あっち」など、定位の指差しをしたり音声を発したりする。 ・興味をもった物の傍にいて触ったり、取ったりする。 ・排尿の間隔が次第に長くなる。 ・一日の生活リズムが安定し、午睡が1日1回になってくる。 ・歯茎で噛める固さの物が食べられる。（離乳食3回から次第に乳児食に移行。） ・大人の模倣を盛んに行うようになる。まねっこや「ちょうだい」「どうぞ」などのやりとりをする。
ね ら い	・常に体の状態を細かく観察して疾病や異常は早く発見する。 ・保健的で安全な環境をつくり、快適に生活できるようにする。 ・はう・立つ・歩くなどそれぞれの状態に合った動きを楽しむ。 ・一人一人の子どもの甘えなどの依存欲求を満たし、情緒の安定を図る。 ・つまんだり、引っ張ったりなど、手先や指先を十分に使って遊ぶ。 ・指差しや動作に伴う発語をしっかり受け止め、言葉の芽生えを育てる。 ・スプーンを自分で持って食べようとする姿などを大切にし、自分で食べる意欲をもつことができるようにする。
内 容	・食べたい、寝たいなど自発的な行動を見守り、自分からしようとする意欲を育てていく。 ・スプーンを使って食べたり、コップで飲んだりすることに慣れていく。 ・喃語や片言を優しく受け止めてもらい、保育者とのやり取りを楽しむ。 ・保育者や身近な人の行動に関心をもち、簡単な模倣を楽しむ。 ・保育者に見守られて、玩具や身の回りのもので一人遊びを十分に行う。 ・はう、立つ、歩く、よじ登る、くぐるなどの全身を使った遊びを十分に行う。 ・つまむ、叩く、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。 ・保育者と一緒に草花やきれいな色彩のものなどを見たり、動物や身近なものが表現されている絵本などを見て喜ぶ。
環 境 構 成 と 配 慮	・一人一人の子どもの発育・発達状態を把握し、子どもが興味をもって自分からしてみようとする意欲を大切にしながら温かく見守る。 ・排泄は一人一人の排尿間隔を把握し、おむつが汚れたら優しく言葉をかけながら取り替え、きれいになった心地よさを感じられるようにする。 ・子どもの行動を見守り、満足いくまで時間をとるようにして探索活動などが十分に経験できるようにする。 ・探索活動が活発になると危険を伴う姿が予測されるので、適切な対応ができるように見守り、探索への意欲が知的な発達を育てていくことを保育者は意識して関わっていく。 ・1対1の言葉かけや絵本を一緒に見るなどして、話したい気持ちが十分に満たされ、発語をさらに促していくことができるようにする。 ・行動が活発になるので、十分な休息がとれるように配慮する。
家 庭 と の 連 携	・動きが活発になり危険を伴う事が多くなるので、家庭内の安全に配慮してもらう。 ・いろいろな食材に慣れる大事な時期であるので、栄養士や担任を通じて調理方法や食べさせ方を知らせていく。

1歳3か月～1歳6か月頃

発達の主な特徴	・手を中間の位置にしてバランスをとって歩く姿から、次第に手をおろして歩くようになる。 ・はう姿勢で階段を登り、後ずさりで降りてくる。 ・「ワンワン」「マンマ」など一語文を話す。 ・大人の質問に対して指差し（可逆の指差し）をしたり、言われたことをやろうとする。 ・自分でしようとする気持ちが芽生える。 ・大人のすることをじっと見たり、真似てみたり、他児の持っている物やしていることに関心をもつようになる。 ・コップを両手に持って、自分で飲もうとする。
ねらい	・一人一人の子どもの健康状態に応じて、食欲、睡眠、排泄などの生理的欲求を満たし、快適に過ごせるようにする。 ・指差しや動作に伴う発語を優しく受け止めながら言葉をかけ、言葉の芽生えを育てる。 ・様々な食品や調理形態に慣れ、乳児食に移行できるようにする。 ・安全で活動しやすい環境の中で、自由に体を動かすことを楽しむ。 ・安心できる保育者のもと、自分以外の人に関心をもち関わろうとする。 ・身の回りの様々なものに自由に触れて遊び、外界に対する好奇心や関心をもつ。
内容	・一人一人の子どもの状態や、室内外の温度や湿度に合わせて衣服の調節をする。 ・様々な食品や調理形態に慣れ、咀嚼して飲み込むことができるようにする。 ・おむつが汚れたことを不快に感じ、表情や身振りで表してきた時には、ゆったりと関わりながら交換し、心地よさが感じられるようにする。 ・登る、降りる、跳ぶ、くぐる、押す、引っ張るなどの体を動かす遊びや、いじる、たたく、つまむ、転がすなど手や指を使う遊びをする。 ・一人一人の子どもの気持ちを理解し、受け止め、子どもとの信頼関係を深めることで、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。 ・一人一人の子どもが探索を楽しめるようにし、子どもの驚きや満足感などを受け止め共感していく。
環境構成と配慮	・いろいろな食品や調理形態に慣れることができるように、栄養士と連携を取り、乳児食に移行していく。 ・好き嫌いが出てくる時期であるが、励ましたり、褒めたりして少しでも食べようとする意欲をもつことができるようにする。 ・おむつが汚れたときの子どもからのサインを見逃さず、タイミングよく交換する。 ・一人一人の子どもに適した接し方で、安心して眠ることができるようにする。また、目覚めたときは温かい言葉をかけ、必要に応じて衣服を着替えるなど適切な対応をする。 ・戸外での活動を多くするが、戸外に出るときには日照や気温などに注意して、帽子や服装に配慮し、子どもの体調に合わせて無理をしないようにする。また、水分補給を適切に行う。 ・保育者へ依存したい気持ちはいつでも温かく受け止め、安心して自己主張をしたり、要求を伝えたりできるようにしていく。 ・探索活動が十分できるような環境を整え、繰り返し触れたり見たり感じたりして新しい発見をしながら、物の扱い方や身のこなしを身に付けていく。
家庭との連携	・離乳食が完全に終了し、乳児食へと移行できるように家庭と連携をとって進める。 ・おむつに排尿や排便した時の子どもの様子を見逃さず、早めに交換して心地よく過ごせるようにしてもらう。 ・活動がより活発になり家庭でも誤飲等の事故が発生しないように、注意すべき点などを伝えていく。 ・家庭と所・園での様子を細かく伝え合い、子どもの思いや欲求に丁寧に応えていけるように連携を図っていく。

1 歳 6 か 月 ～ 2 歳 頃

発達 の 主 な 特 徴	・ 斜面や段差のあるところを好んで歩いたり走ったり、少し高いところから跳び降りたりするなど活発に体を動かす。 ・ 両足を揃えて階段を一段ずつ登り降りするようになる。また、しゃがんだ姿勢で物を拾ったり、遊んだりする。 ・ クレヨンなどを持って上下・左右の線を描いて楽しむことから、次第に手首のコントロール力がついて、ぐるぐる円を描く。 ・ 一語文の数が増えて形や色の使い分けができるようになり、物と名詞などが一致してくる。次第に二語文を話すようになる。 ・ 「これは？」「どうして？」などの質問を繰り返すようになる。 ・ 積み木を3個以上積んだり、簡単な形を入れ分けたりなどができるようになる。 ・ 自我が芽ばえて、「○○じゃない○○だ」と自主的な決定をするようになる。 ・ 乳児食が食べられるようになり、次第に好き嫌いがはっきりしてくる。 ・ こぼしながらも自分でスプーンを使って食べようとする。また、コップを両手で持って自分で飲む。 ・ 尿や便が出た時に知らせたり、時々尿意や便意を仕草や言葉で伝えたりする。 ・ オマルやトイレに座って排泄することもある。 ・ 大人や他児の真似をして楽しむ。（模倣遊び） ・ 歌や手遊びを喜び、リズムに合わせて体を動かしたり真似をして歌ったり手を動かしたりする。 ・ 他児の持っている物、していることに興味をもち、同じことをしようとする。
ね ら い	・ 様々な食品や調理形態に慣れ、楽しい雰囲気の中で食べることができるようにする。 ・ 安心できる保育者との関係の下で食事や排泄・着脱などとおして、自分でしようとする気持ちが芽生える。 ・ 保育者の働きかけにより発語が促され、言葉を使うことを楽しめるようにする。 ・ 安全で活動しやすい環境の中で、自由に体を動かすことを楽しむ。 ・ 行動範囲が広がり、探索活動を楽しみながらいろいろなものに触れて興味関心をもつ。 ・ 絵本や玩具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。
内 容	・ 保育者に見守られて、外遊びや一人遊びを十分に楽しむ。 ・ 好きな玩具や遊具、自然物に自分から関わり十分に遊ぶ。 ・ 自分でしようとする気持ちを見守り、適切に援助しながら満足感を味わえる経験を積み重ねる。 ・ オマルやトイレに興味をもち、保育者に促されて排泄しようとする。 ・ 手や指を使う玩具で遊ぶ経験や、道具を使う経験を十分に行う。 ・ 保育者の話しかけを喜んだり、自分から片言で話したりすることを楽しむ。 ・ 興味のある絵本を保育者と一緒に見ながら、簡単な言葉の繰り返しを楽しんだり、模倣をしたりして遊ぶ。 ・ 保育者と一緒に歌ったり、簡単な手遊びをしたり、体を動かしたりして遊ぶ。 ・ 保育者の優しい言葉かけと援助で衣服の着脱に興味関心をもつようになる。

環境構成と配慮	・食欲や食事の好みに偏りが現れやすい時期なので、日常の心身の状態を把握しておき、無理なく個別に対応する。 ・排泄はゆったりとした気持ちで対応し、子どもが自分から便器に座ってみようと思うような話し方や接し方をする。 ・歩行の発達に伴い行動範囲が広がり、探索行動が活発になるため、予測できない行動が多くなるので、安全な環境を整えていく。 ・全身を使うような遊びや手や指を使う遊びでは、子どもの自発的な活動を大切にしながら時には保育者がやってみせるなど、保育者と一緒に楽しんで遊べるようにする。 ・自分でしようとしている時や何かに熱中してる時は、温かく見守る。また、子どもの発見や驚きを見逃さず受け止め、好奇心や興味を満たし共感できるようにする。 ・保育者と一緒に絵本を見ながら絵本の内容を動作や言葉で表したり、歌を歌ったりして模倣を楽しめるようにする。 ・子どもの相互のトラブルが多くなるが、一人一人の気持ちを受け止め、保育者の優しい語りかけなどにより互いの存在に気づくようにする。
家庭との連携	・食欲や食事の好みに偏りが現れやすい時期なので、日常の家庭での食事の様子をできるだけ細かく把握できるようにする。また、所・園での食事の様子や変化についても細かく知らせる。 ・排泄については、子どもの状況をしっかり伝え、オマルや便座に座るなど一人一人の状況に応じて進められるようにする。 ・友達とのトラブルが増える時期であるが、この時期の重要な発達の現れであることを知らせていく。

2歳～2歳6か月頃

発達 の 主 な 特 徴	・後ずさりをしたり、横歩きをしたりする。 ・他児と手をつないで歩くことを喜ぶ。 ・つま先歩きができたり、片足を少しの間上げたり、走ることも安定するなど脚力がついてくる。 ・その場でジャンプしたり、下り斜面を降りたりするなど、バランスをとって動くことがスムーズになってくる。 ・蛇口を開けたり閉めたりなど、物を掴んでねじることを楽しむ。 ・スコップやバケツなどを道具として利用する。（対照的行為） ・行動範囲の広がりとともに、探索意欲が活発になり、発見の喜びを保育者や他児に伝える。 ・名詞と動詞の二語文を話す。（ワンワン、きた）また、自分の名前を入れて話したり、自分の要求を言葉や仕草で伝えたりしようとする。 ・多い、少ない（いっぱい・ちょっと）がわかるようになる。丸や四角の形が認識できる。 ・「いや」が頻繁に出るようになり、なんでも自分でやりたがるなど、自我がはっきりしてくる。 ・みたて・つもり遊びを盛んにする。 ・スプーンを下手持ちでもち自分で食べるようになる。 ・パンツやズボン・靴を、自分で脱いだり履いたりしようとする。
ねらい	・一人一人の欲求を十分に満たし、情緒の安定を図り、安心して自分の気持ちが表現できるようにする。 ・保育者と一緒に、全身や手指を使う遊びを楽しむ。 ・保育者と簡単な言葉のやりとりを楽しむ。 ・興味のあることや経験したことを、生活や遊びの中で保育者と一緒に再現しようとする。 ・安心できる保育者の見守りのもと、食事・排泄・着脱などの簡単な身の回りのことを自分でしようとする。
内容	・保育者の受容的、応答的な関りの中で、欲求を適切に満たし、安定感をもって過ごせるようにする。 ・楽しい雰囲気の中で自分で食べようとする気持ちを大切にし、苦手なものでも少しずつ食べられるようにする。 ・保育者に促されてトイレに行き、排泄しようとする。 ・保育者の助けを借りながら、簡単な衣服の着脱をしようとする。 ・走る・跳ぶ・登る・押す・引っ張るなど、全身を使う運動を取り入れた遊びをする。 ・つまむ・丸める・めくるなど手や指を使って遊ぶ。 ・保育者と一緒に水・砂・土・紙などの素材に触れて遊ぶ。 ・身の回りの小動物や植物・事物などに触れ、それらに興味をもって探索や模倣などをして遊ぶ。 ・生活に必要な簡単な言葉を聞き分けたり、身近な出来事に興味を示し言葉や仕草で表したりする。 ・絵本や紙芝居を見たり、聞いたりし、繰り返しの言葉の模倣をする。

環境構成と配慮	・「おいしいね」「ピカピカになったね」「お腹すいたね」など、子どもの思いに共感しながら食べる楽しさを感じられるようにする。 ・一人一人の子どもの状態によって、休息や水分補給・汗を拭き取る・衣服を着替えるなどの配慮をする。 ・自分で清潔にしようとする気持ちがもてるように配慮し、手洗いや口のまわりを拭くなど一人でできた時には十分に褒めるようにする。 ・子どもが自分でしようとする気持ちを大切にし、一人一人の子どものに合った援助を心がけていく。 ・子どもの話を優しく受け止め、自分から話したいという気持ちを大切にする。 ・外遊びや遊具で遊ぶ機会を通して、子どもが主体的に遊べるように環境を工夫していく。
家庭との連携	・「できる」「できない」で評価しがちだが、自分で何でもしようとする気持ちが大切だということを知らせ、できるだけゆったりと生活することができるよう働きかけていく。 ・「イヤイヤ期」が成長の一過程であることを知らせ、温かく見守ってもらえるようにする。

2歳6か月～3歳頃

発達 の 主 な 特 徴	・嫌いなものでも励まされて食べようとする。 ・スプーンを使って、自分で食べられるようになる。 ・上衣を脱いだり、ボタンをかけたりすることに関心をもち、自分でしようとする。 ・便意、尿意を知らせて自分でトイレで排泄する。 ・足踏みをしたり、片足立ちしたりすることが数秒できる。 ・前方に飛び降り、バランスをとって着地することができる。 ・三語文が話せるようになる。 ・自分の名前や年齢、クラスや保育者、友達の名前が言える。 ・多少・長短・上下が分かるようになる。 ・1・2が数として分かる。3つ以上は「たくさん」や「いっぱい」となる。 ・自分より小さい子には分けてあげるなど、自分との関係の中で自我を抑えることがある。 ・良い、悪い、できる、できないなど二分的な評価が基準となる時期である。 ・友達と同じ場でみたとやつもし遊びをする。
ね ら い	・安心できる保育者に見守られて、食事・排泄・着脱などの簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 ・一人一人の子どもの欲求を十分に満たし、情緒の安定を図りながら安心して自分の気持ち表現できるようにする。 ・保育者や他児と一緒に自分の好きな遊びを楽しむ。 ・保育者や他児と一緒に、全身や手指を使う遊びを楽しむ。
内 容	・楽しい雰囲気の中で、スプーンやフォークを使って自分で食べようとする。 ・簡単な衣服は手伝ってもらいながら脱いだり、着たりする。 ・顔を拭く、手を洗う、鼻を拭くなど保育者の手を借りながら自分からきれいにしようとする。 ・自分からトイレに行き、保育者が見守る中で排泄しようとする。 ・走る・跳ぶ・登る・押す・引っ張るなど全身を使う運動遊びをする。 ・つまむ・丸める・めくるなど手や指を使う遊びをする。 ・保育者の仲立ちにより、他児と同じ場で遊ぶことを喜ぶ。 ・保育者と一緒にみたと・つもり遊びをする中で、言葉のやりとりをする。 ・保育者と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。 ・自分の物や人の物の区別に気付く。保育者の適切な援助によって自分の物の置き場がわかり、自ら片付けようとする。
環 境 構 成 と 配 慮	・自分で食べようとする気持ちを大切にしながら、ひと口で食べられる量を知らせていく。 ・自分で身の回りのことをしようとする姿を認め、できないところは援助する。 ・運動面の発達に伴い動きが活発になるので、危険のないように十分に注意し、遊具や道具は事前の点検を行う。また、子どもがしたいことを十分に行うことができるように、時間と空間の確保をする。 ・同年齢や異年齢の子どもとの触れ合いの機会を多くし、友達への関心を広げていく。 ・繰り返しのある絵本を読み、絵本の登場人物になったつもりで遊びを楽しむことができるようにする。 ・歌うことや音楽に合わせて体を動かすことが楽しめるよう、保育者は繰り返しの歌詞やリズムカルな曲を正しく美しく表現する。

家庭との連携

- ・子どもが身の回りのことを自分でしようとする気持ちを大切にしてもらう。
- ・所・園で親しんでいる手遊びや好んでいる絵本などを知らせ、家庭でも一緒に楽しみ、保護者と子どもが豊かな関係を築けるようにする。

3 歳から 3 歳 6 か月頃

発達 の 主 な 特 徴	・片足跳びで前に進む、腕を振って走るなど二つの動きを一緒に行うことができるようになる。 ・走る・跳ぶ・飛び降りる・登る・しゃがむなどの基本動作が身に付く。 ・親指と人差し指でつまみ、それを手の平で握りさらに次のものをつまむなどの細かい動作が可能になる。閉じた一重の円がかけられるようになり、円を組み合わせて表現しようとする。 ・三語文から多語文になる。言葉での表現力が豊かになり身の回りの人や友達と簡単な会話をしたり、一緒に遊んだりする。 ・自己主張を強くするようになり、クラスの活動に対して参加しなかったり動き回ったりする。また、自分の思うようにならないと泣いたり大きな声を出したりする。 ・男と女・姓と名・2歳と3歳などの判断ができるようになる。さらに、好き嫌い・強い弱い・大きい小さいなどの概念がわかるようになる。 ・三輪車がこげるようになる。 ・身の回りの経験を再現して遊ぶ。 ・はさみを使って紙を切ることが、少しずつできるようになる。 ・身の回りのことを自分でやろうとするようになり、簡単な手伝いも喜んでする姿が見られる。
ね ら い	・保育者との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるなどの情緒の安定した生活ができるようにする。 ・外遊びを十分にするなど、遊びの中で体を動かす楽しさを味わう。 ・身近な環境に興味をもち、自分から関わり、生活を広げ、手法を身に付けていく。 ・いろいろなことを言葉で表現することを喜び、したいことやしてほしいことを言葉で表すようになる。 ・身近な人と関わったり、友達と遊ぶことを楽しんだりする。 ・感じたことや思ったことをかいたり歌ったり体を動かしたりして、自由に表現しようとする。 ・食事・排泄・睡眠・衣服の着脱など、生活に必要な基本的な習慣を自分でしようとする。
内 容	・外で十分に体を動かしたり、様々な遊具や用具などを使った運動遊びを楽しんだりする。 ・保育者に親しみをもち、様々な欲求を受け止めてもらうことで、安心感をもって生活することができるようにする。 ・様々な素材や用具を使って、好きなようにかいたり扱ったり形をつくったりして遊ぶ。 ・自分の思ったことや感じたことを言葉に表わし、保育者や友達と言葉のやりとりを楽しむ。 ・保育者にしてほしいことや困ったことを言葉で伝えたり、「なぜ」「どうして」などの質問をしたりする。 ・身近な事物や言葉に関心をもち、言葉に表したり触れたり集めたり並べたりすることを楽しむ。 ・身近な人々の生活の様子を取り入れた模倣遊びを楽しむ。 ・絵本や童話などの簡単な内容がわかり、イメージをもって楽しんで聞く。 ・保育者の手伝いをすることを喜ぶ。 ・楽しい雰囲気の中で様々な食べ物を進んで食べようとする。 ・保育者の手助けや励ましにより、衣服の着脱や手洗いなどの身の回りのことをする。

環境構成と配慮	・子どもの気持ちを温かく受容し、触れ合いや語り掛けを多くして、情緒の安定を図る。 ・走る・跳ぶ・飛び降りる・登る・しゃがむなどの全身運動を楽しく行うことができる。環境設定（巧技台・固定遊具など）をする。 ・生活や遊びの中でトラブルが生じた時は、子どもの気持ちを受け止めたり共感したりする。また、子どもの気持ちを代弁したり解決方法を知らせたりしていく。 ・大人とのコミュニケーションを楽しみたいという子どもの気持ちを受け止め、子どもの興味関心に沿って話し掛けたり、子どもの話を聞いたりして会話を楽しめるようにしていく。 ・保育者や環境を仲立ちとした模倣遊びの中で、友達と一緒に遊ぶ楽しさを体験できるようにしていく。 ・身近な様々なものに興味をもち、触れたりかかわったりする。興味や探索意欲などを十分満足できるように環境を整え、保健・安全面に十分留意して子どもが意欲的に関われるようにする。 ・日頃より子どもの興味関心事を十分把握し、集中して活動に取り組むことができるよう、子どもの興味にあった環境を整える。（模倣遊び・製作遊び）
家庭との連携	・強い自己主張や拒否や落ち着きがないなど、この年齢の特徴を保護者に伝え、焦らず、丁寧に接することの大切さを伝える。 ・自分でできることが多くなってくる時期であるので、援助をしながらも自分でできたという充実感を感じることができるよう知らせる。 ・基本的動作が身に付く時期であるので、家庭でも一緒に体を動かして遊ぶ大切さを知らせていく。

3歳6か月から4歳頃

発達 の 主 な 特 徴	・ 2つの動作を同時にできるようになる。 ・ 階段の昇降を片足ずつ交互に出して歩くようになる。 ・ 縦線と横線を組み合わせて十字をかくことができるようになり、丸との組み合わせができるようになる。描画では顔から対称に手、足が出始める。(頭足人) ・ 粘土を丸めたりはさみを使ったりして、手先が器用になる。 ・ 長短・大小・高低によって、積み木などを区分することができるようになる。 ・ 語彙の数が急増し、複合文が話せるようになる。 ・ 音や色・文字・数・量・形などに興味をもち、違いに気付くようになる。 ・ 歌や楽器演奏を聴いて楽しむようになる。簡単な曲に合わせて手を打ったり体を動かしたりしてリズムをとることを楽しむようになる。 ・ 簡単な手伝いを頼むと喜んで行う。 ・ 保育者や遊具を仲立ちとして、子ども同士が関わって遊ぶ姿が多くなる。 ・ 基本的な生活習慣が身に付いてくる。
ね ら い	・ 体を動かして遊ぶことを喜び、できることを何度も繰り返し楽しむ。 ・ 絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、その内容や面白さを楽しむ。 ・ 身近な人と関わり、友達と遊ぶことを楽しむ。 ・ 見たり、聴いたり、思ったりしたことを、かく・歌う・踊るなどして自分なりに表現していく。 ・ 様々なものを見たり触れたりして面白さや美しさに気付く。 ・ 生活に必要な言葉がある程度分かり、したいことやして欲しいことなどを、自分の言葉で表現しようとする。 ・ 基本的な習慣が身に付いてきて、自分で行おうとする。
内 容	・ リズム遊びなど体を様々に動かして遊ぶことを楽しみ、できることを喜ぶ。 ・ 音楽に親しみ、聴く、歌う、体を動かす、簡単なリズム楽器を鳴らすなどして楽しむ。 ・ 保育者の仲立ちのもと、遊具や用具などの貸し借りをしたり、順番を守ったり交代したりする。 ・ 興味をもった言葉を面白がって聞いたり、言ったりする。 ・ 生活や遊びの中で、身の回りの物の色・数・量・形などに興味をもち、その違いに気付く。 ・ ごっこ遊びの中で日常生活の言葉を楽しんで使い、役になりきって言葉のやり取りを友達や保育者と楽しむ。 ・ 年上の友達に遊んでもらったり、模倣して遊んだりする。 ・ 所・園の行事に喜んで参加する。 ・ 様々な用具、材料に触れたり、使ったりして遊びを楽しむ。 ・ 食事・排泄・睡眠・衣服の着脱などの、生活に必要な基本的な習慣が身に付いてくる。

環境構成と配慮	・体の動きが一層活発になるので、十分体を動かすことができる環境を整える。また、複合的な動きを体得する時期であるので、リズム遊びや運動遊びなどで二つの動きを一緒にするような遊びを積極的に取り入れていく。 ・絵本や童話、紙芝居などの面白さがわかるように配慮すると共に、生活の中でできるだけ言葉と行動や出来事が結び付くように配慮する。 ・子どもが保育者や友達と話したいという気持ちを満たすことができるように配慮する。 ・音・色・文字・数量・形などについて、興味や関心をもてるような環境をつくり、触れる機会を多くする。 ・保育者が仲立ちとなり友達との関わりがもてるようにする。 ・手伝いは、友達と一緒に取り組むことができるような内容を考えていく。 ・4歳児や5歳児との関わりをもつことができる環境をつくり、遊びを見たり、模倣したりすることができるようにする。 ・身の回りのことは、自分でしようとする気持ちを大切にしながら、適切な援助をする。
家庭との連携	・反抗期から少しずつ自分以外の人の言動に応じて自分を抑えるようになってくることを伝え、こうした成長を受け止め、認めていくことを知らせる。 ・語彙が増え、様々な表現を喜んでする時期なので、家庭でも会話を楽しめるように知らせていく。 ・生活習慣がほぼ身に付いてくる。甘えたい気持ちを受け止めながら、自分でやりきることができた時には十分に誉めることを知らせていく。

4 歳から 5 歳頃

発達 の 主 な 特 徴	・ 1 時間以上連続して歩くことができるようになる。また走って目的地まで行きそのまま連続して身体を動かす活動をするなど、身体能力がめざましく発達する。 ・ でんぐり返しをしたり、タイヤ跳びをしたりする。また、ヨーイドンでかまえて走り出したり膝の屈伸をしながら前進したりするなど、複合した行動ができるようになる。 ・ 左右の手の交互開閉が巧みになり、上昇・下降でその速さ・強さ・幅を調整するようになる。 ・ 人物がかかるようになり顔に続く首と胴体を対称軸にし、手・足などが対称に表われ三角形・四角形がかかるようになり、菱形（斜めへの挑戦）へ関心をもつ。 ・ 自分なりの目的をもってつくったりかいたり、行動したりするようになると共に、思った通りにいかなかったことに対して葛藤をする姿がある。（自制心の芽生え） ・ 1 から 10 前後の数を呼称し、1 から 5 程度の数の概念がわかるようになる。 ・ 一緒に遊ぶ友だちを求め、ごっこ遊びが盛んになり役割を果たすことに喜びを見出す。 ・ 男児、女児、それぞれの遊びに傾向が出てくる。 ・ 友達と言葉を交わしながら、共通の目的を達成しようとする。 ・ 保育者の意図を理解して行動することができるようになる。自分の納得できない理由であったり、楽しみにしていた約束が破られたりすると自分の思いを主張する。 ・ 年下の友達の衣服の着脱の手伝いをするなど世話をしたがる。
ね ら い	・ 一人一人の子どもの気持ちや考え方を受けとめながら、保育者との信頼関係を深め安心して生活できるようにする。 ・ 友達と身近な遊具や用具を使い、十分に体を動かして遊ぶ。 ・ 友達とのつながりを広げ、集団で活動することを楽しむことにより、思いやりの気持ちや自制心を身につける。 ・ 身近な環境に興味をもち、また、身の回りの事物や数・量・形などに関心をもち、自分から関わって遊ぶ。 ・ 異年齢の友達や身近な人々に関心をもち、関わりを広める。 ・ 人の話を聞いたり自分の経験したことや思っていることを話したりして、言葉で伝える楽しさを味わう。
内 容	・ 保育者との信頼関係の中で、自分の気持ちや考えを安心して表すことができるようになる。 ・ 進んで戸外で体を十分に動かして遊ぶと共に、遊具や用具・自然物を使い様々な動きを組み合わせて積極的に遊ぶ。 ・ 具体的な物を通して数や量・形に関心をもち、簡単な数の範囲で数えたり比べたりすることを楽しむ。 ・ 童話・絵本・視聴覚教材などを見たり聞いたりしてイメージを広げ、かいたりつくったり、体を動かしたり言葉に表わしたりするなど、様々な表現をして遊ぶ。 ・ 友達と生活したり遊んだりする中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。 ・ 保育者の言うことや友達の考えていることが分かり、一緒に行動するとともに身近な人にいたわりや思いやりの気持ちをもつ。 ・ 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 ・ 年下の友達に親しみをもったり、年上の友達とも積極的に遊んだりする。また、地域の様々な人々に関心をもち、関わったり話を聞いたりする。 ・ 保育者や友達と一緒に身近な動植物の世話をを行う中で、愛情をもつ。 ・ 危険なものや場所について分かり、遊具・用具などの使い方に気を付けて遊ぶ。 ・ 衣服などの着脱を順序よくしたり、その時の天候や活動に合わせて適宜調整をしたりする。

環境構成と配慮	・子どもの冒険心や興味・関心を大切にし、新しい運動や遊びに対する不安や恐れを取り除くなどして、生き生きと活動が展開できるように配慮する。 ・数・量・形などは直接それらを取り上げるのではなく、生活や遊びの中で子ども自身の必要に応じて具体的に体験できるようにし、数量的な感覚を育てていくようにする。 ・子どものイメージが湧き出るような素材・玩具・用具・遊具・生活用品などを用意したり、じっくり取り組む時間を保障したりして、伸び伸び表現して遊ぶことができるようにする。 ・保育者の言動は、子どもが美しいものを感じたり良いものを選んだり、感動したり、思いやりをもったりすることなどに強い影響を及ぼすのでそれに留意する。 ・子ども同士の模倣や認め合いを大切にしながら、表現する意欲や創造性を育てるように配慮する。 ・友達とのトラブルを経験しながら次第に相手の立場の理解が進み、時には自分の主張を抑制することによって、楽しく遊べることに気付くように配慮する。子どもの心の葛藤を受け止め、その様子を優しいまなざしで見守るようにする。 ・動植物の飼育や栽培の手伝いを通して、それらへの興味や関心をもつようにし、その生長や変化などに感動し愛護する気持ちを育てるようにする。 ・目標に向かって努力するようになるが、人が自分をどう見ているかを意識して失敗を怖がり表現することをしなくなることもある。ありのままの良いことを知らせ、一人一人の良いところや頑張っている姿を認めていく。保育者は、生活経験や一人一人の発達状況と遊離した特定の技能の習得に偏らないように注意する。 ・生活のいろいろな場面で、異年齢の友達や身近な人々に接する機会を多くもち、自分から関わりがもてるような場面をつくっていく。 ・見たことや聞いたこと、感じたことを言葉で表現できる雰囲気をつくる。 ・絵本や童話などの内容を子どもが自らの経験と結び付けたり、想像をめぐらせたりしてイメージを豊かにできるよう、その選定や読み方に配慮をする。 ・健康・安全など生活に必要な基本的生活習慣は、日常生活の直接的な体験の中で身に付くように配慮する。
家庭との連携	・大人の意向に従って動くことができるようになるが、あまり高度なことを求めることにより、子どもが萎縮したりやり場のない怒りを表わしたりする。こうした子どもの成長を認識し、今の姿を十分に認めていくようにする。 ・友達との関係の中で様々なトラブルを経験することによって、自制心を身に付けていく。子ども同士のトラブルを成長の重要な一過程として見守るよう伝える。 ・運動量が多くなるので、十分な休息が必要であることを知らせていく。

5歳から6歳頃

発達 の 主 な 特 徴	・足組み・腕組み・指組みができるようになり、利き側が決まってくる。 ・20cmの紐を跳び越えたり、立ち幅跳び・縄跳びができるようになる。 ・斜面やでこぼこ道をリズムカルに一定の速度で持続して歩いたり、スキップ・ギャロップ・片足跳びをしたりする。 ・片手でボールを投げ、投受の構えやコントロールができ始める。 ・描画では正面・後ろ向き・横向きを描こうとし、粘土などでは完成のイメージをもって構成をして立体的な物を作ろうとする。 ・「ちょっと好き」「中くらい」など中間的な捉え方ができ始める。 ・語彙は2000語を超え、話し言葉の文の長さは平均5語になり、複文がふえ、言葉での表現が主体となる。数については13くらいまでの呼称や対応ができるようになる。5以下の「+1」、「-1」が分かるようになる。 ・仲間の存在が重要になり、目的に向かって数人がまとまって活動するようになる。お互いが自分のやらなくてはならないことやきまりを守ることの必要性が分かり、仲間の一人として自覚が生まれ集団として動くことができる。 ・自分と相手の欲求のぶつかりあいやトラブルが起きても、今までのようにすぐ大人に頼るのではなく、自分達で解決するようになってくる。 ・基本的生活習慣は殆ど自立し、手伝いなども自分の目的をもって行うようになる。好きでないことも少しは我慢して行い、他人の役に立つことが嬉しく誇らしく思う。
ね ら い	・様々な道具や用具を使い、複雑な運動や集団遊びを通して体を動かすことを楽しむ。 ・感じたことや思ったこと、想像したことを自由に表現すると共に、様々な用具や道具を積極的に使って作ることを楽しむ。 ・日常生活に必要な事物や事象を見たり扱ったりなどして、その性質や存在に興味をもったり、数・量・形などへの関心を深める。 ・周りの人々に対する親しみを深め、集団の中で自己主張したり、また相手の立場を考えながら行動したりする。 ・自分でできることの範囲を広げながら健康や安全など、生活に必要な基本的生活習慣や態度を身につける。 ・一人一人の子どもが健康で安全に過ごしたり、健康増進が積極的に図れるようにする。 ・一人一人の子どもが自分の気持ちを表したり、周囲から受け止められ自分を肯定する気持ちが育まれていくようにする。
内 容	・友達と体を動かして遊ぶことを十分楽しむと共に、様々な運動用具に進んで取り組み工夫して遊ぶ。 ・うがいや手洗いの意味が分かり、体や身の回りを清潔にするなど自分の生活に必要なことに関心をもつ。 ・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。 ・生活に必要な簡単な文字や記号などに関心をもつ。また簡単な数の範囲で、物を数えたり・比べたり・順序を言ったりする。 ・友達への親しみを広げたり深めたりして、自分達でつくったきまりを守ると共に遊びを発展させる。 ・自分の意見を主張するが、相手の意見も受け入れる。 ・異年齢の友達や周りの人々とかかわりを深め、思いやりやいたわりの気持ちをもつ。 ・公共の場でのマナーや交通ルールがわかり、自分から進んで守ろうとする。 ・自然や身近な事物や事象に関心をもち、それを遊びに取り入れたり、作ったり、工夫したりする。 ・生活の中で、中間を基点とする前後・左右・遠近などの位置が分かり、時刻・時間などに興味をもつ。 ・子どもの主体的活動や自発性を高めるとともに、自信をもつことができるよう成長の過程を見守り、働きかける。

環境構成と配慮	・一人一人の子どもの健康状態を把握し、普段と違う様子に気付いたら問いかけをし、子どもがその状態を話すことができるように配慮するとともに、必要に応じて速やかに適切な対応をする。 ・子どもの気持ちを温かく受容し、所・園生活の様々な場面で子どもが安定しかつ自己を十分に発揮して活動できるように配慮する。 ・健康や安全など生活に必要な基本的な習慣や態度が身につく、自分の体を大切にしようとする気持ちが育ち、自主的に行動することができるように配慮する。 ・様々な場面で自分を主張でき、相手の立場を認め相手の良いところを見つける力が育つように配慮する。 ・集団生活は一人一人が活かされ認められるよう、また、子どもが相互に必要な存在であることを実感できるような友達関係を築いていけるようにする。 ・飼育・栽培を通してどのように生きているのか、育つのかに興味をもち、生命がもつ不思議さに気付くようにする。 ・生活の様々な場面を通して、自然や社会の事象に対して、好奇心や探索心を満たすことができるよう配慮する。 ・日常生活の中で具体的な活動を通して、数・量・形・位置・時間などに気付くように配慮する。 ・文字や記号については、日常生活や遊びの中で興味をもつよう、用具・遊具・視聴覚教材などの使用や配置等に配慮する。 ・絵本や童話などの内容を子どもが自らの経験と結びつけたり、想像をめぐらせたりして、イメージを豊かにできるよう、絵本等の選定や読み方に十分配慮していく。 ・表現しようとする意欲を高め、結果にとらわれず一人一人の子どもの創意工夫を認め、創造的な喜びが味わえるように配慮する。 ・子どもの考え方や子ども同士の認め合いを大切にし、みんなで一緒に表現することの喜びを味わうことができるようにする。
家庭との連携	・基本的生活習慣が身につくように家庭と連携を取り確認をしながら子どもに働きかけることができるようにする。 ・子ども同士で約束をして行動することが多くなるので、保護者同士や地域が連携を取り、子どもの行動を把握して、安全に十分注意するよう働きかけていく。 ・大人の尺度で子どもを判断することのないよう、それぞれの子どもの良いところを認めることができるようにしていく。 ・文字や数については、子どもの興味関心に応じて知らせていくようにし、教え込むなど過剰な働きかけにならないように注意する。

6 歳頃

発達 の 主 な 特 徴	・ できることが多くなり、自信をもって自分の役割を果たそうとしたりきまりに従おうとしたりする。 ・ 全身運動も滑らかになり、幅跳びは1mを超え、20cm近く垂直跳びをするようになり鉄棒での逆上がりや縄跳びなどに進んで挑戦するようになる。 ・ ドッジボールなどルールのある遊びを友達と喜んで取り組む姿が多くなる。 ・ 細かい手や指の動きが一段と進み、目と手の協応動作や指先を使った細かな動きが増えてくる。 ・ 語彙は3000語を超える。基本文法が整い、変化を捉えて流暢に話し、幼児語を使わないようになる。数の理解は20以上の呼称・対応・選択ができるようになり、目算や2個ずつの数え方などができるようになる。10以下の「+1」「-1」ができるようになる。 ・ 文字や数に興味をもち、絵本を自分で読んだり名前をひらがなで書いたりして、学校へ行くことに強い期待をもつ。 ・ 時間に関心をもち、1時間単位で時刻が分かるようになる。また、曜日が言えるようになって、昨日・今日・明日や今年・去年などの時の経過が分かってくる。 ・ 人物画は、頭髮・眉毛・眼球・指・服・靴など細部までかく。道順等も始点から終点までかくとともに横道を加えてかいたり、その説明もしたりすることができるようになる。 ・ 思考や認識力が高まり、自然事象や社会事象に興味関心が深まる。 ・ 友達が増えて役割をもって遊び、ルールに基づく役割の交代をするなど集団として組織だった協同遊びが多くなり、持続するようになる。 ・ 年間行事に合わせて役割を分担し、協力してやり遂げることに喜びを感じる。 ・ 年下の友達に対し自分の経験をもとに、身振り手振りを混ぜつつ言葉で説明できる。
ね ら い	・ 体や病気について関心をもち、健康な生活に必要な基本的生活習慣や態度を身に付ける。 ・ 様々な遊具や用具を使い複雑な運動や集団的な遊びを通して、体を動かすことを楽しむ。 ・ 進んで身近な人と関わり、信頼感や愛情をもって生活すると共に、人の立場を理解して行動し、進んで集団での活動に参加する。 ・ 進んで異年齢の友達と関わり、生活や遊びなどで年長児として役割分担することを喜ぶ。 ・ 身近な事物や事象に積極的に関わり、見たり扱ったりする中でその性質や数・量・形への関心を深める。 ・ 自分の経験したことや考えたことなどを適切な言葉で表現し、相手と伝え合う楽しさを味わう。 ・ 身近な文字に関心を深め、読んだり・書いたりすることを楽しむ。 ・ 感じたことや思ったことや想像したことなどを、様々な方法で工夫して自由に表現する。 ・ 一人一人の子どもが健康で安全に過ごし、健康増進を積極的に図る。 ・ 一人一人の子どもが自分の気持ちを表し周囲から受け止められて、自分を肯定する気持ちを育む。
内 容	・ 保育者との信頼関係の中で自分の気持ちや考えを安心して表し、情緒の安定した生活を送る。 ・ 食事・排泄・睡眠・休息など生理的欲求が適切に満たされた中で、自分から進んで生活や遊びをする。 ・ 生活や遊びの中で危険を招く事態が分かり、気を付けて行動する。 ・ 様々な運動遊具を使って友達と一緒に工夫して遊びを発展させると共に、自分の目標をもち、その目標に向かって努力し、積極的に様々な運動をする。 ・ 進んで自分の思いや意見、立場を主張したりする一方で、相手の意見を受け入れたりもする。 ・ 友達との関わりの中で良いことや悪いことがあることがわかり、判断して行動する。 ・ 友達と一緒に目標をもち、それに向かって協力してやり遂げようとする。 ・ 季節により自然に変化があることが分かり、自然事象の性質や変化・大きさ・美しさ・不思議さなどに関心を深める。 ・ 日常生活の中で簡単な数を数えたり順番を理解したりすると共に、身近にある標識や文字や記号などに関心をもつ。

内容	・生活や遊びの中で時刻・時間などに関心をもつ。 ・行事に進んで参加し、自分なりの役割を果たす。 ・身近な事物や事象について話したり、日常生活に必要な言葉を適切に使ったりすることができるようになり、挨拶・伝言・質問・応答・報告ができるようになる。 ・人の話を注意して聞き、相手にわかるように話すと共に、相手や場面の違いにより使う言葉や話し方が違うことに気付く。 ・様々な音・形・色・手触り・動きなどに気付き、感動したことや発見したことなどを創造的にかいたりつくったり体で表現したりする。 ・音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりする。
環境構成と配慮	・健康、安全など生活に必要な基本的生活習慣や態度を身に付けることの大切さを理解し、適切な行動を選択することができるように配慮する。 ・様々な運動に取り組み、やり遂げた喜びや自信をもつことができるように配慮する。 ・様々な人の存在に気付き、人の役に立つことの喜びを感じることができるように配慮する。 ・身近に住んでいる様々な人と交流し、共感し合う体験を通して人と関わることの楽しさや大切さを味わうことができるように配慮する。 ・動植物との触れ合いや飼育・栽培などを通して、自分たちの生活との関わりに気付き、生命を尊重する心が育つようにする。 ・生活や遊びの中で具体的な体験を通して、数・量・形・位置・時間などについての感覚が無理なく養われるように配慮する。 ・生活や遊びの中で言葉の充実を図り、言葉を使って思考することや自分の考えを伝え合う喜びを味わえるようにして、言葉に対する関心が高まるように配慮する。 ・本を見ることができたりひらがなやカタカナなど、身近な様々な文字を読んだり書いたりする喜びを大切に、言葉が豊かになるようにする。 ・表現しようと思うもののイメージが豊かに湧くような雰囲気をつくり、様々な材料や用具を適切に使えるようにしながら、表現する喜びを味わえるように配慮する。
家庭との連携	・友達とのつながりが深まり、子ども同士の行動範囲が広がる。子どもの行動を把握することができる保護者同士、保育者と保護者や地域の連携を強化する。 ・できることが多くなり、大きい子どものように振舞ったりする反面、時々甘えてくることで気持ちのバランスをとっていることを理解し、受け止めてもらえるように働きかける。 ・過剰な期待や働きかけをしないように、子どもの意欲や興味にそって無理なく関わっていくことを共通理解する。

2 期別指導計画

2歳児 目標及び援助のポイント (◎ 目標)

項目	2歳児
年間を通して	◎保育者と一緒に同じ場で好きな遊びを楽しむ。 (子どもの姿) ・自分でトイレに行き、パンツやズボンを膝下まで下げて排泄することができるようになってくる。 ・自分でスプーンを持って食べられるようになり、こぼす量が減る。 ・自分の所持品の置き場所が分かり、自分で準備したり片付けたりする。 ・したいこと、して欲しいことを言葉や仕草で保育者に伝える。 ・走る、跳ぶ、登るなど全身を使う運動遊びや、つまむ、丸める、めくるなど手指を使う遊び繰り返し楽しむ。 ・保育者と一緒に動物や絵本の登場人物の模倣をしたり、経験したことを再現したりして楽しむ。 ・歌を歌うことや音楽に合わせて体を動かすことを楽しむ。 ・同年齢や異年齢の友達との触れ合いを喜ぶ。
4月から8月	◎一人一人の欲求を十分に満たし、情緒の安定を図り、安心して自分の気持ちが表現できるようにする。 (援助のポイント) ・一人一人の甘え、不安、要求を細やかに受け止め安心して過ごせるようにし、子どもとの信頼関係を築いていく。 ・自己主張は成長過程での必要な経験として温かく受け止めていく。
9月から12月	◎保育者と一緒に、全身を使った遊びや手指を使った遊びを楽しむ。 (援助のポイント) ・発達に合った環境を設定し、十分に体を動かして遊べるようにする。 ・一人一人の子どもの状態によって、休息や水分補給、汗を拭きとる、衣服を着替えるなどの配慮をする。 ・指先を使った遊びは、落ち着いて遊べるコーナーを設け、少人数で遊ぶ配慮をしていく。
1月から3月	◎保育者と一緒に、食事・排泄・着脱などの簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 (援助のポイント) ・尿意を感じトイレに行くことができたり、簡単な身の回りのことができたりしたときには十分に認め、自信をもてるような言葉をかける。 ・3歳児室で過ごす機会をつくり、進級することへの期待がもてるようにする。

3 歳児 目標及び援助のポイント (◎ 目標)

項目	3 歳児
年間を通して	◎保育者や友達と一緒に好きな遊びをしたり、友達と関わって遊んだりすることを楽しむ。 ・走る・跳ぶ・飛び降りる・登る・しゃがむなどの基本動作が身に付き、2つの動きを一緒に行うことができるようになる。 ・自分なりのイメージをもってつくったり、かいたり、行動したりするようになる。 ・思い通りにいかないことに対して自己主張する姿がある。 ・ボタンかけやファスナーの開閉ができるようになり、衣服の着脱や様々な生活習慣が身に付いてくる。 ・一緒に遊ぶ友達を求め、ごっこ遊びが盛んになり、友達との遊びの中で自分のやりたい役になりきって遊ぶことを楽しむ。 ・保育者や友達と言葉を使ったやりとりを楽しむ。
4月から8月	◎園や新しいクラスでの生活の仕方が分かり、簡単な身の回りの始末をしようとする。 (援助のポイント) ・一人一人のリズムを大切にし、自分で身の回りことをしようとする気持ちを受け止めていく。 ・生活や遊びに必要な言葉を具体的に知らせ、したいこと、してほしいことなどを、自分の言葉で表せるようにする。
9月から12月	◎一日の流れがわかり、自分でできることをしようしたり、友達と同じ遊びをすることを楽しんだりする。 (援助のポイント) ・戸外に出て十分に体を動かすことができるような時間と空間を保障し、複合的な活動ができるような場の設定をしていく。 ・一日の生活の流れがわかり、自分で進んでしようとする姿を認め、伸ばしていくようにする。
1月から3月	◎自分の思いを言葉で表現できるようになり、友達との関わりを楽しむ。 (援助のポイント) ・友達と関わる機会を多くし、友達の中でも自分の思いを出していけるように仲立ちをする。 ・4歳児や5歳児との関わりをもつことができるような環境をつくり、遊びを見たり模倣したりすることができるようにし、進級することに期待をもてるようにする。

4 歳児 目標及び援助のポイント (◎ 目標)

項目	4 歳児
年間を通して	◎クラスの中で伸び伸びと自分を発揮しながら、友達と一緒に目的をもって遊ぶことを楽しむ。 ○個として ・ 基本的生活習慣は殆ど自立し、手伝いなども自分の目的をもって行うようになる。自分が好まないことも我慢して行ったり、他人の役に立ったりしたことが嬉しく、誇らしく思う。 ・ 用具や遊具の特性や操作の仕方が分かり、安全に扱えるようになる。 ・ 連続した全身運動ができるようになる。 ・ 自分とは違ったものの見方や考え方があることに気付き、その考えを認めるようになる。 ・ 遊びの中で個々の子どもが、自分を発揮するようになる。 ○グループとして ・ 友達との結びつきが強くなり、誘い合って遊びを進めていこうとするようになる。また、遊びの中で自分なりの思いや考えを言ったり、友達の考えも受け入れたりするようになり、イメージが共通になる部分が多くなる。 ・ 気の合う友達が決まってきて、固定化した仲間と一緒に遊ぶことが多くなる。 ○クラス全体として ・ クラス意識が芽生え学級全体として動けるようになる。
4月から8月	◎園での生活に慣れ、好きな友達と好きな遊びを楽しむ。 (援助のポイント) ・ 一人一人の気持ちを受け止め、保育者との信頼関係の中で安定した生活や遊びができるようにする。 ・ 遊びのルールや遊び方を知らせながら、自分のやりたい遊びをする楽しさや友達と遊ぶ楽しさが分かるようにしていく。
9月から12月	◎自分のイメージや思いを主張しながら、友達と関わりをもって遊べるようになる。 (援助のポイント) ・ 遊びが充実し、友達関係もはっきりしてくる時期なので、一人一人の興味、関心に寄り添いながらもイメージを共有して、友達との遊びが十分楽しめるようにする。 ・ 様々な場面で自分を主張することができ、相手の立場を認め相手の良いところを見つける力が育つようにする。 ・ 子どもの考え方や子ども同士の認め合いを大切にし、みんなで一緒に表現することの喜びを味わうことができるようにする。
1月から3月	◎自分の思いを出したり、友達の話の聞いたりしながら、一緒に遊びを進めていくようになる。 (援助のポイント) ・ 友達との関わりの中で、個々のアイディアを互いに認め合えるように見守ったり、励ましたり助言をしたりして、一人一人の子どもが安心して自己発揮できるようにする。 ・ グループやクラス全体で行う遊びを取り入れ、自分の力を出し満足感が味わえるようにしていく。

5 歳児 目標及び援助のポイント (◎ 目標)

項目	5 歳児
年間を通して	◎共通の目的に向かって友達と一緒に考えを出し合ったり、認め合ったりしながら遊びを進め達成感を味わう。 ◎1年生になる喜びと自覚をもち、遊びや生活の見通しをもって行うことができる。 ○個として ・自分でできることは進んで行うようになり、最後までしようとする。 ・細かい手指の動きが一段と進み、様々な道具を使ってつくることができるようになると共に、身体の動きのバランスがとれるようになる。 ・言葉に対する感覚や表現する力が育ってくる。 ・感情をコントロールしたり、善悪を客観的に見極められたりできるようになる。 ○グループとして ・グループの遊びが多くなり、互いの意見や考えを出し合いながら、共通のイメージをもって遊びを進めていくようになる。 ・友達が頑張っている姿を認めたり、相手の気持ちを感じ取ったりして行動できるようになる。 ○クラス全体として ・生活や遊びにめあてや見通しをもって、クラスの友達と積極的に活動しようとする。
4月から8月	◎グループで遊びを展開し、互いに考えを伝え合って一緒に遊ぶことを楽しむ。 (援助のポイント) ・友達と刺激し合ったり、教え合ったりすることを大切にしていき、友達を認め合う気持ちもてるような関係を育てていく。 ・気持ちの行き違いや思いをうまく伝えられないことからトラブルが発生するが、互いに話し合って解決できるよう見守ったり助言したりする。
9月から12月	◎クラス全体での課題や目的をもって、意見を出し合ったり、協力したり、工夫したり分担したりしながら遊びを進め、充実感を味わう。 (援助のポイント) ・遊びの中のイメージを共通化し、進めていけるようにする。保育者は互いの思いが伝わるように橋渡しをし、遊びが停滞した時の原因を把握し、自分たちで解決することができるようなきっかけをつくっていく。 ・いろいろな活動の中で、一人一人の思いや考えを出し合って起こる衝突を自分なりに受け止め、互いの気持ちを考え合えるようにしていく。
1月から3月	◎一人一人が自分のめあてをもち、力を十分に発揮しながら友達と協力して遊びや生活を進めていく。 (援助のポイント) ・クラスとしてのまとまりの中で、個々の力が生かされた実感とお互いのよさを認め合う喜びを感じながら、遊びや生活を進められるように援助していく。 ・小学校に対しての期待感をもち、必要な物の準備を自分でしたり、一日の流れを予測して行動したりできるようにする。

第 1 期	2 歳児（第 1 期） 4 月～5 月
子 ど も の 姿	・ 新入児は、家庭との生活の違いに慣れるのに時間がかかる。 ・ 新しい環境に戸惑いながらも好きな遊びを見つけて遊んだり、保育者や同じ場にいる子どもと遊んだりする。 ・ 保育者や他児に親しみをもち、名前を呼んだり、簡単な挨拶をしたりする。 ・ 「いや」「自分で」などの自己主張が多くなる。 ・ 自分の欲求が通らないと泣いたり、怒ったりする。
内 容	○ 新しい保育者や保育室に親しみをもち、安心して過ごす。 ○ 家庭的な雰囲気の中で、ゆったりと食事をする。 ○ おむつが濡れていない時に、便器に座ってみる。 ○ 簡単な衣服の着脱を保育者と一緒にしようとする。 ○ 保育者と一緒に手を洗って拭く。 ○ 保育者に見守られたり、触れてもらったりしながら、安心して午睡をするようになる。 ○ 保育者と一緒に好きな遊びをする。 ・ 好きな歌を歌ったり、リズムにのって体を動かしたりする。 ・ 固定遊具や運動遊具などで遊ぶ。 ・ 砂遊びをする。 ・ 庭の虫や草花を見たり、触れたりする。 ・ 好きな遊具や好きな場所で遊ぶ。 ・ 絵本やパネルシアターを喜んで見る。 ○ 自分の気持ちを言葉や仕草で伝えようとする。
行 事	・ 身体測定 ・ 内科健診 ・ 避難訓練 ・ 保護者懇談会

養護のねらい	・ 一人一人の状況や、発達状態を把握し、情緒の安定を図りながら無理なく新しい環境に慣れるようにする。 ・ 保健的で安全な環境を整え、快適に生活できるようにする。	教育のねらい	☆ 保育者に不安や欲求を受け止めてもらいながら、一緒に好きなことをして遊ぶ。
環境構成及び援助と配慮	・ 家庭の状況を把握しながら個人差に配慮し、ゆったりとした生活の中で、食事・排泄・午睡ができるように心がける。 ・ 寒暖の差が激しい時期なので、衣服の調節や室温に十分配慮する。 ・ 個人差を把握し、一人一人に合わせた対応が行えるように、保育者間で共通理解を図り連携をとる。 ・ 新入児は、同じ保育者が受け入れをして、安心して過ごせるような温かい雰囲気をつくる。 ☆ 一人一人の甘え・不安・要求を細やかに受け止めて、安心して過ごせるようにし、子どもとの信頼関係を築いていく。 ☆ 自分の持ち物が分かるように、棚や引き出し・靴箱など、身の回りのものを置く場所には個人マークを付けておく。 ☆ 一人遊びや少人数で遊べる場を用意して、好きな場所で好きな遊びに取り組めるようにする。 ☆ 自分のしたい遊びが見つけられるように、子どもの目線を考えて遊具の設定をしておく。 ☆ ☆自分の物として持ちたがる時期なので、遊具は十分な数を用意しておく。		
家庭との連携	・ 所・園、家庭双方の様子を話し合うことで相互理解を深め、互いに連携して子どもが安心して生活できるようにする。 ・ 所・園だより・連絡帳・懇談会などを通して、子どもの姿を細やかに伝え、安心してもらうようにする。 ・ 環境が変わり不安定になるので、甘えを受け止め、スキンシップを十分に図ってもらうようにする。		
評価			

第 2 期		2 歳児（第 2 期） 6 月～ 8 月
子 ど も の 姿	・ 生活のリズムが整ってくる。 ・ 遊びたい場所や物をめぐって、自我のぶつかり合いが多くなり、自分の思いを通そうとする。 ・ 保育者に見守られながら、簡単な身の回りのことを自分でしようとする気持ちをもつ。（手拭の片付け・手洗い・簡単な着脱など） ・ いろいろな食品に慣れ、自分で食べられるようになるが、同じ食品ばかり食べたがったり、食欲が落ちたりするなど食べ方にむらがある。 ・ 走る・跳ぶなどができるようになり、体を動かすことを喜ぶ。 ・ 絵本やパネルシアターなどの話を喜んで聞き、繰り返しの言葉を喜ぶ。	
内 <		

養護のねらい	・ 一人一人の子どもの気持ちを十分に受け止めながら保育者との信頼関係を深め、安定して生活ができるようにする。 ・ 梅雨期や夏季の環境、保健に留意して、健康で快適な生活ができるようにする。 ・ 水分補給や午睡などを十分にとり、心身の疲れや緊張を和らげる。	教育のねらい	☆ 保育者に手伝ってもらいながら、簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 ☆ 保育者や友達と、同じ場で過ごしたり真似したりすることを喜ぶ。
環境構成及び援助と配慮	・ 一人一人の健康状態に気を配り、水分補給や休息と活動のバランスに配慮する。 ・ 食事は、量を加減し、食べられたという満足感が得られるようにする。 ・ 梅雨から夏を健康で快適に過ごせるように、室内の温度・湿度・換気に十分注意する。 ・ パラソルや遮光ネットなどで日陰を作り、木陰や日陰で過ごせるようにする。 ☆ 排泄の自立には個人差があるので、一人一人の状況に合わせて進めていく。 ☆ 身の回りのことを自分でしようとする気持ちを大切にし、見守ったり、励ましたりする。 ☆ 自分から話そうとする気持ちを大切にし、優しく受け止めやりとりの楽しさを知らせていく。 ☆ 他児への興味が高まり子ども同士のぶつかり合いが多くなるが、成長過程の必要な経験として温かく受け止め、保育者が仲立ちとなっていく。 ☆ みたて・つもり遊びのイメージが豊かになるように環境を整え、保育者も一緒に関わる。 ☆ 砂遊びや水遊びに興味をもてるように、砂場遊具やジョウロ・空き容器などは十分に用意する。 ☆ 身近な動植物を見たり、触れたりして、驚きや感動などの体験を豊かにする。		
家庭との連携	・ 言葉の発達は個人差が著しいので、あせらず楽しい雰囲気の中で親子のやりとりができるようにしてもらう。 ・ 体調を崩しやすい時期なので、毎日の健康状態を健康チェック表や連絡帳に記入してもらいこまめに連絡し合う。 ・ 排泄面は個人差が大きいので、一人一人に合わせて無理なくパンツに移行できるように、話し合いながら進めていく。 ・ 保育参観などを通して、所・園での様子を伝えたり、見てもらったりしながら、子どもの成長を共感し合う。		
評価			

第 3 期	2 歳児（第 3 期） 9 月～ 1 0 月
子 ど も の 姿	・ 保育者に見守られ、簡単な身の回りのことが自分でできるようになってくる。 ・ 気の合った友達と一緒に遊びたがる。 ・ 高い所に上がったり、飛び降りたりなど、体を動かして遊ぶことを喜ぶ。 ・ 模倣遊びをする中で、言葉のやりとりが増える。 ・ 好奇心旺盛で「これなに」と何でも聞くことが増える。 ・ 日常生活に必要な簡単な言葉を理解し、自分の意志や要求を簡単な言葉や仕草で伝えようとする。 ・ 「いない」「ちょうだい」などを言葉で伝えようとする。
内 容	○ ゆったりとした雰囲気の中で、食べる喜びや楽しさを感じる。 ○ 言葉や動作で尿意、便意を伝える。 ・ 自分で尿意を感じてトイレに行ったり、保育者に見守られトイレで排泄したりしようとする。 ・ 排泄後の後始末を保育者に手伝ってもらいながらしようとする。 ○ できないところを助けてもらいながら、自分で着脱しようとする。 ○ 走る・跳ぶ・登る・くぐる・跳び降りるなど、体を使って遊ぶ。 ○ 自然の変化を感じたり、木の実や木の葉に触れたりして遊ぶ。 ○ 気の合う友達と一緒に遊ぶ。 ・ 積み木、ブロックなど、作ったものに命名しながら遊ぶ。 ・ 保育者との会話を楽しむ。 ・ みたて・つもり遊びを楽しむ。 ○ 保育者や同じクラスの子どもと一緒に簡単な歌を歌ったり、体を動かしたり、動物などの表現遊びをしたりすることを喜ぶ。 ○ 身近な素材を使って、つまむ・丸める・破るなどして遊ぶ。
行 事	・ 運動会 ・ 誕生会 ・ 避難訓練 ・ 身体測定 ・ 内科健診

養護のねらい	・午睡など適切に休息をとり、心身の疲れを癒せるようにする。 ・一人一人の子どもの欲求を満たし、情緒の安定を図る。	教育のねらい	☆簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 ☆保育者と一緒に体を動かすことを喜ぶ。 ☆身近な素材をちぎったり、丸めたりなど、手指を使った遊びを楽しむ。
環境構成及び援助と配慮	・ 午睡時には絵本を見るなどして、気持ち良く入眠できるような雰囲気をつくる。 ・ 一人一人の健康状態を把握し、変化があるときには適切に対応する。 ・ 食事を楽しむ中で、スプーンの正しい持ち方を知らせていく。 ☆ 一人一人の子どもの自分でしようとする気持ちを大切にし、必要に応じて援助していく。 ☆ みたて・つもり遊びの中で、他の子どもと一緒に遊ぶ楽しさを体験できるよう仲立ちしていく。 ☆ 活発に体を動かすことができるよう、遊具の設定の方法など工夫して、体を動かすことの楽しさが感じられるようにする。 ☆ 秋の自然に触れることができるような散歩コースを考え、十分に自然に触れることができるようにする。 ☆ 季節の移り変わりを感じる機会をもち、子どもたちの驚き、発見、喜びに共感する。 ☆ つまむ・丸める・破る・貼る・めくるなどの活動ができるように素材を用意し、少人数で取り組むことができる環境をつくる。		
家庭との連携	・ 自我の芽生えや自己主張をどう受け止めるかなど、心の発達について共通理解をしていく。 ・ 日中と朝夕の温度差が大きいいため、調節できる衣服を準備してもらう。 ・ 言葉の発達には個人差があるので、話を十分聞いてあげ、簡単な言葉のやりとりを大切にしていけることを伝える。		
評価			

第 4 期	2 歳児（第 4 期） 1 1 月～1 2 月
子 ど も の 姿	・ 簡単な身の回りのことは、時々甘えながらも自分でできるようになってくる。 ・ 自分から尿意や便意を伝え、トイレに行く子どもが増えているが、寒くなり間に合わず失敗する子もいる。 ・ 手・足・全身の協応動作が巧みさを増し、力もついてきている。 ・ 喧嘩が多くなるが、機嫌よく友達と一緒に遊ぶ姿も多く見られる。 ・ イメージを（みたて・つもり）する事ができるようになる。
内 容	○ ぶくぶくうがいのやり方を知り、しようとする。 ○ 食器の扱いが上手になり、こぼすことが少なくなる。 ○ 簡単な衣服は、一人で着脱しようとする。 ○ 排泄を失敗した時の不快感を知らせ、取り替えようとする。 ○ 積み木やブロックなど、手指を使う遊具で遊ぶ。 ○ 気の合った友達と、ままごとやブロックなどで一緒に遊ぶ。 ○ 好きな物語を何度も繰り返し喜んで聞く。 ○ 保育者とみたて・つもり遊びを楽しむ。 ○ 保育者や友達と一緒に歌ったり、踊ったりすることを楽しむ。 ○ いろいろな遊具を使って、ぶら下がる・登る・押す・引くなどの全身を使った遊びを楽しむ。 ○ 追いかっこ遊びやリズムミカルな歌や言葉のやりとりを楽しむ。 ○ 保育者と一緒に自然物やいろいろな素材を使って、作ったもので遊ぶ。
行 事	・ 身体測定 ・ 避難訓練 ・ 誕生会 ・ 歯科健診 ・ お楽しみ会

養護のねらい	・寒さに向かい、衣服の調節に配慮し、健康に過ごすことができるようにする。 ・自己主張を大切に受け止め、情緒の安定を図る。	教育のねらい	☆保育者や友達と一緒に、みたて・つもり遊びをする中で、言葉のやりとりを楽しむ。 ☆保育者や友達と一緒に体を使った遊びを楽しむ。 ☆身近な自然物に興味をもつ。
環境構成及び援助と配慮	・簡単な身の回りの始末ができるよう、環境の見直しをする。 ・寒さに向かう時期なので、衣服の調節を行い、できるだけ薄着の習慣をつけていく。 ・子どもの気持ちを汲み取り、思いを言葉で返したり、思いに寄り添ったりしながら情緒の安定を図る。 ☆みたて・つもり遊び等をする中で、友達と一緒に遊ぶ楽しさを経験させていく。 ☆子どもが見つけた遊びを認めながら、遊びが広がっていくように適切な援助をしていく。 ☆子ども同士の言葉のやりとりを大切に受け止めながら、うまく表現ができないところは、適切な言葉を足したり、代弁したりする。 ☆子どもが「これなに」と何度も質問したり、聞いたりしてきた時は、丁寧に応えるようにする。 ☆保育者が一緒に体を動かしたり、必要な援助をしたりしながら、体を動かす楽しさが感じられるようにする。 ☆積み木やブロックなど指先を使った遊びは、少人数で落ちついて遊べるようにコーナーを設けていく。 ☆秋の自然に触れる機会をもち、いろいろな素材で遊ぶことができるようにする。		
家庭との連携	・冬を健康に過ごすために、できるだけ薄着で過ごすことが大切であることを伝えていく。 ・簡単な身の回りのことが自分でできる様子を伝え、子どもの成長を共に喜ぶ。		
評価			

第 5 期	2 歳児（第 5 期） 1 月～ 3 月
子 ど も の 姿	・ 自分の意志や要求を、言葉で伝えられるようになる。 ・ 友達との関わりが活発になり、保育者の仲立ちのもと気の合う友達とみたて・つもり遊びを楽しむようになる。その一方、遊びの中で物の取り扱いなどからトラブルになることもある。 ・ 簡単な歌を歌ったりリズムに合わせて体を動かしたり、動物などになりきったりして遊ぶことを楽しむ。
内 容	○ 簡単な衣服の着脱ができるようになり、保育者と一緒に裏返しや前後を直そうとする。 ○ 排泄は失敗することもあるが、自分からトイレに行こうとする。 ○ ぶくぶくうがいやがらがらうがいを、意識して行おうとする。 ○ 自分でスプーンを使って食べられるようになり、エプロンを使わなくなる。 ○ 生活に必要な言葉がだいたい分かり、したい事、して欲しい事などを相手に言葉で伝える。 ○ みたて・つもり遊びをする。 ・ 保育者や友達と、気に入った絵本や紙芝居のストーリーを再現して遊ぶことを喜ぶ。 （3匹のこぶた・3匹のやぎのがらがらどん・大きなかぶなど） ・ 保育者と一緒にわらべうた遊びや追いかけっこなど、体を動かして遊ぶ。 ○ 雪・氷・霜柱など、自然現象を見たり、触れたりして遊ぶ。 ○ 行事に参加しながら、幼児との触れ合いをもつ。
行 事	・ お別れ会 ・ 誕生会 ・ 避難訓練 ・ 保育参加 ・ 懇談会 ・ 内科健診 ・ 身体測定

養護のねらい	・ 一人一人の心情をしっかり受け止め、進級への期待がもてるようにしていく。 ・ 感染症の早期発見や予防に努め、健康に過ごせるようにする。	教育のねらい	☆簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 ☆保育者や友達と一緒にみたて・つもり遊びを楽しむ。
環境構成及び援助と配慮	・ 生活面では一人一人の姿を再確認し、一人でしようとする姿を見守り、必要に応じて援助する。 ・ 落ち着いて食事ができるように、席次の配慮をし、マナーを知らせていく。 ・ 感染症などに十分注意をし、一人一人の健康状態を把握し変化がある時には、適切な対応をする。 ・ 室温や湿度などを調整し、快適に過ごせるようにする。 ☆ 一人で尿意を感じてトイレに行くことができたり、身の回りのことができたりした時には、十分に認め、自信を持たせると共に、次への意欲へとつなげる。 ☆ みたて・つもり遊びが十分にできるように、素材や環境を整える。 ☆ 寒さの中でも戸外で元気に遊べるように、追いかっこや、わらべうた遊びなどの体を動かす遊びを取り入れ、保育者や友達と触れ合って遊べるようにする。 ☆ 冬の自然に触れる機会をもち、子どもの発見、驚き、喜びに共感する。		
家庭との連携	・ 一年間の子どもの成長した姿を伝え合い、成長の喜びを共有する。 ・ 幼児組の生活を知らせ、安心して進級できるようにする。 ・ 自己主張を認めて、気持ちを切り替えられるように、家庭と話し合う。 ・ 感染症や疾病などの早期発見、適切な対応を心がけ、子どもの体調の変化を伝え合うようにする。		
評価			

第 6 期	3 歳児（第 1 期） 4 月～ 5 月
子 ど も の 姿	・新入児は、保護者と離れることへの不安を感じ、したいことやしてほしいこと、思ったことなどを言葉で十分に表現できず、泣いたり怒ったりして訴えようとする姿が見られる。 ・進級児は進級した喜びで気持ちが弾んでいる反面、環境が変わり、更に新しい友達が増えたことによって落ち着かない様子が見られる。 ・所・園での生活（用便・手洗い・所持品の始末など）や環境の変化に戸惑いが見られる。 ・友達と一緒にいながら、一人遊びをしたり、並行遊びをしたり、時には友達と触れ合いながら遊んだりする。
内 容	○ クラスの担任や友達がわかり、親しみをもつ。 ・保育者との触れ合いを通して、所・園生活に少しずつ慣れる。 ・保育者の側にいたり一緒に遊んでもらったりすることで安定する。 ・保育者や友達と一緒に遊ぶ。 ○ 保育者の手助けにより、食事・排泄・手洗いなど基本的な生活の仕方を知る。 ・身の回りのことを保育者と一緒に行おうとする。 ・自分の印(マーク)を知り、自分の所持品の置き場所が分かる。 ・友達や保育者と一緒に食事をする。 ・安心して午睡ができるようになる。 ・遊んだ後の片付けを保育者と一緒にする。 ○ 毎日の生活の中で簡単な挨拶をする。 ○ 好きな遊びを楽しむ。(ままごと・砂遊び・積木・ブロック・粘土など) ○ 保育者や少人数の友達と一緒に追いかっこやわらべ歌遊びをする。 ○ 保育者に絵本を読んでもらったり、友達と一緒に紙芝居を見たり話を聞いたりする。 ○ 音楽に親しみ、聴いたり・歌ったり・体を動かしたりする。 ○ 固定遊具や砂場・三輪車などの遊具の使い方や遊び方を知る。 ○ 飼育物や植物の様子に興味をもったり、保育者が世話をする様子を見たりする。
行 事	・始業式 ・入園式 ・内科検診 ・保護者懇談会 ・誕生会 ・身体測定 ・避難訓練

養護のねらい	・ ゆったりした雰囲気の中で一人一人の気持ちを受容し、情緒の安定した生活ができるようにする。 ・ 午睡など適切な休息をとり心身の疲れを癒して、集団生活による緊張を緩和する。	教育のねらい	☆ 保育者に不安や欲求を受け止めてもらいながら親しみをもち、新しい環境に慣れる。 ☆ 所・園の遊具や玩具に興味をもち、自分の好きな遊びを楽しむ。 ☆ 所・園生活の流れを知り、喜んで登所・園する。
環境構成及び援助と配慮	・ 施設内の保健的な環境に十分に留意し、快適に生活できるようにする。 ・ 一人一人の子どもの健康状態や発育・発達状態を把握し、いつもと違う場合は速やかに適切な対応をする。 ・ 安定した生活ができるように、家庭との連携を図っていく。 ・ 食事は摂取量に個人差が生じ偏食が出やすいので、一人一人の心身の状態に応じて量を加減するなど、無理なく楽しく食事が摂れるようにする。 ・ 子どもの気持ちを温かく受け入れ、優しく言葉掛けをするなど保育者と一緒にいることで、安心できるような関係をつくる。 ・ これまでの生活内容や時間の違いを考慮し、一人一人の生活リズムを保証することで、無理なく園生活に慣れていけるようにする。また、初めて集団生活を経験する子がいることや、月齢差があることを踏まえて、少人数に分かれたり、保育者間で連携を図ったりしながら個々に対応をした配慮をしていく。 ・ 自分の場所が分かるように靴箱やロッカーなどに印(マーク)を付け、安心して持ち物の整理ができるようにする。 ☆ 一人一人の好きな遊具や発達にあった遊具を十分用意し、保育者と触れ合える時間や場を保障する。 ☆ 好きな遊びを見つけられるように一緒に遊んだり、遊びに目を向けられるように誘ったりする。 ☆ 生活の仕方や必要なきまりを丁寧に伝えていく。 ☆ 新入児だけでなく、進級児の不安も受け止め、これまで好んで遊んできた活動が続くような生活や遊びの環境を整える。		
家庭との連携	・ 環境の変化により心身の疲れが出やすい時期なので、一日の様子をできるだけ丁寧に知らせ、家庭でゆったり過ごすことができるように伝える。 ・ 保護者の不安な気持ちを受け止め、安心感がもてるようにする。 ・ 懇談会や送迎時に、子どもの様子を伝えるときに家庭での様子を聞き、保護者の気持ちを受け止めながら信頼関係を築いていく。		
評価			

第 7 期	3 歳児（第 2 期） 6 月～ 8 月
子 ど も の 姿	・ 保育者に親しみをもつことで、情緒が安定し表情が和らぐ。 ・ 保育者に甘えたり、困ったことを伝えようとしたりする。 ・ 同じ場で遊んだり一緒に生活したりする中で、次第に周囲の友達に目を向けるようになる。 ・ 所・園での生活の仕方が分かり始め、毎日繰り返されること（排便・食事の準備・片付け・身仕度など）については、個人差はあるが自分でしようとする気持ちが見られる。 ・ 遊具や遊び場の取り合いや自分の思いが伝えられないなど、友達とぶつかり合うことが多くなる。 ・ 生活の中の様々な出来事などを模倣したり見立てたりし、ごっこ遊びに再現するようになる。 ・ 自分のしたい遊びを見つけて楽しむ。
内 容	○ 着脱や衣服・排泄の後始末を自分でしようとする。 ・ 排泄後の後始末などを援助してもらいながら、自分でする。 ○ 食べ慣れないものでも少しずつ食べてみる。スプーンやフォークを使って食べる。 ○ 保育者や友達にしたいことやしてほしいことを言葉で表現したり、わからないことを尋ねたりするなど、生活に必要な言葉を使う。 ○ 水・砂・泥などの自然に触れ、夏ならではの遊びを十分に楽しむ。 ○ 保育者や友達と戸外で体を動かすことを楽しむ。 ・ 簡単なルールのある遊びを保育者や数人の友達と一緒にする。（追いかっこ、わらべ歌遊び） ・ いろいろな音や動きに関心をもち、歌ったり体を動かしたり踊ったりする。 ○ 遊具や用具に興味を示し、自分の好きなものを見つけて遊ぶ。 ・ 様々な素材や用具を使って、好きなようにかいたりつくったりして遊ぶ。 ○ 自分と同じ遊びをしている友達に関心をもったり一緒に遊んだりする。 ○ 物を何かに見立てたり、何かになりきったりしてごっこ遊びをする。
行 事	・ 七夕 ・ 誕生会 ・ 避難訓練 ・ 身体測定 ・ 保育参観 ・ 歯科検診 ・ 個人面談

養護のねらい	・ 一人一人の子どもの気持ちを十分に受け止めながら保育者との信頼関係を深め、安心して生活できるようにする。 ・ 梅雨期や夏季の環境、保健に留意して健康で快適な生活ができるようにする。	教育のねらい	・ 所・園での生活の仕方が分かり、簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 ・ 保育者や友達のしていることに興味をもち、同じことをしようとする。 ☆ 水や砂や泥などの感触を楽しむ。
環境構成及び援助と配慮	・ 食事・睡眠・休息・衣服の調節などの欲求が適切に満たされ、快適に生活できるようにする。 ・ 夏季の保健に留意し、一人一人の健康状態を把握して心身の疲労を緩和するよう配慮する。 ・ 気温の変化や一人一人の体調に応じて、衣服の調節を促す。 ・ 一人一人の生活リズムを大切にし、自分で身の回りのことをしようとする気持ちを受け止めていく。 ☆ 着替えや手洗いなどは絵を提示したり個別に補助をしたりしながら、やり方や手順が分かるようにし、自分でしようとする気持ちになるようにしていく。 ☆ 気温に合わせて水遊びができるように、場や遊具などを整えて使えるようにしておく。 ☆ 戸外の遊具や砂場を安全に整備し、遊び方について知らせ、保育者の見守りの中で取り組むことができるようにする。 ☆ 友達とのトラブルが見られるようになるので、思いをしっかりと出し合えるように一人一人の思いを大切に受け止めたり代弁したりする。 ☆ 生活の仕方は個人差に応じて援助し、できた時は共に喜んだり、励ましたりしていく。 ☆ ごっこ遊びが楽しくなるようにコーナーをつくり、用具を整えておく。 ☆ 長期休業になると、それぞれの生活環境が異なることから、共通する留意事項について保育者間で共通理解を図る。また、一人一人の生活環境に応じて丁寧に関わるとともに、保護者にも長期休業中の過ごし方について留意点を説明し保育者との共通理解を図る。		
家庭との連携	・ 所・園の生活の中で、身の回りのことを自分でしている姿を伝え、家庭でも自分でしようとする姿を認めていくように伝える。 ・ 水遊びの際は、健康状態を細かく連絡し合う。		
評価			

養護のねらい	・季節の変化に配慮し、一人一人の健康状態を把握しながら心身の疲労を緩和する。 ・保育者との信頼関係の中で、自分の気持ちを言葉や態度で表せるようにする。	教育のねらい	☆ 保育者や友達と一緒にいることを喜び、話したり・聞いたりして会話を楽しむ。 ☆ 戸外で体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。 ☆ 秋の自然に興味や関心をもつ。 ☆ 短時間園児は園生活のリズムを取り戻し、安心して過ごす。
環境構成及び援助と配慮	・ 長期休み明けで、気持ちが不安定になる子どももいる。一人一人の様子をよく見ながら生活のリズムが取り戻せるようにし、健康状態を十分把握する。 ・ 気候に応じて衣服の調整をしたり、午睡などの休息を十分にとったりする。 ・ 子どもの気持ちを十分に受け止め、自分なりの言葉で思いを表現できるようにする。 ・ 全身を使って遊ぶ楽しさが味わえるように、場所や遊具を用意するとともに、安全面に十分に配慮をしていく。 ☆ 久しぶりに登園する子どもが、集団生活のリズムを取り戻し、安心して過ごせるように、保育者が丁寧に関わっていく。 ☆ 簡単なルールのある遊びは、保育者が一緒に行いながら楽しさを味わえるようにする。 ☆ 物や場の取り合いなどのトラブルが多くなってくるので、互いの思いや気持ちを十分に受け止める。 ・ 友達と同じ場所で遊んだり、遊具を一緒に使ったりできるように仲立ちしていく。 ☆ 運動会などの行事に無理なく喜んで参加できるよう、興味・関心がもてるような活動や言葉掛けを工夫していく。 ☆ 5歳児や4歳児の活動の真似が繰り返しできるように、環境を整え、異年齢児との積極的な交流ができる機会をつくっていく。 ☆ 所庭・園庭や近隣の公園などいろいろな場所で、自然に触れることを楽しめるようにする。		
家庭との連携	・ 日頃の行事に向けた取り組みの様子を伝え、協力や理解を得ることができるようにする。 ・ 活動量が増える時期であるので、早く寝ることや十分に休息をとるよう伝えていく。		
評価			

第 9 期	3 歳児（第 4 期） 1 1 月～ 1 2 月
子 ど も の 姿	・自分の好きな遊びを継続したり、自分から友達の遊びに入ろうとしたりする。 ・遊びの中で友達と交わす言葉も多くなり、一緒に遊ぶ楽しさが分かる。 ・5 歳児や 4 歳児の遊んでいる姿に興味・関心をもち、同じことをしたがったり一緒に行動したがったりする。 ・体を動かすことを喜び、目標に向かって決まった距離を走ったり、高さのあるところから跳んだりなどの遊びを好んで行う。 ・自然物を見つけて拾い集めたり、ごっこ遊びや制作遊びに取り入れて遊んだりすることを楽しむ。
内 容	○ 冬を健康に過ごすために必要な習慣を知る。 ○ 食欲が増し、偏食が少なくなる。 ○ 自分の気持ちや困っていること、してほしいことなどを自分なりの言葉や動きで保育者に伝えようとする。 ○ 見たり聞いたりしたことや自分の経験したことを簡単なごっこ遊びにして楽しむ。 ○ 所・園の行事に喜んで参加する。 ・お楽しみ会、もちつきなど ○ ボール・巧技台・固定遊具・タイヤ・フープなどを利用した遊びを楽しむ。 ○ 歌ったり、踊ったり、楽器を鳴らしたりすることを喜ぶ。 ○ 秋や冬の自然に触れる。 ・木の葉や木の実などの自然物の色や形などに興味をもち、分けたり集めたりする。 ・自然物を使っていろいろなものをつくることを楽しむ。 ○ 色・形に興味を示し、違いに気付いたりする。
行 事	・お楽しみ会 ・誕生会 ・避難訓練 ・身体測定 ・もちつき ・個人面談

養護のねらい	・季節の変化に留意し、衣服の調節を促すなど、健康に過ごすことができるようにする。 ・保育者が一人一人の子どもの心情を受け止め、自分でしようとする気持ちをもたせていく。 ・思い切り体を動かして遊ぶことができるよう、安全面に留意する。	教育のねらい	☆ 経験したことや思ったこと、感じたことなどを自分なりの言葉や動きで表そうとする。 ☆ 友達と同じ遊びをすることを楽しむ。 ☆ 自然に触れたり、季節の変化に気付いたりしながら、友達と戸外遊びを十分楽しむ。 ☆ いろいろな表現を友達や保育者と一緒に楽しむ。
環境構成及び援助と配慮	・子どもの健康状態を把握し、季節の変化に応じて生活環境を整える。 ・様々な遊具で活発に運動遊びを行える環境を設定する。保育者と一緒に取り組み、安全には十分留意していく。 ☆ 遊びに必要な物をつくったり、かいたりしやすいような素材を出しておき、必要に応じて使い方を知らせていく。 ☆ 活動的な遊びや運動がしたくなるような遊具や用具を用意しておく。 ☆ 子どもが保育者に伝えたり言おうとしたりすることを受け止め、話す喜びが感じられるようにする。 ☆ 一人一人の表現の仕方を大切に受け止め、表現する喜びが味わえるようにする。 ☆ 5歳児や4歳児の活動の真似が繰り返しできるよう、必要な用具を準備したり環境を整えたりしていく。 ☆ 戸外に出て体を動かすことが、十分にできるような時間を保障していく。 ☆ 季節の変化に気付いたり、自然に触れたりする機会を多くもてるように、戸外遊びや散歩を十分楽しんでいく。また、その中で子どもたちの発見や感動を大切にし、共感していく。		
家庭との連携	・様々な行事や遊びを通して子どもたちが大きく成長していることを伝え、共に喜び合えるようにする。 ・朝夕の気温の変化が大きいことや運動量の多い時期であるため、体調の把握や睡眠時間について留意するよう伝える。 ・気温や活動量に合わせて、調節しやすい衣服を用意してもらう。		
評価			

第 10 期	3 歳児（第 5 期） 1 月～ 3 月
子 ど も の 姿	・ 所・園生活の仕方が分かり、所持品の始末や着脱など自分でできることは自分でしようとする。 ・ 友達と過ごすことを楽しみ、自分なりのイメージをもって遊ぼうとする。 ・ 異年齢児の遊びに興味をもって、真似たり友達と関わって遊んだりするようになる。 ・ 遊びや生活の中での会話が多くなり、自分の気持ちを言葉で表現しようとする。 ・ トラブルが多くなるが、保育者の仲立ちで相手の気持ちに気付けるようになる。
内 容	○ 身の回りの始末がだいたい自分でできるようになり、安定した所・園生活を送る。 ○ 食事のマナーが身に付いていく。 ・ スプーンを正しく持つことができるようになる。 ○ 保育者の手伝いや自分のしたいことを喜んで行う。 ○ 自分のしたいことや思ったこと、感じたことなどを、言葉で伝えようとする。 ○ 異年齢児の遊びに興味をもち、真似をしたり一緒に遊んだりすることを楽しむ。 ○ 友達と保育者と一緒に表現する。 ○ 自分のイメージをもちながら、友達と同じ遊びをすることを楽しむ。 ○ 簡単なルールのある遊びを保育者や友達と楽しむ。 ・ 鬼ごっこやかるととりなど簡単なルールのある遊びをする。 ○ 冬から春の自然に興味をもち、その感触を体全体で感じる。 ・ 雪や霜・陽だまりや木々の芽吹きなど自然に触れて楽しむ。 ○ 遊びに必要な物をつくったり、それを使ったりして楽しむ。 ・ こまやたこを作るなどして正月遊びを楽しむ。 ○ 活動的な遊びを十分にし、寒さに負けないで元気よく過ごす。 ○ 好きな絵本や紙芝居など大筋が分かり楽しんで聞く。 ・ 保育者や友達と一緒に、簡単な劇を楽しむ。 ○ 大きくなった喜びや、進級する嬉しさを感じる。
行 事	・ 始業式 ・ 生活発表会 ・ 節分 ・ ひなまつり ・ お別れ会 ・ 身体測定 ・ 誕生会 ・ 避難訓練 ・ 修了式

養護のねらい	・寒さに負けず、体を動かす遊びを楽しめるようにする。 ・室内の換気・室温・湿度の調節をし、快適に過ごすことができるようにする。 ・進級に向け、一人一人の子どもの喜びや不安を受け止め、共感することで期待がもてるようにする。	教育のねらい	☆生活や遊びの中で、自分の思いを言葉で表現しようとする。 ☆基本的習慣が身に付き、進んで行おうとする。 ☆寒さに負けず、思いきり体を動かして遊ぶ。 ☆大きくなったことを喜び、進級に期待をもつ。
環境構成及び援助と配慮	・ 長期休み明けで、気持ちが不安定になる子どももいる。一人一人の様子をよく見ながら生活のリズムが取り戻せるようにし、健康状態を十分把握する。 ・ 室内と戸外の温度差が大きすぎないように、温度の調節や換気をする。 ・ 保育者との信頼関係の中で自分の気持ちや考えを安心して表し、安定した生活が送れるようにする。 ・ 自分から進んで身の回りの始末をしようとする姿を認めたり励ましたりしてできた喜びに共感する。 ☆ 思いきり跳ぶ・走るなど運動量の多い遊びができるような環境を工夫する。 ☆ 保育者は率先して戸外へ出て、体を動かして遊ぶ楽しさを伝えていく。 ☆ 5歳児や4歳児と遊ぶ機会をつくったり、4歳児の保育室に行ったりして、進級に期待がもてるようにする。 ☆ 一人一人の子どもと十分に会話を交わし、成長を認め自信がもてるようにする。 ☆ 保育者は子どもの思いをじっくり聞いたり受け止めたりし、安心して話せる雰囲気を作り、友達に自分の思いを伝えていけるようにする。 ☆ 友達と一緒に表現する楽しさを味わったり、自分なりの表現を楽しんだりできるように環境を整える。		
家庭との連携	・ 一年間の子どもの成長の姿を保護者に伝え、一緒に成長を確認し、喜び合えるようにする。 ・ 感染症など体調を崩しやすい時期なので、一人一人の体調について連携を密にしていく。		
評価			

第 1 1 期	4 歳児（第 1 期） 4 月～5 月
子 ど も の 姿	＜新入児＞ ・ 新しい所・園生活に期待をもっている子どもは多いが、その一方で親と離れることへの不安や緊張を感じている。そのため、何をしてもよいかわからずじっとしている子どもや遊びを見ている子ども、思いのまま行動する子どもがいる。中には、入所・入園前の友達（年齢を同じくする兄弟関係・近所）とのつながりや開放広場などの経験から顔見知りの子どもといることで、安心している様子も見られる。 ・ 自分のしたい遊びを見つけることができるようになるが、まだ保育者と一緒に遊ぶことで安定する姿も見られる。 ・ ロッカー・靴箱の場所や所持品の始末の仕方などは、毎日繰り返し行うことで身に付き自分の力で取り組もうとする姿が見られる。しかし、所持品の始末に対する意識や取り組みについては個人差がある。 ＜継続児＞ ・ 継続児は、進級した喜びや期待をもって生活し、新入児に自分の知っていることを積極的に伝え、関わる子どももいる。反面、環境の変化に不安を示したり、甘えたりする姿も見られる。
内 容	○ 保育者や友達に親しみ、喜んで登所・登園する。 ・ 保育者の名前や顔を覚える。 ・ 保育者の真似をして遊びを楽しむ。 ・ いろいろな友達がいることを知る。 ・ 自分のクラス名が分かり、呼ばれると行動することができる。 ○ 新入児は、保育者や継続児・5歳児と関わりながら、所・園生活の仕方を知る。 ・ 保育室や自分のロッカーの場所、所持品の始末の仕方、遊具の扱い方や片付け方 ・ 施設の名称や遊具、用具の安全な使い方 ・ 給食の準備や片付けの手順、トイレの使い方 ○ 自分の好きな遊びの場や遊具を見つけて、安心して遊ぶ。 ・ いろいろな遊具があることを知り、興味をもって遊ぶ。 ・ 保育者や友達に親しみをもち、好きな遊びをする。 ・ 簡単な挨拶をしたり、してほしいことやしたいことを保育者や友達に伝えたりする。 ・ 5歳児の遊びを見たり一緒に遊んだりして、いろいろな遊びに興味を示す。 ○ みんなと一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・ 絵本や紙芝居を見たり聞いたりする。 ・ リズム遊びや手遊びをしたり歌ったりする。 ○ 砂や土の感触を楽しんで遊ぶ。 ○ 春の自然や身近な小動物に親しむ。 ・ 散歩をしたり草花・虫探しをしたりして、身近な自然に触れて遊ぶ。 ・ 小動物を見たり、餌を与えたり触れたりする。
行 事	・ 進級式 ・ 始業式 ・ 入園式 ・ 内科健診 ・ 眼科検診 ・ 歯科検診 ・ 体位測定 ・ 誕生会 ・ 避難訓練 ・ 保護者懇談会、保育参観 ・ 交通安全指導

養護のねらい	・一人一人の様々な欲求を受け止め、情緒の安定した生活ができるようにする。 ・健康状態を把握し、異変に早く気付けるよう目を配り、優しく問いかけをするなど、適切に対応する。	教育のねらい	☆新しい環境に慣れ、保育者や友達に親しみをもち、安心して過ごす。 ☆施設・用具・遊具の扱い方や身の回りの始末の仕方を知り、自分でやってみようとする。 ☆自分でやりたい遊びを見つけ、保育者や友達と遊ぶことを楽しむ。 ☆春の自然や身近な小動物に親しむ。
環境構成及び援助と配慮	・不安定な子どもには、保育者が一緒に好きな遊びを探し、一人一人の状況に合わせた対応をしていくようにする。 ・生活経験の違いが個人差として表れるため、子どもの行動や状態を受け入れ認めたり言葉を掛けたりなど、個々に合った援助を行い安心して生活ができるようにしていく。 ・新入児だけでなく継続児の不安な気持ちも受けとめ、十分に関わっていく。 ・新入児一人一人の気持ちを受け止め、保育者との信頼関係の中で安定した生活や遊びができるようにする。 ☆遊びの中で、用具や遊具の扱い方やきまり、ルールなどを知らせていく。 ☆所・園での生活の仕方やトイレ・水道の使い方、給食の準備や片付けの方法・手順など、全体の場合や個々に応じてその都度知らせる。また、ロッカーや靴箱などに同一の印をつけ、自分の場所を分かりやすくする。 ☆一人一人が遊びたいと思える場を、幼児の実態に合わせてつくっていく。 ☆落ち着いて遊べるようにするため、遊びごとに独立した場を確保していく。 ☆遊びに入れない新入児には、保育者が５歳児や継続児に声を掛け一緒に遊びながら遊びのきっかけをつくっていく。 ☆友達との遊びの中で、「ごめんなさい」「ありがとう」「貸して」「やめて」など場を捉えながら必要な言葉を知らせていく。 ☆みんなで集まる時には、興味をもって話が聞けるように表情や声の調子を変えたり、指人形や絵表示などを使ったりする。 ☆簡単なリズム遊びや手遊び、追いかっこなどの集団遊びを取り入れ、クラス全体で遊ぶ楽しさを味わえるようにしていく。 ☆身近な小動物を見たり触れたりできるように、場の構成を工夫し、餌になる草や野菜を探して与えるなどして、触れ合えるようにする。 ☆庭に咲いている草花に気付けるように声を掛け、遊びの中に取り入れながら春の自然に興味や関心がもてるようにしていく。		
家庭との連携	・生活が大きく変わり心身共に疲れが出やすい時期なので、家庭ではできるだけゆったり過ごすように伝える。 ・保護者の不安な気持ちを受け止め、安心感がもてるようにする。 ・懇談会で一年間の方針を伝え共通理解を図ったり、進級や入所・入園してからの様子や姿をクラス便りや連絡帳などで伝えたりしていく。		
評価			

第 1 2 期	4 歳児（第 2 期） 6 月～ 8 月
子 ど も の 姿	・ 所・園での生活の仕方が分かってきて、同じ場にいる友達や同じ遊びをしている友達を見たり模倣したり話し掛けたりするなど、気の合う友達ができ始めている。一方一人で遊ぶことに満足している子どももいる。 ・ 所・園生活に慣れ自分の思いを出せるようになってきたことで、物の取り合いが起こったり、一緒に遊んでいる中で自分の気持ちがうまく伝えられずに保育者に訴えたりする姿が見られるようになる。 ・ 保育者の話を聞いて友達と一緒に行動できるようになる。また、クラスの友達と一緒に遊んだり集まって歌を歌ったりすることも楽しいと感じ始める。 ・ うまくいったことやできるようになったこと、頑張ったことなどを保育者に見て欲しいとアピールする。
内 容	○ 所・園生活の仕方や流れが分かってきて、自分でできることは自分でしようとする。 ・ 衣服の着脱・食事・排泄など身の回りのことを自分で行う。 ・ 当番活動の仕方を知り、喜んで行おうとする。 ○ いろいろな遊びに興味をもち、保育者や友達と一緒に遊ぶことを楽しむ。 (ルールのある鬼遊びや楽器遊び、リズム遊びなど) ○ 同じ場にいたり同じ物を持ったりしながら、友達と触れ合って遊ぶことを楽しむ。 ・ したことや見たこと、聞いたこと、感じたことなどを自分なりに言葉や動きで表現しながら、同じ場にいる友達と一緒に遊ぶ。 ○ いろいろな素材に触れて、自分の思ったことや感じたことを表現する。 (空箱制作・粘土遊び・絵の具遊び・水遊びなど) ○ 水に慣れ、喜んで水遊びをしたり心地よさを味わったりする。 ・ 個々に合った水遊びをし、安心して取り組む。 ・ 砂や水を使った遊びに親しみ、砂や泥・水の感触の心地良さを味わう。 ○ 梅雨期の生活の仕方を知る。 ・ 廊下やテラスが滑りやすいことを知り、気を付けて行動する。 ・ 傘や長靴の始末を自分でしようとする。 ○ 草花や野菜の種まきや苗植えなどをして、大切に世話をする。 ○ 夏季の生活の仕方を知る。 ・ 汗の始末の仕方、休息や水分の摂り方、水遊びの準備や後始末の仕方などを知り、自分で行おうとする。
行 事	・ プール開き ・ 夏祭り ・ 七夕 ・ 誕生会 ・ 体位測定 ・ 避難訓練 ・ 保護者参観 ・ 個人面談 ・ 終業式

養護のねらい	・ 梅雨期、夏季の健康安全に留意し、清潔な環境をつくり快適に生活できるようにする。 ・ 一人一人の子どもの気持ちや考え方を受け止めながら、保育者との信頼感を深め安心して生活できるようにする。	教育のねらい	☆ 好きな遊びを見つけて取り組み、友達に関心をもちながら一緒に遊ぶことを楽しむ。 ☆ 夏の遊びに関心をもち、気の合う友達と遊ぶ楽しさを味わう。 ☆ 梅雨や夏の自然に興味をもつ。
環境構成及び援助と配慮	・ 夏季の生活習慣に留意し健康で安全な生活ができるよう、衣服の着脱・手洗い・うがいなどを自分で行おうとする姿を十分認めたり、必要に応じて個別にやり方を知らせたりしていく。また、通風や冷房の調節にも注意していく。 ・ 戸外遊びでは遊ぶ時間帯や場所などに配慮して、紫外線及び熱中症対策をする。 ・ 子どもの状態に応じて休息や水分補給を行っていく。 ・ 遊びの場や行動範囲が広がってくるので、遊具や用具の使い方や遊び方などについて繰り返し伝え、守れるようにする。 ☆ 子どもが自分から遊びや活動に取り組めるよう環境を構成し、一人一人に応じた援助をする。一人一人の興味や動きに共感したり認めたりしていくと共に、友達と同じ遊びができるよう材料・遊具などは豊富に用意しておく。 ☆ 遊びに興味や関心がもてるように、子どもの姿や遊びの内容に応じて、保育者が事前に環境を設定したり子どもと一緒に準備したりしていく。 ☆ 自然物に十分に触れることができるように、庭の栽培物を整備する。また、小動物の飼育ができる環境を整え、虫捕りをしたり喜んで世話をしたりする中で、生き物の様子に関心をもつことができるようにする。 ☆ 水や砂・泥の感触を十分に味わえるような場を設定して時間の保障をする。 ☆ 子どものつぶやきや動きを保育者が真似して周囲に広めたり橋渡しをしたりして、つながりがもてるようにしていく。 ☆ 子どもの思いを受け止め、友達に思いが伝わるように代弁したり伝える場をつくったりして、伝わる喜びが味わえるようにしていく。また、子どもたちが発した言葉を繰り返したり回りの子どもに気付かせたりして、互いの思いが伝わるようにしていく。 ☆ 遊びの中でのトラブルは保育者が仲立ちとなり、友達への思いの伝え方や遊びへの参加の仕方が分かるようにする。 ☆ いろいろな遊びを楽しむ中で、気付いたことや試していることなどを大切に受け止め、驚きや発見の喜びが味わえるようにする。 ☆ 身近で扱いやすい遊具や材料を用意し、自由に使ったり組み合わせたりして、遊びの幅が広がるようにしていく。		
家庭との連携	・ 水遊びやプール遊びなどを実施するにあたり、家庭で必ず健康チェック表に健康状態を記入してもらい、登所・登園後の視診と併せて健康状態を細かく把握する。 ・ 家庭においても紫外線及び熱中症の予防をすることの大切さを知らせ、紫外線及び熱中症対策に心掛けるよう伝えていく。(戸外では帽子をかぶる。水分をこまめにとるなど)		
評価			

第 13 期	4 歳児（第 3 期） 9 月～ 10 月
子どもの姿	・ 長期休み明けで不安を示す子どももいるが、張り切って登所・登園して、保育者や友達との再会を喜ぶ姿も見られる。 ・ 長期休み明けの友達を迎えて、一緒に遊んだり遊びを教え合ったりする。 ・ 同じ場で友達と一緒に遊びながら、仲間意識をもち始める。 ・ 友達に対する関心が強くなり、友達が泣いたり困ったりしていると自分でできることをしてあげたり、保育者に知らせにきたりするなど、やさしく接する姿が見られる。その反面、間違いを強く言ったり良い悪いに関係なく周囲の幼児の言動に影響を受けてしまったりしやすい。 ・ 年長児の遊びを見て模倣したり、自分の遊びに取り入れたりして遊ぶようになる。
内容	○ 自分の思いやイメージを出して、友達と関わって遊ぶ楽しさを味わう。 ・ 友達に自分の思ったことや感じたことを伝えようとする。 ・ 友達との遊びの中で、自分の考えを出したり思いを話したりして、自分なりのイメージを表現しようとする。 ○ 体を十分動かしながら集団で遊ぶ楽しさを味わう。 ・ 大勢で取り組む運動的な遊びの面白さや競い合う楽しさを感じる。 ・ 曲に合わせて友達と一緒に歌ったり、踊ったりする楽しさを感じる。 ・ 簡単なルールが分かり、そのルールを守って遊ぶ。 ・ 走ったり、跳んだり、くぐったりなど体を動かして遊ぶことを楽しむ。 ○ 秋の自然に親しむ。 ・ 自然物の収穫を喜び、見たり触れたりしながら興味関心をもったり、自然物を使って遊び、形のおもしろさや色の美しさなどに気付いたりする。 ・ 開花に期待をもって球根（チューリップなど）植えをし、世話をする。 ○ 所・園の生活の仕方を思い出し、自分でできることは自分でしようとする。 ・ 所持品の始末・手洗い・うがいなど自分から行おうとする。 ・ 気温や活動量に応じて衣服の調節をしようとする。 ○ いろいろな材料や素材を使って、感じたことや考えたことをかいたり、つくったりしながら表現することを楽しむ。 ○ いろいろな行事に関心を持ち、参加する。
行事	・ 始業式 ・ 運動会 ・ 遠足 ・ 誕生会 ・ 避難訓練 ・ 体位測定 ・ 芋掘り

養護のねらい	・朝、夕の気温の変化に応じて衣服の調節を促したり、窓の開閉をしたりして快適に過ごすことができるようにする。 ・保育者との信頼関係の中で、安心して自分を発揮できるようにする。	教育のねらい	☆自分なりの思いを出しながら気の合う友達との関わりを楽しむ。 ☆体を動かして遊ぶことや、みんなと一緒に活動に取り組むことの楽しさを味わう。 ☆秋の自然に関心をもち、見たり触れたりして遊ぶ。
環境構成及び援助と配慮	・ 長期休み明けで、気持ちが不安定になる子どももいる。一人一人の様子をよく見ながら生活のリズムが取り戻せるようにし、健康状態を十分把握する。 ・ 休息や食事をしっかりとるようにし、暑い時は水分補給をしていく。 ☆ 遊びの内容によって、個人差が表れる。一人一人のめあてを子どもとともに見出し、やる気をもつことができるように認めたり励ましたりしていく。 ☆ 気の合う友達が見つからない子どもや友達との関わりが少ない子どもには、関わりがもてるようなきっかけをつくったり相手に思いが伝わるように仲介したりしていく。 ☆ 自分なりに「〇〇してみよう」という気持ちをもって取り組めるように、場や材料を用意すると共に子どもなりの思いや考えを引き出すような援助を行う。 ☆ 体を動かす遊びに進んで取り組めるように、子どもが出し入れしやすい運動遊具の置き方を工夫したり、遊び方を知らせたりしていく。 ☆ 運動的な遊びに取り組む中で、一人一人の頑張っている姿や楽しんでいる姿を認めたり、共感したりしながら遊びの楽しさが十分味わえるようにしていく。 ☆ 友達の良いところや頑張りを知らせ、友達を応援するなど互いが認め合える機会をつくる。 ☆ 子ども同士が刺激を受け合いながら遊びに取り組めるよう、互いの姿が見えるようなコーナーの位置や向きなどに配慮していく。 ☆ 自然物に触れたり収穫したりしながら秋の自然に親しみがもてるようにし、発見や感動・好奇心を見逃さずに共感していく。また、虫捕りや木の実拾いなどが十分行えるように環境を生かしたり、散歩に出かけたりする。 ☆ 拾った木の実や種などを使って遊べるよう材料を用意したり、遊び方を知らせたりしていく。		
家庭との連携	・ 日中の活動量が多くなるので夜は早く休み、十分な休息が必要であることを伝える。 ・ 寒暖の差が出てきて体調を崩しやすいことから、自分で調整できるような衣服を準備するように伝える。 ・ 運動量が増えて汗をかくことが多くなることから、着替えを多く準備するよう伝える。		
評価			

第 1 4 期	4 歳児（第 4 期） 1 1 ～ 1 2 月
子 ど も の 姿	・ 気の合う友達と関わりながら、自分の思ったことや、やりたいことを言葉で伝え合って遊ぶようになる。 ・ 友達や保育者に自分のやっていることを認めてもらうことで自信をもち、進んで挑戦しようとする。 ・ いろいろなことを自分なりに行おうとする意欲が高まり、持続時間が長くなる。 ・ 年長児の行っていることに興味をもち、真似をしたり遊びの中に入れてもらったりする。 ・ 気の合う友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思ったことやイメージを友達や保育者に伝えようとするが、一人一人のイメージが違ふことが多くトラブルも生じる。 ・ 自分のやりたいことがはっきりしてきて、遊びに必要な物や場を自分でつくったり、揃えたりする姿も見られる。
内 容	○ 冬の健康生活に必要な習慣を身に付ける。 ・ 手洗い、うがい、衣服の調節など冬の生活の仕方を知る。 ○ 体を思いきり動かして遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 一緒に遊んでいる友達の中で、自分の思いやイメージを表して遊ぶ。 ・ 自分の思いや考えを言葉で表現する。 ○ 遊びや生活の中のきまりや約束ごとを守って遊んだり、相手の立場に気づき考えようとしたりする。 ○ 秋や冬の自然に興味をもつ。 ・ 自然の移り変わりに関心をもち、探したり触れたりしたことを友達に伝える。 ○ 必要な物をつくったり、自分のイメージを動きや言葉で表現したりして遊ぶ楽しさを味わう。 ・ 友達と一緒に役になりきって遊ぶ。 ○ 身近な素材や用具を使って、かいたり遊びに必要な物をつくったりする。 ○ いろいろな歌をみんなで歌ったり、リズムに合わせて楽器を奏したりする。 ○ 日本の伝統行事を知り、年末の過ごし方を知る。 ・ みんなで餅をついたり、食べたりして楽しむ。 ・ 自分たちが使った物を片付けたり、生活している場を掃除したり整えたりする。
行 事	・ もちつき ・ 終業式 ・ お楽しみ会 ・ 生活発表会 ・ 誕生会 ・ 体位測定 ・ 避難訓練

養護のねらい	・冬を健康に過ごすための習慣が身に付くようにする。 ・保育者が一人一人の子どもの心情を受けとめることにより、自信をもって自分を発揮できるようにする。	教育のねらい	☆秋から冬に向けての自然に興味をもったり、健康な生活の仕方を身に付けたりする。 ☆友達との遊びの中で、自分のイメージや思いを言葉や動きで表現する楽しさを味わう。 ☆身近な素材や用具を使ってかいたり、遊びに必要な物をつくったりする。
環境構成及び援助と配慮	・季節の変化により体調を崩しやすいため、幼児の健康状態を把握し異常のある場合は速やかに対応する。また、衣服の調節についても声を掛けていく。 ・一人一人の子どもの良さを認め、それを友達にも知らせるようにしながら、のびのびと自分を表現するし、自信をもてるようにしたり行動力が育つようにしたりする。 ☆ 秋から冬への季節の変化に伴い、風邪の予防や防寒具の始末の仕方などを具体的に知らせ、自分から行えるようにする。 ☆ 火災に関する紙芝居を見せたり、ストーブの周りでの遊び方について話し合ったりする場を設けていく。 ☆ 固定遊具や移動遊具などを利用しながら、這う・くぐる・転がる・跳ぶ・登るなどのいろいろな運動や新しいことにも積極的に取り組んだり、めあてに向かって繰り返し取り組んだりできるようにしていく。 ☆ 一人一人の興味や関心に寄り添いながらもイメージを共有して、友達との遊びが十分楽しめるように援助する。 ☆ ゲームや鬼遊びなど共通のルールで友達と一緒に遊ぶ楽しさが味わえるように、保育者も一緒に遊んだり、繰り返し取り組むことができるように働きかけたりする。 ☆ 身近な自然に気付いたり変化を知ったり遊びに活用したりして、自然物に触れる経験や遊びを取り入れていく。 ☆ 様々な遊具や素材を子どもの目に触れる場所に置いたり、要求に応じて出したりして自分で扱えるようにする。 ☆ 自分なりの思いを表現できる場や機会を設けていく。(身体表現・つくる・かく・歌う・踊るなど) ☆ チューリップの地植えやヒヤシンスの水栽培を行いながら、育て方の違いや根の伸びる様子などに気付かせ、生長する姿に関心がもてるようにする。		
家庭との連携	・寒暖の差が激しく体調を崩すことが多いことから、自分で調整できる衣服を準備してもらう。 ・手洗いやうがいをしっかり行うように知らせる。 ・友達との関わりが増えることにより、トラブルも多くなる。こうした子どもの心情や育ちを家庭に伝え、家庭と連携しながら対応していく。		
評価			

第 15 期	4 歳児（第 5 期） 1 月～ 3 月
子どもの姿	・ 友達との関わりが深くなり、誘い合って遊びを進めていこうとするようになる。また、遊びの中で自分なりの思いや考えを言ったり友達の考えも受け入れたりするようになり、イメージが共通になる部分が多くなる。一方、気の合う友達がはっきりし、他の友達を受け入れられないことがある。 ・ 同じ目的をもって友達と一緒に活動する楽しさを感じ、クラスの一員として取り組むようになる。 ・ 年長組になる喜びや期待をもって生活するようになる。 ・ 遊びに必要なルールを自分たちで決めて遊ぶ姿が見られるが、時々ルールを守れずにトラブルになることもある。 ・ 友達と一緒に遊ぶ中で、ほとんどの子どもが自分の思いや考えを表現できるようになってきている。
内容	○ 冬の生活習慣を身に付ける。 ・ うがいや手洗い、鼻をかむことの大切さが分かり、自分からしようとする。 ○ もうすぐ年長になることに期待をもって生活する。 ・ 年長児の姿を見たり一緒に遊んだりする中で、憧れの気持ちをもつ。 ・ 当番活動や誕生会の司会などを年長児から引き継ぐ中で、進級の喜びを感じる。 ○ かるた・こま・すごろくなどの正月の伝承遊びに関心をもって楽しむ。 ○ 自分なりの思いを言葉で表したり、相手の思いを聞いたりしながら自分たちで遊びを進めていこうとする。 ・ 友達との関わりの中で、相手が嫌なことは言ってはいけないことやしてはいけないことが分かる。 ・ みんなと同じ活動をする中で、相手の気持ちを聞いたり受け入れたりしていく。 ・ 歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使って奏したりして、音楽に親しむ。 ・ 身体表現や劇などをして遊ぶ楽しさを味わう。 ・ グループやクラス全体で行う遊びの中で自分の力を出し、友達と一緒に活動していくことの満足感を味わう。 ○ 冬の自然現象や冬から春への移り変わりに、興味や関心をもつ。 ・ 雪や霜柱、氷などの冬の自然に触れ、感動したり疑問をもったりする。 ・ 草花や木々の芽吹きの様子から春の訪れを感じる。 ○ 簡単なルールのある遊びを友達と一緒に取り組み、積極的に体を動かして遊ぶ。
行事	・ 始業式 ・ 体位測定 ・ 生活発表会 ・ 誕生会 ・ 避難訓練 ・ 鏡開き ・ 節分 ・ ひな祭り ・ お別れ会 ・ 修了証書授与式 ・ 修了式（終業式） ・ 離任式

養護のねらい	・感染症の早期発見、予防に努め健康に過ごせるようにする。 ・一人一人の心情を受けとめ、自信をもって行動できるようにする。	教育のねらい	☆ 進級することの喜びを感じ、期待をもって生活する。 ☆ 自分なりに表現し、試したり工夫したりして遊ぶ。 ☆ 自分の思いを出したり、相手の話を聞いたりしながら一緒に遊びを進めていく。 ☆ 冬から春への自然の様子に、興味や関心をもつ。
環境構成及び援助と配慮	・冬の健康管理に配慮し、室温・換気・湿度に十分留意して、快適な生活ができるようにする。 ・インフルエンザ等の感染症が流行する時期なので、一人一人の健康状態を十分に把握し、変化のある場合は早急に対応する。 ・今まで身に付いた生活習慣の一つ一つを確認し、一年間の成長を認めていく。 ・お別れ会や修了式などを通して、年長になる喜びや年長児を送る気持ちをもてるようにしていく。 ☆ いろいろな遊びや当番活動の引継ぎなどの中で、年長組になる喜びや期待がもてるようにする。 ☆ 友達との関わりの中で、個々のアイディアを互いに認め合えるように見守ったり、励ましたり助言をしたりして、一人一人の子どもが安心して自己発揮できるようにする。 ☆ グループや学級全体で行う遊びを取り入れ、自分の力を出し満足感が味わえるようにしていく。 ☆ 思ったことや感じたことを表現して遊べるように、お面・劇の小道具・ペープサート・楽器などを自由に使えるようにしておく。 ☆ 保育者も一緒に遊ぶ中で一人一人の表現を認めたり、互いに教え合ったり認め合ったりしている姿を広めていく。 ☆ 寒くても戸外で体を動かして遊ぶことを促し、一人一人がめあてをもてるような活動や共通のルールのある遊びに積極的に働き掛け、継続して取り組もうとする気持ちをもたせていく。 ☆ 雪・霜柱・風や植物の芽吹きなど、冬から春への自然の移り変わりに興味や関心をもてるようにする。		
家庭との連携	・クラス便りや連絡ノートで行事の取り組みや一人一人の頑張っている姿を伝え、一緒に成長を確認し合えるようにする。 ・感染症などで体調を崩しやすい時期なので、所・園、家庭共に少しでも変化がある場合は連携を密にする。		
評価			

養護のねらい	- 健康、安全などの望ましい習慣や態度を身に付けられるようにする。 - 進級時の一人一人の気持ちを受け止め、安心して自分を表わすことができるようにする。	教育のねらい	☆ 進級の喜びを味わい、新しい環境での生活を楽しみながら、年長組としての自覚をもつ。 ☆ 新しい生活の場に慣れ、友達と一緒に遊んだり当番活動をしたりすることを楽しむ。 ☆ 春の自然や身近な動植物に興味や関心をもって関わろうとする。
環境構成及び援助と配慮	- 一人一人の子どもの健康状態や内面を把握して、新しい環境の中での生活から生じる緊張や疲れを緩和する。 - 生活や遊びの中で一人一人の気持ちや考えを受容し、安定を図ることで新しい保育者への信頼感をもてるようにしていく。 - 自分から友達に関わることをできない子どもに対しては、保育者が声を掛けたりつぶやきに耳を傾けたりして、友達との関係がもてるようにする。 4歳児の時に遊んだ遊具や用具を用意したり、時間や場の設定にゆとりをもたせたりして、安心して遊べるようにする。 ☆ 友達や保育者とともに、所・園生活のきまりや約束事を思い出しながら、年長組になった実感がもてるようにする。 ☆ 異年齢の子どもたちが喜ぶような関わり方を一緒に考え、子どもたちに優しく接しようとする気持ちや態度を育てていく。 ☆ 進級して生活が変わった部分や習慣を知らせたり、安全に気を付けて遊具や用具を使えるよう、所・園生活のきまりを子どもと一緒に再確認したりして、子ども自身が自分で意識できるようにしていく。 ☆ 春の自然の様子に興味がもてるよう、戸外での生活を多くして草花などを遊びに取り入れている姿を認めたり、遊び方を知らせたりしていく。 ☆ 子どもと一緒に畑作りをして野菜の苗植えや種まきを行い、生長や収穫に期待がもてるようにする。 ☆ 新入児や転入児が学級の友達と親しみ、安定できるように遊びの場を設定する。 ☆ 栄養士や看護師、保育者が栄養と体についてわかりやすく話をし、食物や自分の体に興味や関心がもてるようにする。 ☆ 避難訓練や交通安全指導を経験する中で、子ども自らが安全に対する認識や関心を高め、保育者の指示を聞いて行動できるよう繰り返し知らせていく。		
家庭との連携	- 家庭での様子を聞いたり、所・園での姿を伝えたりしながら、年長組になった喜びに共感する。一方緊張感から疲れが出てくるので、健康管理に配慮してもらう。 - 懇談会や送迎時などに幼児の様子を話し合い、保護者の気持ちを受け止めて信頼関係を築いていく。		
評価			

第 17 期	5 歳児（第 2 期） 6 月～ 8 月
子どもの姿	・ いろいろな行事に積極的に参加し、友達と協力するようになる。 ・ クラスの中で今まで関わることの少なかった友達に目が向き始め、一緒に遊ぶことが多くなる。 ・ 鬼遊びやゲーム、リレーなどみんなで行う遊びの楽しさが分かり、遊びを知っている子どもが中心になって、自分たちで遊び出すようになる。 ・ 自分なりにめあてをもち、それぞれが自分のイメージを出しながら遊びを進めようとする。また、友達から刺激を受けて同じようにやってみようとしたり、さらに工夫したりする。
内容	○ 自分の体のことに興味をもち、大切にする方法を知り進んで取り組む。 ・ 汗の始末をする。 ・ 水分を補給する。 ○ 友達との遊びの中で、イメージや考えを伝え合いながら一緒に遊ぶ。 ・ 様々な素材や用具を使って遊びながらイメージを広げ、友達とさらに遊びを発展させていく。 ・ 友達の考えていることを知ろうとし、共に行動することを喜ぶ。 ○ 経験したことや思いを話せるようになり、自分のしようとしていることの理由など分りやすく伝えようとする。 ○ 自分たちの生活や遊びに必要なものをいろいろな材料を組み合わせでつくる。 ○ 積み木・粘土・土・砂などを使って試したり、工夫したりしながら遊ぶ。 ○ 水に親しみながら水遊びをする。 ・ プール遊びに参加し、水に触れたり水の中でいろいろな動きをしたりして水に親しむ。 ・ 水の性質に関心をもつ。 ○ 運動や遊びの中で自分なりのめあてをもって繰り返し取り組み、できたことを喜ぶ。 ○ 曲の感じやリズムをとらえながらいろいろな歌を歌う。 ○ 梅雨期から夏にかけての自然現象や動植物の様子に興味や関心をもち、進んで世話をしたり収穫したりする。 ・ 梅雨 ・ 夏の空、星 ・ 虫捕り ・ 夏野菜の生長、収穫
行事	・ プール開き ・ 夏祭り ・ 七夕 ・ 誕生会 ・ 体位測定 ・ 避難訓練 ・ 保護者参観 ・ 個人面談 ・ 終業式

養護のねらい	・ 一人一人の子どもの健康状態を把握し、梅雨から夏季を健康、安全に過ごせるよう、子どもと一緒に環境を整える。 ・ 一人一人の気持ちを受け止め、友達同士の信頼関係をつくっていく。	教育のねらい	☆ 気の合う友達の中で、思いや考えを伝え合って一緒に遊ぶことを楽しむ。 ☆ 水や砂の特性を知り、友達と一緒に夏の遊びを楽しむ。 ☆ 自分なりのめあてをもって、運動や遊びに繰り返し取り組む。 ☆ 身近な生き物との触れ合いや草花遊び、野菜の世話などを通して、夏の自然に親しむ。
環境構成及び援助と配慮	・ 気持ちの行き違いや思いをうまく伝えられずトラブルが起きた時には、互いに話し合っ - て解決できるよう見守ったり助言したりしていく。 ・ 一人一人の健康状態を把握し、適切に対応したり安全に配慮したりする。 ・ 活動内容や体調に合わせて、水分補給・食事・睡眠・休息などの欲求が適切に満たされ、快適な生活や遊びができるようにする。また、室内の温度調整や水遊び時の休息・紫外線予防や熱中症予防などに留意する。 ・ 梅雨の時期でもあるので、室内でも体を動かして遊べる環境を子どもと一緒に用意していく。 ☆ 友達との関わりを深め、互いを認め合う気持ちをもてるような関係を育てていく。 ☆ 自分なりのめあてをもち、試したり工夫したりできるような教材や環境を用意していく。その中で、自分なりのイメージを出して遊ぶ楽しさが味わえるように、一人一人のイメージを保育者が受け止め、実現できるようにしたり周りの友達に広めたりする。 ☆ 砂や水を使った遊びに親しみ、水の心地良さを味わう中で、砂や水の性質に関心をもてるようにしていく。 ☆ 野菜の収穫や植物の生長に期待をもって大切に世話をする中で、葉の大きさ、結実、色の変化などの子どもの気づきを受け止め、より期待をもって関わられるようにしていく。		
家庭との連携	・ 汗の始末、衣服の着脱などが自分でできるように家庭への協力を依頼する。 ・ 保育参観や個人面談を通して、子どもの成長や子育てについて話し合い、共通理解を図るようにする。 ・ 家族の一員として手伝いをすることが、子ども自身の成長につながることを知らせ、家の簡単な手伝いができるようにすると共に、家族との触れ合いを大切にしよう伝える。		
評価			

第	18期	5歳児（第3期）9月～10月
子ども の姿	・気の合った友達同士からなるグループのまとまりが強まり、ルールをつくって遊ぶようになる。 ・生活経験が広がると共に友達同士の会話が盛んになり、遊びが豊かになる。 ・長い休み明けの幼児もいるが、ほとんどの幼児は所・園生活のリズム（生活習慣・友達関係など）をすぐに取り戻す。 ・友達関係が安定してきたグループは、個々に自分の力を出しながら友達と一緒に遊びを楽しもうとする姿が見られる。 ・知っている人（未就園児、地域の人など）に自分から声を掛けたり、遊びに誘ったりする姿が見られる。	
内容	○ 早寝・早起き・朝ごはんなどの生活のリズムを身に付ける。 ○ 自分から気付いて、汗の始末や衣服の調節をする。 ○ いろいろな運動に興味をもち、力いっぱい体を動かす。 ・運動遊具の使い方が分かり、工夫して自分なりのめあてに向かって取り組む。 ・体を動かす心地良さを味わい、進んで体を動かそうとする。 ○ 団体競技を通して友達と協力したり、助け合ったりしようとする。 ・簡単なルールづくりを楽しむ。 ・自分の力を出したり、相手と競い合ったりする楽しさを味わう。また、チームとしてのつながりや、やり遂げた満足感を味わう。 ・友達と教え合ったり刺激し合ったりしながら、いろいろな運動遊びに取り組む。 ・遊びを通して数や量・速さ・位置関係などに関心をもつ。 ○ 友達と協力して、遊びに必要な物を用意したりつくったりする。 ○ 友達と一緒に遊びを進めていく中で、互いの意見を伝え合う。 ○ 行事に積極的に参加し、自分たちにできる役割を果たす。 ○ 鹿野山宿泊保育を通して、友達との関わりを深めたり豊かな自然に触れたり、いろいろな人と関わったりする。 ○ 身近な秋の自然に親しみ、遊びに取り入れる。 ・色水遊び ・虫捕り ・木の実、木の葉拾い ・球根植え ・自然物をを使った制作遊び（木の実・小枝・芋蔓のリースなど） ○ 収穫の喜びを味わう。 ・サツマイモ ・ポップコーン	
行事	・始業式 ・鹿野山宿泊保育 ・運動会 ・誕生会 ・体位測定 ・避難訓練 ・芋掘り	

養護のねらい	・ 気温の変化に応じて、室温、換気に配慮し、快適に過ごすことができるようにする。 ・ 友達との信頼関係の中で、自分の考えを伝えたり相手の思いを受け入れたりしながら行動できるようにする。	教育のねらい	☆ 共通の目的に向かって、グループやクラス全体で取り組む楽しさを味わう。 ☆ 自分なりのめあてに向かって挑戦したり、試したりする。 ☆ 数人の友達と考えを出し合い、協力して遊びや生活を進めていく。 ☆ 季節や生活の変化に気づき、自然物を使った遊びを楽しむ。
環境構成及び援助と配慮	・ 体の疲れや緊張感をほぐすため、休息や食事をきちんと摂るようにし、暑い時はこまめに水分補給ができるようにしていく。 ・ 気温に合わせて、自分から衣服の調節ができるようにする。 ・ 休み明けは子どもの話題などから会話を広げたり、じっくり話を聞いたりして信頼関係を深めていく。 ・ 自分の力を十分発揮し、やり遂げる喜びや自信をもつことができるよう、頑張る姿を認めていく。また、学級全体で経験したことを遊びの中で繰り返し行えるようにする。 ☆ いろいろな動きや遊び方が楽しめるような環境を幼児と用意し、個々に挑戦意欲がもてるような働きかけをしていく。 ☆ グループやチーム・クラス意識をもち、その中で互いに話し合ったり励まし合ったり、応援し合ったりする姿を十分認めていく。 ☆ 仲間同士教え合ったり、刺激し合ったりしながら目標に向かって努力する経験を通し、目標達成の喜びを共感できるようにする。 ☆ 運動会では、幼児の興味や関心を捉え、内容を一緒に考えながら、みんなで作り上げていけるようにする。 ☆ 子どもと一緒に木の実を拾いに行ったり家庭から持って来てもらったりすることで、自然に対する興味や関心がもてるようにする。集めた物を分類したり飾ったりしながら、名前を知らせていく。また、子どもと一緒に遊びの場を整えていく。 ☆ 遊びの中で場を捉えて、数・量・速さ・位置関係に関心がもてるようにしていく。 ☆ 野菜（サツマイモ・ポップコーンなど）の生長に関心をもち収穫を喜ぶ。 ☆ 草花での色水遊びや虫探しなど自然物と関わって遊ぶ中で季節の変化を感じたり、図鑑で調べたり、試したりするなどの経験ができるようにする。 ☆ 鹿野山宿泊保育に参加し、普段味わえないような野外活動を体験する中で、自然と体ごと触れ合って遊ぶことを楽しめるようにしていく。		
家庭との連携	・ 早寝・早起き・朝ごはんの生活リズムが身に付けられるように、連絡を取り合う。 ・ 鹿野山宿泊保育の取り組みについては、段階を踏んで丁寧に知らせていくようにする。 ・ 子どもの活動に対する取り組み方や成長している姿を保護者とともに大切に見守り、共に喜び合えるようにする。		
評価			

第 19 期	5 歳児（第 4 期） 11 月～12 月
子どもの姿	・クラスや所・園全体の共通の目標に向かって、友達と工夫したり相談したりしながら、力を合わせて最後までやり遂げようとする。 ・詳しい内容の話ができるようになり、遊びの中での伝達や経験の報告も活発になる。 ・グループでの遊びが多くなり互いの意見や考えを出し合いながら、共通のイメージをもって遊びを進めていくようになる。 ・ルールのある遊びの楽しさが分かり、友達と一緒に遊び方を考えたり、作戦を立てたりして遊んでいる。また、競争意識も見られるようになってくる。 ・友達の良いところや得意なことなどを認め合えるようになってくる。また、友達を励ましたり教え合ったりする姿も見られる。
内容	○ 冬の生活に必要な衛生習慣に気付き、進んで行う。（手洗い・うがい・鼻かみ・衣服の調節など） ○ 健康診断や体位測定時に体の話を聞いて、病気の予防に必要なことを知る。 ○ 自分たちの生活に合わせ必要な準備をしたり、片付けたりすることができるようになる。 ○ 友達と共通の目的をもって、協力しながら遊びや活動を進める。 ・学級全体での活動を楽しみながら友達の良さに気付き、受け入れたり認めたりして、つながりを深める。 ・遊びのルールを自分たちでつくり出したり守ったりして遊ぶ。 ・友達同士でイメージの共通化を図ったり、役割分担やルールの再確認をしたりして遊びを進めていく。 ○ 見たこと・感じたことや自分の知っていること・想像したことなどを言葉や動き・音楽・造形などいろいろな形で工夫して表現する。 ○ 自分と違った見方や感じ方に気付き、認めることができる。 ○ 秋から冬へと向かう身近な自然の変化に気付き、自然物を使った遊びを楽しむ。 ・秋の自然物（木の葉、木の実、枝）を使った制作を楽しむ。 ・身近な事物や自然に積極的に関わり、見たり、考えたり、扱ったりしながら物の性質や数量・形の違いなどに気付く。 ・クロッカスやヒヤシンスなどの水栽培を通して生長に関心をもつ。 ○ 時刻・時間に関心をもつ。 ○ 年末の行事を通して新年への期待をもつ。 ・大掃除 ・お楽しみ会 ・もちつき
行事	・生活発表会 ・もちつき ・お楽しみ会 ・バス遠足 ・むし菌予防指導 ・保育参観、懇談会 ・誕生会 ・体位測定 ・避難訓練 ・終業式

養護のねらい	・一人一人が自分の目標をもって活動に取り組み、満足感がもてるようにする。 ・冬の過ごし方を知り、健康に過ごすことができるようにする。	教育のねらい	☆共通の目的に向かって、友達と一緒に考えを出し合ったり認め合ったり協力したりしながら遊びを進める。 ☆秋から冬への自然の移り変わりを感じとり、自ら関わりながら遊びや生活に取り入れようとする。
環境構成及び援助と配慮	・ 冬季を健康で安全に過ごせるように保育室の温度・湿度・換気などに留意する。 ・ 一人一人の子どもの健康状態を把握し、具合の悪い子どもには適切な対応をする。また、具合の悪い時には、自分から保育者に知らせることができるようにする。 ☆ 病気の予防のために、手洗いやうがい・歯磨きなどの必要性やストーブの周りの過ごし方などについて、場や機会をとらえてクラス全体で話し、気を付けようとする気持ちをもたせていく。 ☆ それぞれの子どもの目的やイメージ、実態（技術・理解度など）に即して、物の提示をしたり方法を知らせたりしながら、それぞれの幼児が満足感をもてるようにする。 ☆ 友達同士で思いや考えを出し合う中で、相手の考えに気付いたり受け入れたりしながら、相手の気持ちを考えられるようにしていく。 ☆ イメージを共通化し、自分たちで遊びを進めていけるようにする。また、保育者は互いの思いが伝わるように橋渡しをしたり、遊びが停滞した時には原因を把握したりして、自分たちで解決できるようなきっかけをつくっていく。 ☆ グループの仲間関係や力関係を把握し、一人一人の良さが活かされるように配慮しながら、友達とのつながりが深まるようにしていく。 ☆ 同じ楽器の友達と奏し方や音色、リズムなどを合わせて奏したり、役になってやりとりを楽しんだりしている姿を認めていくことで、表現する喜びを味わえるようにする。 ☆ 友達の姿を見たり聞いたりする場を設け、友達の良いところを認めていく中で、互いに刺激し合い、一人一人が自信をもって生活できるようにする。 ☆ 秋から冬への自然の変化に関心をもち、いろいろな事象や現象に触れる中で様々な気付きや疑問を大切に受け止めていく。また、自分で確かめられるように図鑑や絵本を準備したり、クラスの話題として取り上げ、みんなで考えたり話し合ったりする場を設ける。 ☆ 今日の予定や集まる時間などを知らせ、見通しをもって遊んだり生活したりできるようにしていく。		
家庭との連携	・ 冬に向けて健康で過ごすことができるよう、手洗いやうがい、薄着の習慣をつけていく。 ・ 病気予防のため十分な休息やバランスのとれた食事を家庭でも心掛けてもらう。 ・ 正月休みやいろいろな人と出会う機会を利用し、子どもなりに場に応じた行動が取れるようにしてもらう。		
評価			

第 20 期	5 歳児（第 5 期） 1 月～ 3 月
子 ど も の 姿	・ 自分でできることは進んで最後まで行うようになる。 ・ 生活や遊びに見通しをもって、グループやクラス全体の友達と積極的に活動しようとする。 ・ 友達が頑張っている姿を認めたり相手の気持ちを感じ取ったりして、行動できるようになってきている。 ・ もうすぐお別れという気持ちから年長児として年下の子に優しく接したり、小学校への期待をもって生活したりする。
内 容	○ 冬を健康に過ごすために必要な習慣や態度、生活のリズムを身に付けたり、生活の見通しをもって行動したりする。 ○ 正しい食事のマナーが身に付き、一定時間で食べ終わることができるようになる。 ○ グループやクラスの目的に向かって話し合ったり、力を合わせて取り組んだりしてやり遂げた満足感や達成感を友達と共感し合う。 ○ 自分の考えを出したり、友達の考えを受け入れたりして、協力しながら遊びに取り組む。 ○ 友達と共に遊びの目的に合った材料を選び、その特性を活かしながら工夫したり、最後まで丁寧につくったりする。 ○ 読んだり書いたり数えたりする中で、文字や数・量・形への興味、関心をもつ。 ・ 自分の名前が書けるようになる。 ・ トランプ・かるた・すごろくなどで遊ぶ。 ○ 感じたことや想像したことを、言葉や動き・音楽・造形などで自由に表現をして楽しむ。 ○ 修了を意識し、入学への期待をもって行動する。 ・ 4 歳児に当番活動や仕事内容を知らせ、引継ぎをしていく。 ・ 作品・所持品の整理や使用したロッカー・保育室の掃除を行いながら修了が近いことを実感する。 ○ 冬から春への自然の移り変わりに興味や関心をもつ。 ・ 植物の生長や木々の芽吹きに気付いたり、日だまりの暖かさを感じたりする。
行 事	・ 始業式 ・ 鏡開き ・ 節分 ・ 誕生会 ・ 体位測定 ・ 避難訓練 ・ ひな祭り ・ お別れ会 ・ お別れ遠足 ・ 懇談会（就学に向けて）・ 個人面談 ・ 一日入学 ・ 修了証書授与式 ・ 離任式

養護のねらい	・ 小学校に行くことの喜びと不安を受け止め、自信をもって修了することができるようにする。 ・ 季節の変化に留意し、快適に生活できるようにする。	教育のねらい	☆ クラス全体の課題や目的をもって意見を出したり、協力したりして遊びを進め充実感を味わう。 ☆ 一年生になる喜びと自覚をもち、自分たちで遊びや生活を進める。 ☆ 冬から春への自然に興味や関心をもつ。
環境構成及び援助と配慮	・ 入学に対して不安を感じている子どもには、丁寧に関わりながら安心できるように援助していく。 ・ 気温の差が大きい時期なので、保育室の気温や暖房の温度・湿度・換気などに気を配り、快適に過ごせるようにしていく。 ・ 基本的生活習慣について、一人一人の状況を把握し再確認したり個別に指導したりしていく。 ☆ 共通の目的に向かって自分たちで相談して進められるよう、話し合いの筋道を必要に応じて投げ掛け、友達の良さに目を向けるきっかけをつくっていく。 ☆ 文字や数字に関心をもち、友達同士で教え合ったり刺激し合ったりする姿を大切にしながらさらに関心が広がり、自分の力として習得できるよう、文字の読み方・書き方・数の概念などについて、遊びや生活の中で知らせていく。 ☆ 課題をもって取り組んでいる子どもに対して考えや行動を認め、今までの経験が生かせるような投げ掛けをして、自分なりに取り組んでいけるように援助していく。 ☆ もうすぐ一年生になる喜びや緊張感を受け止めながら、修了までの予定や流れを表示したり必要なことについて話し合ったりして、見通しをもって進められるようにしていく。 ☆ 小学校についての話（身支度、給食、登降園、所など）をする中で、期待をもつことができるようにしていく。また、必要な物の用意を自分で行おうとする意識を高めていく。 ☆ 修了を迎え、自分たちを見守りお世話になった人達に、感謝の気持ちがもてるようにしていく。 ☆ 冬ならではの自然に親しむ機会を逃さず、様々な体験ができるようにしていく。 ☆ 暖かくなってきたことや木々の芽吹きなどを通して、春の訪れを感じ取れるようにする。		
家庭との連携	・ 子どもが小学校に行くことに期待と希望をもてるような関わりについて知らせていく。 - また、入学に対して保護者が不安や緊張をもたないように、具体的な内容を知らせていく。 ・ 生活に必要な物を子ども自身が保護者に伝えて持参するなどの経験をしながら、少しずつ自分でできるよう家庭と協力していく。		
評価			